東・西日本リアリズム演劇会議合同機関誌

演劇会議

戯　曲　特　集

別冊4について……萩坂桃彦……1
『海の墓』……黒沢参吉……2
『選挙狂騒曲』……栗木英章……18
『花　火』……小島真木……35
『　河　』……土屋　清……47

別冊
4

1975年2月　　¥350

年商100億の企業化を目ざす
華勝楼チエーンがフレッシュな
人材を求めております
—（浜松には劇団からっかぜがあります。文化不毛の地といわれている浜松に新風を吹きこんで下さい）—

中国料理
浜松華勝楼

本　　店　浜松市有楽街　TEL（0534）53—6532・6534
サゴー店　浜松市モール街　サゴープラザ地階
西 武 店　浜松市鍛治町　西武デパート地階
天 竜 店　浜松市西鹿島　天竜オークラ・ボール内
食品工場　浜松市馬込町231

別冊4について ―― 解説的に ――

萩坂桃彦

久しぶりに戯曲集が出せることになった。ひとつには編集方針に驕りがあって、戯曲集には一幕物の精髄をなどと考えていたものだから、それもブレーキになった。

事実は、われわれの創作劇の生産はなかなかさかんであって、とくに西リ演は年間十数本、東リ演でも十本近い。東日本演劇フェスティバルでの、道演集からの六本の創作劇なども壮観であった。だから嘘にも不振などと云えないのであるが、しかしそれがそのまま、本当に、その集団の自足的なサイクルから踏み出した、われわれ共通の仕事としての旗幟となり得ている本がいくつあるかとなると、これは容易ではない。

創作劇が上演される段階で集団によって殆んど台本としてプリントされるので「演劇会議」はそれの複写である必要はないだろうと思う。また例えば、こばやし・ひろし氏の「ひしめきあう不毛の季節から」のように既に独立して大量に売れているという例もある。そんな訳でこの小さな戯曲集の性格もあいまいになってくるのだがひとつには、どうあれ、われわれの一致した評価の作品の紹介、もうひとつの面では、やはり、一幕物による作者の新しい挑戦を促進せしむる場の提供、ということに限られてくるようである。

土屋清氏の「河」は、われわれの築いた貴重な砦の一つとして残す必要があるし、小野宮吉戯曲平和賞という一般的の評価もある。七四年から七五年にかけて、時ならぬ「河」の上演が相次いでいるが、本誌はその時潮におもねったのではない。掲載をきめたのは、こうなる前の話である。

それにしても、こんどの殆んどブームに近い「河」の上演は何を意味するか。興味もあり、また極めて大切な問題だ。作者をクローズアップするだけではすまないだろうと思う。本質の究明に本誌を役立ててほしいと思う。

東リ演の、黒沢、栗木、小島の三氏の登場からは、いわば「復調」の音をききとってほしい。28号の作間氏も加えて、またさいきんのこばやし氏の活動を柱にしながら、東リ演にも屑っていた陽がさし始めた感じである。栗木氏はまだ荒っぽいが、彼の不断の「攻撃姿勢」は貴重である。

「河」が早くきまっていたために、東リ演の三氏にはかなり追込みをかけてしまった。おそらく釈明があると思うけれど、この判断は読者に委ねたい。

一九七五年が来た。七〇年代も後半にはいるわけだ。あらゆるめんで「破壊」が爪を立てて襲っている。集団にも、個人にも。従ってわれわれの運動にとっても、きびしい試練の年となりそうだ。

ここで作者たちが、奮い立たつのは、理を得ていると思う。

1974年上演創作劇一覧（東西リ演，道演集，東働演）

1月 **海を見ていたジョニイ** 五木寛之作・爪生正美脚色演出（青年劇場）
風成の海騒く 勝山俊介作・爪生正美演出（青年劇場）
河ひらく時代 田畑実作・早川昭二演出（京都新劇合同）
2月 **俺たちのペガサス** 京浜協同劇団20期生集団創作（京浜）
3月 **よろしやん山河** 長谷川伸二作・堀江ひろゆき演出（劇団大阪）
綿ぼこの中の小さな草たち 小島真木作・西嶋太演出（静芸）
カエルとおてんとうさま かたおかしろう作・深海ひろみ演出（2月）
4月 **大いなる樹木** 矢野喬作・倉多真演出（土の会・再演）
河 土屋清作・演出（月曜会・再演）
5月 **立ちんぼうの詩** 林田時夫作・赤松比洋子演出（南大阪劇研）
霧山侍 坂本忠士作・尾瀬明演出（こじか座）
長田の娘たち 美奈川とおる作・合田幸平演出（どろ）
客 中野靖作・のむらたつや演出（労芸）
6月 **平沢計七**（改稿） 立川雄三作・大内三郎演出（未踏）
7月 **黒い古城** 川口半平原作・こばやしひろし脚色・演出（はぐるま）
8月 <東日本演劇フェスティバル参加作品>
ある遅い出発 石上慎作・扇谷国男演出（河童）
波濤 村中昭一作・坂井弘治・宮津泰子演出（うみねこ，新芸，波）
神威の炭山 なかむらひろし作・演出（釧路演集）
雪夜 作間雄二作・塚田恒夫演出（埼芸）
御農場 田中和夫作・関口栄一演出（さっぽろ，新劇場，にれ，統一座）
矢不来 田中孝太郎作・福島康演出（函館創芸）
9月 **螢を殺すな** 清水巌作・仲武司演出（関西芸術座）
10月 **雪の下の詩人たち** 大垣肇・小関智弘作・早川昭二演出（鋼鐵）
母の手 瀬戸洋作・真部利治演出（十年実）
11月 **人形師卯吉の余生**（続演） 田畑実作・演出（人間座・府民劇場）
焼跡お蝶始末記 柴崎卓三作・道井直次演出（関西芸術座）
一銀堀り 猿渡公一脚色・演出（現代劇場）
医学事始 木村次郎作・風見鶏介外演出班（群馬中芸）
ちびすけ兎のカルロス・ロサリーヌ 中村歓一作・鈴木四郎演出（群馬中芸）
俊寛 高松昌治作・大岡欽治演出（潮流）
902番船，進水！ 集団創作・中沢研郎演出（京浜）
ひしめきあう不毛の季節から こばやしひろし作・演出（はぐるま）
ふみだちこの青春 杉森正美作・演出（上野市民劇場）
筑後川異聞 高尾豊作・猿渡公一演出（現代劇場）
選挙狂騒曲（サラリーマン物語） 栗木英章作・浦はじめ演出（名芸）
12月 <東京働くものの演劇祭参加>
父さんもっと自分のことを話せよ よしだはじめ作・倉多真演出（土の会）
天保役者始末記 岡安伸治作・演出（世仁下之一座）
人間乾期 芳地隆介作・大島紀一郎演出（通電合同）
青春をトラックにつんで 高桑かつみ作・小坂忠，山田善靖演出（民衆劇場）

備考 資料不足のため不完全なところがあると思います。とくに専門劇団にはおわびをいたします。これは概況として参考にして下さい。

海の墓

一幕

黒沢参吉

―　年輩の男のこえで、長持唄。

―　この街の、臨海工業地帯の一角にある、石渡家。舞台はカミ手から、母屋の一部と庭と土蔵からなる。母屋の見える部分は、シモ手に出入口のある広い玄関で、手前に玄関の間、その先にカミ手へのびる廊下、奥手に二階（そのものは見せない）への階段がある。庭をはさんだ土蔵には、かっての家業の名残りの漁具のかずかずが、ところせまく置かれ吊られている。土蔵の背後の壁は、照明によって、昔の蒼い海をうつしだすことができる。

―　背景は、掩いかぶさるように巨大な工場群。その鉄骨や支柱やパイプや煙突は、随所にとりつけられた電灯の明滅、進行中間歇的におこる電気溶接のスパーク、鉄をうつ響音、蒸気の噴出音などで、奇怪な生命感を与えられている。

―　秋の夜。

―　うす暗い土蔵には竜蔵がひとり、万年床に臥せている。母屋は空虚。やがて、廊下をカミ手から、一人前の黒塗の祝膳をもった洋子に、チヅと雅代が絡みあうようにしてくる。

チヅ　だめ、だめだったら、叔母さん。

雅代　いいからよこした、洋ちゃん。私がもってってやる。

チヅ　何てわからない。おじいさんのとこへは、この洋子しか……姉さんだってよせつけやしないんだから。

雅代　そりゃ無理もねえこったわ。……いくら家督ゆずった、隠居したったって、この石渡の家の土台築いた人だぞ。ほんとなら今日あたりの棟あげの祝いにゃ、床（とこ）の前に坐らせてあげるんが子の務めだ。……それを厄介ものあつかいで、土蔵なんぞへ押しこめられてりゃ、うらみに思うんがあたり前だわ。

チヅ　へえ。叔母さんがそんなにおじいさんのこと、気づかってくれてるとは知りませんでしたよ。

雅代　妙な言い方するじゃないか。竜蔵さんは、私にとっちゃたった一人のきょうだいだよ。お互い気にかけあって、どこが不思議だっていうだい。

チヅ　結構ですよ。……折角のお目あてが外れなきゃ、なお結構だけど、だいぶ呆けちゃってますよ、この頃のおじいさん。

雅代　ひとの節介より、チーちゃん、私だって盲じゃねえだよ。お前さんが誰に色目つかって何狙ってるかぐれえ、チァンと……

チヅ　さっさと持ってっておもらい、洋ちゃん。……そのかわり、乱暴なことされたって知りませんからね。

―　電話のベル。

チヅ　（階段下の電話へ）……はい、さよですが、どちら……ちょっとお待ちを。（二階へ去る）

雅代　本当に暴れるだかい、おじいちゃん。

洋子　前のころはね。でも、洋子が行けば、優しくなる。

雅代　フーン。

洋子　似てるんだって、死んだおばあちゃんの若いじぶんと。

雅代　お恵さんと。……よ、一緒に来とくれ。

―　洋子、雅代、土蔵へ。

―　二階から、正二郎。

正二郎　（電話へ）もしもし、私だが、どうした。……おかしいじゃないか、急に来れないなんて。……どこが？　歯？　虫歯なんぞビールでうがいすりゃなおっちまうよ、君……。

雅代　こんな蔵の中へ年より閉じこめて、世間が何ていうか。

洋子　此処が好きなんだ。

雅代　そんな訳がないだろ、一人ぼっちで。

洋子　好きなんだよ、ひとりが。

正二郎　……誰も来ちゃおらんよ。曽根君も妻君が急病、申しあわせてるんだろ、君たち。……いい加減なこと言うなよ。要するに、本社からお叱りうけて落目になった課長の家なんかにゃ、君子危うきに近寄らず、そういうことなんだろう。

洋子　（蔵の扉をあけて、中へ）おじいちゃん。

雅代　（続いて入る）おお、臭い。

洋子　おじいちゃん！

竜蔵　……洋子か。

正二郎　もういい、もういい。言いわけは沢山だ！　（電話をきる）

マキ　（二階からおりて来ていて）みっともないじゃありませんか、大きな声。……ことわってきたんですか、荒木さんも。

正二郎　失敬な奴だ、見えすいた嘘つきゃがって。

マキ　太田さん、曽根さん、荒木さん。腹心の部下なんて言ってらしたのが、一人も。

正二郎　こんな頼りない奴とは、おもわなかったがな。

竜蔵　だれか居るのか、そこに。

雅代　私だよ、兄さん。まさでさよ。

竜蔵　誰だと？

洋子　（竜蔵を起こしてやる）南新田のおばさん。

雅代　何とこりゃ、テレビにでてくる座敷牢そっくりだわ。

マキ　皆さん吃驚したんでしょ。今朝の新聞で。……総務課長、土下座して謝まる、ごていねいに写真まで。……息子でさえ、体裁わるいって帰って来ないんですもの、まして……。

正二郎　そんなこと言ったのか、和夫は。

マキ　そうにきまってます。

竜蔵　何の用だ？

雅代　用って程のこっちゃないだが、どうしてなるかおもってよ。

竜蔵　用もねえのに、ノコノコ来たってか？

正二郎　たあに、あんな二股骨楽ども来なきゃ来ないで結構。

マキ　冗談じゃありませんよ、仕出しのお膳十人分も余らせちまって。だから、並でいいでしょっていうのに、あなたつまらない見栄はるから。

正二郎　莫迦。部課長よぶのに、ケチな祝い膳だせるか。

マキ　そう仰云るから、こんな大げさになっ

ちまったのに、かんじんのその部長さんまで……。

正二郎　急な社用で韓国へ行かれたんだ。こいつばかりは……桜井部長が居てくれりゃ、大体あんなお鉢がまわってくることもなかったんだ。きのうの漁業連合会との交渉にゃ、部長が出席される予定だったんだから。

竜蔵　何だ、この膳は。

雅代　何も知らんだね、兄さんは。あっちでうたう声がきこえたろうが……。

竜蔵　何の祝いだ？

洋子　誕生日だ……兄ちゃんの。

竜蔵　和夫のか。

正二郎　私が班をしのんで、漁連の代表に頭をさげたのは、会社のため、ひたすら会社のために丸く収めたかったからなんだぞ。……それを本社の奴ら、工場の実情もロクに分らんくせに……。

雅代　こうやって兄さんの世話やいてると、ほんとにこの子、若いころのお恵さんと瓜二つだよ。

竜蔵　あっちへ行ってろ、洋子。

雅代　あれ、なに癇たててなる、兄さん。

竜蔵　いいから、行け。

マキ　その話、もう充分伺いました。今さら百万辺グチったって、元に戻るわけじゃなし、部長さんがお帰りになったらとりなしをお願いして、一緒に謝まって頂いて……

正二郎　どういう訳で、私が謝まらなきゃならんのだ。何を悪いことしたというのだ。

マキ　悪いとか悪くないとか言ってやしません。でも、奇蹟でもおこらない限り、下の人が上の人に謝まるしか世の中うまくいかないんじゃありませんか。せめて、和夫が大学出てチャンと就職できるまで、妙な我をはっていただいちゃ困ります。

―　土蔵を出た洋子、庭の植込みの中にひそんでいた男（姿は見えない）に、きき腕をとられる。

洋子　ああッ！　（茂みの奥に曳きこまれ、姿は見えなくなる）だれ……センちゃん？　いや……あうウ（口をふさがれたらしい）……！

竜蔵　何狙ってやって来たか、知らねえが、金なら、あのとき、海の補償金がおりたとき……チャンと、分けてくれた筈だぞ、お前にも。

雅代　誰が金のことなんぞ言ったよ、そんなさもしい話で来たんじゃねえだに。

正二郎　……そうだ、蔵へも膳を一つもたしてやった方が……。

マキ　さっき洋子に運ばせました。誰も忘れちゃいないのに、おじいさんはどうするのなんの、チヅも南新田もうるさいこと。

洋子　いや……よして……。

正二郎　チヅのとこは、亭主よんでやった方がよかったかな、もう帰ってるだろう、電話して……。

マキ　身内は身内で、落成祝いなり引越祝いなりキチンとやります。チヅと南新田は手伝いによんだだけ、けじめのつかないのは嫌いですからね、私。……いいからあなた、皆さんのお相手を……。

―　電話。

正二郎　またか。……お前出ろよ。

マキ　（受話器をとって）……はい、石渡でございます……。

竜蔵　なに狙ってやって、来ようと、おれはもう、見たとおりの裸ン坊だ。洋子にせびられて、たまに小使銭くれるんが、関の山

だ。

マキ　あなた、フルタさんとかって。

正二郎　フルタ……どこの。

マキ　ご自分できいてください。

正二郎　（電話へ）もしもし……。

チヅ　（二階から）困るじゃないの、姉さん。ホスト役が揃って消えちまっちゃ。

正二郎　え、降旗さん？　こりゃ失礼。……資材課の……。

チヅ　また、ことわりの電話？

マキ　つきすぎてやしないこと、お烟。（二階へ）

チヅ　フン、更年期……。（廊下カミ手へ）

竜蔵　誤救しに来たのか、お前。

雅代　ものの道理を話してるんですよ、私や。こう見たとこ体案配も良かなさそうだが、そんな兄さんを、このむさ苦しい薄暗い蔵の中へ押しこんで……。

竜蔵　なあに、おれは……。

雅代　風の噂にゃ聴いてたが、これ程ひどい扱いされてるとは知らなかったに。テレビや新聞でも、この頃は年よりを粗末にする邪魔にする話ばかりだが、本当にこれじゃ昔ばなしの姥捨て山……。

竜蔵　やかましい婆あだな。此処がいいんだ、おれは。

雅代　何だって？

竜蔵　この中が、いちばんせいせいするから、おれは、此処にいるんだ。

雅代　……へえ。

正二郎　……君は、私をからかってるのか。私はね、それが不都合だ、怪しからんて本社から遣賃くったんですよ、君……。

洋子　だめだってば、セン……（忍び笑い）

竜蔵　あやつらにゃ、何にも分らねえ。以前の屋敷は、不便だの体裁わるいだの言って、土間にゃコンクリ塗って、囲炉裏も小二階も戸障子も皆とっ払って、ベニヤ板とビニールの箱に改造しちまやがった。山茶花の垣根までひっこぬいて、ブロック塀で囲って……今式になったって、あやつら欣んでるが、つまんねえもんだ、あんなものは、コンクリだのベニヤだのビニールなんてものは、皆死んだもんで、何の匂いもしやしねえ。

正二郎　……そうなんだ、そこが言いたいんですよ、私も。あの場合、他にどういう応待ができます？　会談を約束していた担当部長が緊急の海外出張で、なんて言いわけが、頭にきてる代表団に通用するもんか。かりに部長が居られて、応待したって、私がやったように頭下げるしか、平身低頭謝まるしか道はなかったんです……。

竜蔵　それから、此処へ来ちまったのよ。世間が何て言ってるか知らねえが、このヤノ竜が、銭捻なんぞへ棄てられてたまるか。おれが、あやつらを、棄ててくれたのよ。

雅代　相変らず、可愛げのねえ……。

竜蔵　この蔵の中にゃ、匂いがある。潮の匂い、魚の匂い、船の匂い、風の匂い……。

雅代　たまにゃ風通さねえと、体に毒だべ、この臭い匂い。

正二郎　……そうとも、現にたれ流しの工場廃液から、微量とはいっても有機水銀が検出されているんだから、その尻尾つかまれているんだから。……それだのに、漁連の連中に謝った私が怪しからん……これが、本社の見解なんだ。どうですか、君……。

竜蔵　あの櫂は、おれとお前の父っあんが、はじめて自力でもち船にした、崎洋丸のボートの櫂だ。その脇の、折れた帆桁は、三宅島の先で難破した、勇次の乗ってた第二竜神丸の帆桁よ。その先にぶらさがったカンテラにゃ、ガダルカナルで死んだ信一のいたずら書きの名が、いまも遺ってる。…

…あやつらにゃ、三文の値打もねえガラクタだが……。

雅代　そりゃよ、勤め人の婿さんに漁師の気っ風、分かる筈はねえだに。何だってかんだって、やることが違うだから。……おぼえてなるか、兄さん。この屋敷新築したときの賑やかし。北は宍森から鮫州、西は生麦から磯子まで、主だった網元衆船頭衆がヤノ竜の普請だいって、一人残らず寄ってくれた。此処にゃ入りきれなくて、その筋向うにあった漁業会の倉庫まで借りて……盛大なもんだったねえ。

竜蔵　ありゃ……三十六年前だ。

―　チヅ、カミ手から銚子の盆を二階へはこぶ。

正二郎　……いや、君のような公正な考えをもった人が、わが社に居てくれたとはねえ、嬉しい、嬉しいな、私は。……なにしろ私が本社の逆鱗にふれたときくと、昨日までの同僚や部下がパッと手の平かえすように、態度を変えちまうんだからね。だのに、君は、一面識もないよその課の私に、こうやって……いやぁ、嬉しいですよ、私は……。

洋子　ああ……センちゃん……。

竜蔵　何だ、和夫の誕生祝いじゃ……。

雅代　兄さんが痛ましくって、そんな出まかせ言ったんさ、洋ちゃんも。

正二郎　……え、どこから、万年堂？　何だそれじゃすぐそこじゃないか。そうですかって、そうですよ、五分もかかりゃせん。……そうだ、恰度いい、今夜は内輪の祝いごとがあって今始めたとこだ。君も来たまえ、来てみんなにきかせてやってくれたまえ、君の意見を。……道は、その万年堂できけば教えてくれる。土蔵のある石渡、古い土蔵が目じるしだ。

竜蔵　東禅寺？　東禅寺に買ったのは、ありゃ山だぞ。

雅代　十五年前にゃ山でも、今じゃ開発がすんで一等地だに、あの辺は。

竜蔵　その東禅寺へ、何を建てるだ？

雅代　やれまあ、まるきりのつんぼ桟敷で、兄さんは何ひとつ相談うけちゃいないだねえ。

竜蔵　あやつらが、おれに何相談する。

正二郎　……ああ、待ってるぞ、君。（電話をきる）

チヅ　（二階から）だいぶ弾んでましたね、お話。

正二郎　いや妙なものさ、捨てる神あれば拾う神あり。きのうから孤立無援でいささか参っていたんだが、思わぬところに理解者がおってね。

チヅ　それも男の甲斐性、義兄さんの人徳ってもんでしょ。

竜蔵　第一、東禅寺の山に、炭焼小屋たてようと、別荘たてようと、おれにゃ関わりのねえこった。

雅代　それが、関わりありそうだもんで、心配しているんだがね、兄さん。

チヅ　義兄さんにひきくらべて、うちなんかときたひにゃ……。

正二郎　嫁さんのあんたがそう言ったんじゃ、実君立つ瀬がない。彼なりに一生けんめいやっているんだから。

チヅ　一生けんめいやる程、損するんだから不思議じゃありませんか。いくら力んでも運がつかなきゃ駄目。いまのプレートの仕事だって、もう一息ってとこへ大手の業者が割りこんできてダンピング。せめて、この冬越すだけの金繰りがねえ……。

竜蔵　何だあ、此所の家屋敷を……嬶つけ。

雅代　兄さんに嬶言ってきかせて、何の得になるだね。

チヅ　二、三ケ所割と有望な引合いもきてるし、春までねばれば今までのストックも回転するし……。

正二郎　そう、そのねばりが肝心。そうすれば思わぬとこから加勢もあらわれる。

チヅ　それまで、二百万か三百万。ええ、三百万あったら……。

洋子　くすぐったい！　……あらァ、あんなとこに、月。

雅代　土台、ここ売らないでどこから二千万もの普請代ひねり出せるだね。総務課長なんていったって、たかの知れた月給とり。

竜蔵　東禅寺の山は、かれこれ千坪だ。半分手ばなしたって、新築の一軒や二軒。

チヅ　一度、ゆっくり話きいてくださいな、義兄さん。

正二郎　そりゃ、いずれ……いや、今夜実君にも来て貰やよかった。

マキ　（二階から）あなた……あなた！

チヅ　きいて頂きたいの、私の話ですわ、義兄さん。（カミ手へ去る）

洋子　旅？　旅って、どこへ……

雅代　東禅寺の地面てものは、握っていれば

いる程値あがりするんですよ。ところが、この辺じゃ住む人が年々減って、地価も下がる一方。どっち手離すっていえば……。

マキ　何話してらしったんです、チヅと。

洋子　カッコつけちゃって、嬶だろ。

マキ　ご存知でしょ、あれの病気は。

洋子　ほんと？　何やったの、ヤバいことって？

マキ　実さんてひとが居るのに、ちょいちょい不潔な噂たてられて。……あれにゃ気をつけていただかないと……。

洋子　ある。……あれ、落っこちてない、洋子のお財布。

マキ　きいているんですか。……何処へいらっしゃるんです？

正二郎　（吐鳴る）トイレだ！　（去る）

マキ　……ま！

洋子　あった？　いいよ、全部もってって。

竜蔵　それで、此処を売ったっていうのか。

雅代　そうだよ、売ったんだよ。

―　カミ手から、チヅ。

マキ　ちょっと、あんた何したの、うちのひとに？

チヅ　だしぬけに何よ、姉さん。

マキ　ごまかしても駄目。何してたの、此処で二人で。

チヅ　笑わせないでよ、木仏金仏じゃないのお宅の旦那さま。

マキ　私にむかって、吐鳴ったんですよ。普通であんなことのできる人ですか！

チヅ　バカバカしい。（二階へ）

マキ　チーちゃん！　（追って二階へ）

洋子　足んないったって、それしか……それしか持ってないもの、洋子。……え？

竜蔵　だれに……（雅代の手首を摑んで）だれに売ったっていうだ？

雅代　痛い、痛い！

竜蔵　こら、ぬかせ！

雅代　言う、言うがね。……何でも日本鉄鋼の下請で、東海何とかって会社だわ。

竜蔵　日本鉄鋼の、下請会社？

雅代　ああ。……おお、痛え、クソ力……。

洋子　いや、もう厭だ、あんなことするの。

雅代　似た者夫婦でひと言も洩らさねえが、此処売ったらば、土ものはともかくとして、地面が二百七十坪ちょっと、かりに四十万としたって一億超えるわけだよ、兄さん。

竜蔵　その下請じゃ、此処を……
洋子　いやだ、センちゃん、そんな意地わる言っちゃ。
雅代　いくら、兄さんが隠居しなったからって、一億からの財産相談なしに処分しちまうなんて、だいたい婿に入った者として道理に外れてる、そうじゃないかね。
竜蔵　何につかうだ、此処を……。
洋子　厭だってば、あんなこと。洋子、センちゃんの犬じゃないよ！　……ッ、痛ッ！
（また、口をふさがれたらしい）
雅代　だいいち、私だって、この家から嫁にいった人間として、ひと言ぐれえ相談うける資格があるだからね。民主主義なんだからよ、日本は。兄さんは漁業補償のときの金、分けてやった言いなるけど、あれとこれとは……。
竜蔵　やかまし！　ピーチクピーチク。此処をどうするって、その下請じゃ。
雅代　何やら、クズ鉄の、そらスクラップの設場とかに使うだって。
竜蔵　スクラップの、設場だ？
洋子　やるよ、センちゃん……やるから。離して。
竜蔵　そしたら、どうなる……この蔵は。
雅代　蔵？　そりゃ、こんなもの……。
竜蔵　あやつらにゃ。三文の値打もねえが、おれにゃ……。

―　茂みの中から、洋子。

洋子　（乱れた服装をなおす）……センちゃん、こんな風におもうときないか。ヒョッとしたら、今の毎日が夢か何かでさ、或る朝はやく目がさめたら、別のさ……ゼンゼンちがう自分がいて。

―　ジェット機の爆音。

雅代　だけどよ、東禅寺の家が建てあがりゃ此処ひきはらって移るだもん、この土蔵だって、いずれはこわされるべよ。
竜蔵　此処を、こわすだと。

―　洋子、庭から玄関へ戻る。電話台の傍の壁にさがった三、四着の来客のコートに素速く近づき、そのポケットをさぐる。が、ほしい現金は、ない。

竜蔵　この蔵は……そんなこと、させるもんか！
雅代　どうかね、あの衆が兄さんの言うこときいてくれるかよ。

―　客Aが、半開きの玄関から首をのぞかす。

客A　あの……。
洋子　！　（コートからとび退く）
客A　石渡さん？
洋子　……（辛じて、頷く）
客A　降旗です、ぼく。

―　洋子、二階へ。

雅代　さっきから聴こえたべ、あの衆のうたってなるのが。棟あげ祝いっていうが、実は此処をあの衆にひきわたす契約がまとまった、その祝いなんだわ。日本鉄鋼のエライ衆。東海なんとかのエラい衆、それに橋渡しした星野組の社長さん、皆たいへんなご機嫌でうたってなさる。

―　洋子、二階からおりてきて廊下をカミ手へ。つづいて、マキ。

マキ　いらっしゃいまし、どうぞ。
客A　あの、ぼくは……課長にちょっと。
マキ　いま参りますから、おあがりになって。
客A　いえ、此処でいいんです。
マキ　そんなあなた、上で皆さんもうお始めになってますから。
客A　ぼくはただ、新聞で石渡課長のきのうの交渉のこと読んで、それで感激……というか、感動したもんで……。
マキ　はあ……。
雅代　昔の海だの、その海で死んだ若のおもい出だの、正二郎やあの衆に何の値打があろうかい。あの衆がほしいのは、屋敷も土蔵もとっぱらった此処の裸の地面だわ。
竜蔵　おれは、あやつに、全部譲ってくれた。この屋敷も、証券も、東禅寺や篠原の地面も。……そのかわり、約定したんだ。この土蔵にゃ指一本触れるな、そこの扉から此方にゃ一足も入るな、蔵の中は、おれのかまちだ、おれの死場所だ。
雅代　総ヒノキ　二階建のあの母屋でさえ、借し気もなくこわしてしまうあの衆が、どうしてこんな古ぼけた土蔵を残しておくかね。正二郎とのロ約束なんぞ、屁のつっぱりにもなりゃしまいよ、兄さん。
竜蔵　そんなこと、させるもんか。（立ちあがる）おれの目の玉の黒いうちは……。
雅代　どうしょうっていうだよ、危い。
竜蔵　絶対、勝手に、させるもんか！　（はげしく咳きこむ）
雅代　兄さん……。（背をさする）

―　カミ手から、正二郎と洋子。

洋子　おねがい、一万円だけ。
正二郎　東禅寺には洋子の勉強部屋も、兄さんと別に一部屋つくった。南向きの明るい部屋だ。
洋子　どうしても要るの、一万円。
正二郎　此処とちがって東禅寺は、空気も旨い。武蔵野の面影がのこっている。田園のくらしは夢だったんだ、お父さんの。
洋子　これっきりだから、一万円。
マキ　あなた！
正二郎　新しい家で新しい生活だ。洋子も落ちついて勉強すれば、また成績もあがる。そしたら大学へだって行かせてやるぞ。
洋子　後生だから、一万円。
マキ　（玄関から来て）何です、洋子。

―　洋子、カミ手へ逃げ去る。

マキ　……この頃のあの子、変だとおもいませんか、あなた。
正二郎　環境が悪いんだ、環境が。あっちへ移れば、空気はきれいだし、住んでる人も会社の幹部とか大学教授とか芸術家とか、皆エリートばかりだから。
雅代　……どれ？　これですか。（吸入器を竜蔵にわたす）だ、大丈夫かよ、誰か呼ばなくっても……。
竜蔵　……（耐らぬという身ぶり）
正二郎　誰か来てるのか？
マキ　あなたがお呼びになったんでしょ。誰です、あの人。
正二郎　あ、あ。（玄関へ）……やあ、お待たせしました。
客A　ぼく、お邪魔だったら……。
正二郎　何を、君。さ、あがってくれ給え。（マキに）おい、膳を二階へ。……そら、遠慮しないで、フルタ君。
客A　ぼく、降旗君。
正二郎　うん、降旗君。きみに逢わせたい人物が上にいるんだ。君の公正な意見を聴か

せてやりたいんだよ、彼に。というのは、彼は私が莫迦げたミスをやったと……（二階をうかがって）お、来た来た、ご本尊が。

―　二階から、客B。

正二郎　なんだ、星野君、あんた帰るつもり？

客2　ノオノオ

正二郎　紹介しよう。この人物は……。

客2　ちょっと、待ってくれ。（カミ手へ）

正二郎　あれはね、うちの会社へ入ってる星野組のおやじでね、いい男だ。いい男だが彼は要するに、私が重大な失敗をやった…

マキ　（勝をもってくる）こんなところであなた、みっともないじゃ……。

正二郎　うるさいな、お前は。

マキ　星野さんは、あなたのこと心配して仰云って……。

正二郎　分ってる、そんなことは。……だがいずれにしても、私が失敗したときめてかかってるんだ。

マキ　ご自分が仰云ったんじゃありませんか、失敗したって。

正二郎　莫迦！　私が、そんなこと言うわけがないじゃないか。……本社がそう言ってきたんだ、本社が。漁業連合会の連中にいくら吊しあげくったからって、突っぱねるなり逃げるなり引きのばすなり言いくるめるなり、交渉のしようはあった筈だのに、連中の言いなりに土下座して謝まるとは何ごとか。それじゃ、第一プラントの廃液を運河へたれ流してるという奴ら抗議を、そのまま認めた、認めて謝罪したことになる。これは、わが社の信用を台なしにする重大な失敗だ。

客A　（大声で）それは、本社がまちがってます！

客B　（カミ手から戻ってくる）ああ、吃驚した。……何がまちがっているって？

正二郎　本社がさ。

客B　本社の何が、まちがっているんだ？

客A　石渡課長のやられたことは、正しいんです。漁連の人たちの抗議に、そっちょくに事実をみとめて、謝まられたでしょう。それこそ、立派な態度だったとおもうんです。ぼくは、正しいだけじゃなくて、勇気のある行為だと言いたい位です。

正二郎　どうだね、同じ会社の中に、こういう見方をしてくれる人がいたんだよ。私が本社から叱られたときいただけで、どっちが正しいか考えてもみないで、尻ごみして今夜の祝いも欠席する、こういう意気地のない連中と比べて、同じ若い者でも何たる違い！　私は、この降旗君のような部下をもちたかった。

客B　カンタンあいてらすのは結構だが、目下の君はいわば謹慎の身だ。あんまり、本社の悪口は言わん方が得策だ。

マキ　本当に、そうですよ。どこから本社の方の耳に……。

客A　それは、まちがっています。漁連の人たちは、課長が土下座して謝まったからこそ、怒りをしずめて帰ってくれたんです。トラックに積んできた死んだ魚や貝を、工場の中へバラまく計画をやめにして、次の話合の約束もしてくれたんです。……もし汚染した魚や貝の山を築かれて、それがテレビや新聞で大々的に報道されたら、わが社の化学調味料はいっぺんにイメージダウンしたでしょう。ぼくは、その危機を救った課長を本社は、表彰するか昇進させたっていい位だとおもうんです。

正二郎　ま、私はそこまで望んじゃいないがねえ。

客B　本社のおエラ方が、君のように考えてくれれば言うことあないんだが、逆に有機水銀をたれ流したと認める方が、イメージダウンにつながると判断してるわけなんだから……。

客A　まちがいです、その判断は。

客B　そうまちがい、まちがいって、君……

客A　まちがいなくまちがいです。会社は、あの川と、川につながる海を汚してきました。ぼくの死んだ親父は漁師でしたから、いつも会社をうらんでいました。会社があそこにやってきて、工場廃液を流すまで、川から海へかけてここは水も美しく、魚や貝や海苔の名産地でした。多ぜいの漁師がそれで暮しをたててていたんです。

客B　えらく牧歌的な話だが、しかし、君のお父さんたちは、その漁業権を会社へ売ってしまったんだろう？

客A　そのことで、歯ぎしりしながら死にました。

客B　それこそ、君の言うまちがいだったわけだ。

客A　親父は最後まで反対派でしたが、借金をかかえた貧乏漁師にゃ、あの当時の何十万という補償金は喉から手が出る程ほしかったでしょうし、定時制の工業高校をやっと出たぼくを採用して貰ったことも、ありがたい恩恵だったにちがいありません。

雅代　駄目ですよ、その体で……兄さん。

竜蔵　退け。あのロクでなしに、言ってきかせてやる！　（ヨロヨロ立って、土蔵の扉口へ）此処を……とられて……たまるか！

雅代　兄さん……兄さん！

客A　でも、親父たちのそのまちがいと、何軒かの網元連中を買収して、札束で頬っぺた叩いて、漁師から海をとりあげてしまった会社のまちがいと、一緒にできますか？

マキ　（正二郎に）あなた、この人過激派じゃないんですか？

正二郎　なに、カゲキ派？

マキ　熱にうかされてたころ、和夫が同じようなこと言ってたじゃありませんか。

―　竜蔵、玄関に来てへたりこむ。つづいて雅代。

マキ　ま！　お父……！

正二郎　な、何だ？

雅代　私ゃ、一生けんめいとめたんだけど、きかないんだよ、どうしてもって……。

竜蔵　や、やい！

正二郎　（マキに）あっちへ連れてけ、早く。

マキ　おじいちゃん……。

竜蔵　どこへ新しい普請しようと、そりゃ、手前の勝手だ。だが、此処は……。

正二郎　連れていくんだ、蔵の中へ！

竜蔵　此処は、手前の勝手にゃ、させん……させんとも！

正二郎　何でもない。さあ星野君、二階へ。何でもありません。一寸した病気でね。

マキ　さ、お話はあっちで。おじいちゃん。

竜蔵　引っぱるな！　此処で言ってきかせてやる。おれは、狂ってたんぞ、いねえ！

―　二階から、チヅ。

正二郎　落ちついてくださいよ、お房さん。今夜はこうしてお客さんがみえてる、話はあとでゆっくり聴きますから。

竜蔵　どんな客だか、おれが、知らねえと思ってんのか。そいつらも、よくきいとけ。

マキ　お父さん！

竜蔵　あの蔵は、おれのものだぞ。蔵にゃ、指一本かけさせねえぞ！

―　二階から何人かの客たち、階段の途中で下をうかがう。

マキ　東禅寺の新しい家には、チャンとお父さんのために離れの部屋が用意してあるんですよ。正二郎がわざわざお父さんのために……。

竜蔵　そんなものは、要らん。……あの土蔵が、おれのすみかだ！

マキ　そんな勝手気ままを言って、私たちを困らせるつもりですか！

雅代　でもよ、マキちゃん、棟あげの今日まで、兄さんに東禅寺のトーの話もしてないってのは、あんたの方も勝手が過ぎやしないかねえ。

マキ　叔母さんには関係ないことですよ、余計な口出しは止して……。

雅代　そうはいかないよ。この人は私にとっちゃ、たった一人の実の兄さん……。

マキ　こんなときばかりやって来て、藪でコソコソ焚きつけときながら……実の兄妹らしいことの一つもしてくれたことがありますか、叔母さん。

雅代　へえ、そういうお前さんは、大層な姉妹おもいだよ。二千万もの普請しながら、倒産しかけてる妹見殺しにして……。

マキ　チーちゃん！　あんた、他人にそんなことペラペラ喋れた義理？

チヅ　私が、何したって言うの。

マキ　私にかくれて、この人にベタベタ泣きついて……。

正二郎　やめないか、みっともない！

チヅ　どうせ、みっともないですよ。姉さんのように、実の父親土蔵に閉じこめときながら、うわべだけ上品にやってく才覚なんてないんだから、私にゃ……。

マキ　閉じこめるとは何よ、人ぎきの悪い。

正二郎　そうとも。世間体もあるからって何度頼んだか分らんのに、あそこでなきゃ獄だってきかないから……。

竜蔵　あの中に居りゃ、手前と面あわさずにすむからな。……おれは、手前を見そこなった。会社に忠義つくすために、とりいってきたとも知らねえで、口車にのって、踊ったおれが阿呆だった。……おかげで、おれは、百八十人の網子から、裏切り者にされもまった。

正二郎　いい加減なこと言いなさんな。私こそ、海のことも漁業権のこともロクに知らんのをいいことに、あんたらの係争にまきこまれて、利用されたんじゃないか。

竜蔵　たしかに手前は、はじめ何も知らないポチだった。……だが、会社の幹部のケツにくっついて、おれたちの間をウロチョロするうちに、漁師を喰いものにする手だてを呑みこんで……ポチから狼に、早がわりしやがった。

正二郎　お舅さん！　……いや、頑のおかしな老人のたわごと、ムキになってもはじまらん。どうも、妙な茶番お目にかけて恐しいが、ま、呑みなおして頂いて……さ、星野君。

客B　ぼくは、これで失敬するが……。

正二郎　いかん、そりゃいかん。

マキ　ほんとに、星野さん。

客B　ただ、大丈夫だろうね、此処の地所。東洋鉄工へは上ものなし、いっさいキレイにすると話してあるんだが……。

正二郎　むろん、そうなる。そうします。

客B　しかし、現実にあの老人……いや、お舅さんが、蔵の中に住んで居て動かんということになると……。

正二郎　そんな莫迦な。

客B　これ、法的には権利があっても、まさか胸づくで追いたてるとか、ブルトーザで

潰しちまうとか……。

客A　そりゃ、まちがってます！

客B　そら、こういう声があがってくる。となると、ぼくとしてもうっかり……とにかく、お舅さんとよく話合って、平和的に蔵から出てもらわないと……。

竜蔵　おれは、出ないぞ！

正二郎　なにイ。

マキ　私たちは、引越して行っちまうんですよ。一人であんな処へ残って、どうやって生きていくんですか。

チヅ　ごはん位、うちから運んだっていいわよ。おじいちゃんが、此処でがんばるんなら。

雅代　そうだ、そうして貰ったらいいわ、兄さん。米や畑の野菜ぐれえ、うちで届けてやるに。

マキ　調子のいいこと言って、あんたたち……

正二郎　黙れ！　いいですか、お舅さん。私は、二十年あんたの鼻息をうかがってビクビクしてきたが、これ以上我慢はしませんぞ。此処はひきはらって、東禅寺へ来るんです。

竜蔵　手前の指図はうけねえ、おれはあの土蔵で……。

正二郎　あの土蔵は、こわします。

竜蔵　こわす？　おれの土蔵を。

正二郎　あれは、あんたのものじゃない。所有権は私にあるんだ！

竜蔵　所有権……だ？

正二郎　疑うんなら、登記書を見せようか。

竜蔵　手前、おれに何と約定した？　あの蔵は……。

正二郎　口約束は、権利書にゃ勝てませんよ。

竜蔵　このロクでなし、よくもそんな……。

客A　これは、どっかまちがってますよ、課長。

雅代　そうだよ。酷いじゃないかね、こんな年よりにむかって。

正二郎　その年よりが、昔から意気地なしの私の首根っ子をおさえつけてきた。だが、今はちがう、今度は私の方が強いんだ。平和に暮そうとおもったら、弱いものは強いものに折れるんだ、従うんだ。

竜蔵　（へたりこむ）おれは、平和なんぞ、欲しかねえ！

正二郎　指図は私がする。

マキ　それが、あたり前なんですよ。それでお父さんだって、結極幸せになれるんだから。

竜蔵　幸せなんぞ、おれは、要らねえ。

正二郎　（胸をはって）星野君、二階へ来い、呑みなおしだ！　（客Bをひっぱって二階へあがりかけ）マキ、酒をどんどん運べ、残りの膳もみんなもって来い！　チーちゃんも叔母さんも……今夜は特別の晩だ、来て賑やかにやんなさい！　（去る）

マキ　あっちへ戻ってなさい、おじいちゃん。あとで温いものでも届けさせるから。

（勝手へ去る）

―　竜蔵、辛じて起きあがり、玄関を出る。

マキの声　洋子！　どこに居るの？　お膳を運んでちょうだい！　洋子！

―　チヅ、雅代、反射的にカミ手へ。

客A　忘れちまったのか、おれのこと。

―　庭の植込みの附近に来た竜蔵、喘息の発作におそわれ、しゃがみ込んではげしく咳く。

―　二階で、唄がはじまる。

―　酒と料理の膳をもったチヅ、雅代、マキがカミ手から二階へ往復する。
―　玄関を出た客A、竜蔵の咳に気づき近寄ってくる。

客A　どうしました、お爺さん。こりゃひどい。（背中をさすってやる）……喘息だね、うちのおやじも、こんな風のない空気がドロンと重たい晩にゃ、きまって発作おこしたっけが。……どう、少しは楽？　今のうちに家の中へ這入った方が……え？　あっち？　ああ、あれが土蔵だね。おぶってってやろうか？　大丈夫……？

―　客A、竜蔵をたすけて土蔵へ。
―　土蔵の中、万年床の頭部の古い箪笥の小抽出をあけて、中を漁っていた洋子、やってくる二人の気配に、あわてて漁具の山の蔭にかくれる。

客A　どっこいしょ、と。……どこ、クスリは？　何だ、アロチックの吸入か、こいつ副作用があるからあんまり……ま、そう言ったって、苦しけりゃしょうがないけど。……医者にゃかかってるの、お爺さん？

竜蔵　いいや。

客A　どうしてさ、医者にかからなきゃ……

竜蔵　おれは生えぬきの漁師だ。手前の体のことは、医者なんぞよりよく知ってら。此処に居れば、せいせいする。病院の石炭酸の匂い嗅いでりゃ、丈夫な体も病気にされちまうからよ。

客A　（笑う）なるほど、此処がお爺さんの城か。気のせいか、海の匂いがするね。

竜蔵　気のせいなもんか。

客A　うちの親父も恋しがってたな、海の匂い。

竜蔵　親父さん、漁師だったか？

客A　ああ。……お爺さん、あんまりゴネないで、東禅寺とかへ連れてって貰いなさい。あの辺は緑も多くて空気がきれいだから、喘息もきっとなおるよ。……じゃ。

竜蔵　ありがとよ。……何ていうんだ、お前さん？

客A　降旗。

竜蔵　フルハタ？

客A　ああ。……お爺さんのこと、おやじから聞いたような気もするけど、もう忘れた。昔のこったからね。（去る）

竜蔵　降旗っていやあ……。

―　音楽。
―　土蔵の奥手に、蒼い海。それを背に鉢巻姿の半裸の男の幻影。

竜蔵　駿吉……。

男の幻影　そうよ、おれの仲よ。

竜蔵　妙なもんだ。

男の幻影　ヤノ竜が、仇の息子に介抱してもらうとはな。

竜蔵　駿吉、今もおれを仇と思ってるか？

男の幻影　おれがどう思おうと、仇は仇よ。お前は、おれら百八十人の網子を裏切った上、ほかの網元連とグルになって、この浜一帯の漁師から海をだましとった人間だからな。

竜蔵　裏切ったの、だましとったの……相からず言い草だな、駿吉。

男の幻影　海はおれたちのもの、この一図なまっすぐなねがいが変らねえ以上、言い草も水切る鮐先のように、まっすぐだ。

竜蔵　あやつらの中であやつらに囲まれながら、おれだって、何とかまっすぐに舵とろうとした。……だが、おっかぶさってくる

あやつらの波は……。

男の幻影　まっすぐとってるつもりの舵が狂うのは、動かねえ太陽や星に目標きめねえで、揺れる波に目奪われるからだ位、漁師ならガキでも知ってるぞ。

竜蔵　あやつらは金をつかい、力をつかって、会社を大きくし生産をあげるのは、この街と国の利益だ、漁業権をタテに埋立に反対する漁民は、てめえの慾に目がくれた公けの敵だ、そういう世論をこせえあげた。

男の幻影　ごまかすな、ヤノ竜。……そいつは世論になる前に、まず金と力に膝折ったお前ししんの理屈になったのよ。

竜蔵　……たやすく膝を折ったわけじゃねえ。会社、国、関係省庁、県、市、漁連、銀行産業同志会、保守党、議員クラブ、おまけに警察、新聞社……。もみくちゃにされながら、一体何と言えばよかったんだ？

男の幻影　おれらが、お前に言ってくれと頼んだのは、たった一言よ。海はおれたちのものだ！

―　はげしい波濤の音。

竜蔵　駿吉ッ！

男の幻影　……。

竜蔵　この辺かあ、第二竜神丸の折れた帆桁が流れていたのは？

男の幻影　おおッ。……勇次は、男らしい奴だった。七人の網子を全員ボートへ移して、手前は最期まで無電を叩きつづけて……お前の息子らしい、潔ぎいい男だったぞッ！（赤の花の束を、海へ投げる）

―　波濤の音、遠のく。

竜蔵　……とりかえしってものは、駿吉、二度とつかねえもんだな。

男の幻影　つくまいよ。……この蒼い海が、いま一度かえってくりゃ別だが。

竜蔵　海がか？

男の幻影　もう遅い、ヤノ竜。……一切合財もう遅い。（消える）

竜蔵　蒼い海がか、駿吉！

―　蒼い海、極限まで輝きを増す。
―　その中に、短い腰布をつけただけの少女（洋子に酷似する）の幻影。

少女の幻影　はやくおいでえ、竜蔵さーん！

竜蔵　こ、この（洋子の頬を力まかせにうおれがめっけた栄螺の穴場、教えてやっから早く来なあ、竜蔵さーん！

―　蒼い海と少女の幻影、急速に消え、もとの土蔵に戻る。

竜蔵　……お恵、お恵！（やがて、箪笥ににじりよって、小抽出しをあけ、中が荒らされているのを発見する）……！（あわただしく、他の抽出をあけて点検し、同様なので呆然とする）……誰だ？　そこに居るなあ、だれだ？

洋子　……。（漁具の蔭から出てくる）

竜蔵　洋子か？

洋子　（笑う）また、おばあちゃんの夢？

竜蔵　お前……（優しく）此方へ来い。お前に呉れるもんがある、ここへ来い。（障を狙って、洋子の手首をつかむ）手をひらいてみい。ほれ、開けてみろ！

洋子　痛ッ！

―　竜蔵の膝に、ボロボロいくつかの珠や石がこぼれる。

竜蔵　こ、この（洋子の頬を力まかせにう

つ）泥棒猫！　こんな……老いぼれの……病人から……それも、おばあちゃんの形見を……（はげしく咳きこむ）

洋子　……（いったん扉口へ逃げるが、戻ってきて、祖父の背をさする）

―　二階から、賑やかな歌と手拍子。

竜蔵　……（あっちへ行けという身ぶり）

洋子　（行きかけた扉口で）洋子……ダメに……なっちゃう……（タラタラ涙を流しながら）このまんま……沈んじゃうよう、おじいちゃん！

―　玄関に、客CとD。

客C　ごめんください。……ごめんください、石渡さーん！

竜蔵　ここへ来な、洋子……ここへ。

客C　どうも、盛大ですな。……石渡さーん！

チヅ　はーい。（二階から）

客C　石渡課長のお宅ですね。

チヅ　さよですが……

客D　石渡君に、桜井が伺ったと伝えてください。

チヅ　はあ。（二階へ）

竜蔵　これを、持ってけ。みんな持ってけ。……おれは、もうボロ船だ。洋子を、どう助けやることも、できねえ……。

―　二階が、シーンと静かになる。

竜蔵　（箪笥の小抽出しをぬいて）蒼い海から生まれた、おばあちゃんが、生まれかわりの洋子を、守ってくれるだろう……みんな、持ってくがいい。

洋子　これは、何？

竜蔵　椰じゃねえか。

洋子　ううん、この模様。体が鳥で、顔が天女みたいな。

竜蔵　ああ、そいつは極楽にいる鳥でな、迦陵頻伽というんだ。

洋子　カリョウビンガ？

竜蔵　おばあちゃんは、若えころ、顔も声もきれいで、おれにゃ怡度、この鳥のようにおもえた。……だもんで、浅草の椰屋で特別にあつらえてな……

―　二階から、正二郎。あとから、家族と客たち。

正二郎　……部長！

客D　お、石渡君。……いろいろ心配させたな。さっき羽田へ着いてね、漁連との交渉については、（Cを示して）加瀬君から詳しく聴いたよ。（右手を伸ばして）どうもご苦労さま。

正二郎　（その手を握って）部長！

客D　うん。君が漁連の連中に陳謝したというので、とかくの批判があったそうだが、私は飛行場から会長に電話して、石渡課長が個人のプライドを棄てて土下座して謝まったからこそ、わが社の化学調味料の社会的信用が救われたのだと強調しておいた。

正二郎　（膝をついて）会長に……。

客D　そう。会長も、そのとおりだと言っておられたよ。

正二郎　そのとおりだ……と。

客D　この二日間、えらい心労だったろうが、もう肩の荷はおろしてくれ給え。

正二郎　（平伏して）ありがとうございます、部長。

客D　いやいや、礼を言わにゃならんのは、会社の方さ。それで私も、羽田からまっすぐ此方へ伺ったんだよ。

客B　石渡君、まずあがって頂いて……。

マキ　そうですよ、あなた……。

正二郎　むろん、そうだ、さあ部長……加瀬さんも……。

―　蜂の巣をつついたような騒ぎ。

客D　（正二郎にコートを脱がされながら）しかし石渡君、昨日のような騒ぎはもうおしまいだよ。私の方の韓国での折渉も順調にいってね、問題の廃液をだす第一プラントは、韓国の合弁会社へそっくり移すメドがついたんだよ。

正二郎　ほう、韓国へ。いや、桜井部長がじきじきおいでになったんですから、大きな前進があるとは思ってましたが……それは画期的な成果……。

客D　そう。そう言っていいだろうね。企業のメリットを落とさずに、日本から公害を追放できるんだから……（正二郎の案内で、客Cとともに二階へ）

―　植込みの前に、洋子。

洋子　ワンて言いな、ワンて。……そしたら一つやる、この珊瑚の珠。

男の声　（植込みの中で）……ワン。

洋子　莫迦！　ちっとも犬みたいじゃないじゃんか。洋子の犬だろ、違いつくばって、地べたひっかいて、吠えろ、吠えろ！

男の声　ワン！

―　土蔵で、もの音。踏台につかった木函がたおれ、その上で梁から首を吊った竜蔵が、ブラブラ揺れている。

―　二階からの拍手と、男の哀れな大のなき真似が交錯する。

―　幕がおりる。

つねに
働らく人たちとともに
歩んだ作者の，劇団の
苦節二十年をここに

こばやしひろし　作品集2

劇団はぐるま創立20周年記念出版
収録作品　「つくられた英雄」「植の木」「豚」「ひしめきあう不毛の季節から」ほか
装幀／板坂晋治　A5判・300頁・舞台写真・劇団年譜
頒価　1500円　　75年2月刊行
○発　行／演劇会議発行所
○申込先／演劇会議発行所　川崎市川崎区渡田4-11-3萩坂方　TEL（044）333-0775
劇団はぐるま　岐阜市西野1丁目　TEL（0582）65-1852振替名古屋4535

選挙狂騒曲

――サラリーマン物語――

栗木英章

〈人物〉
南太郎
額のふゆ
夏雄
あきら
はるみ
良子
北山課長
糸川孝太郎
工場長
余時武夫
コーラスA
コーラスB
その他　秘書、カメラマン、インタビュアなど（適時、コーラスA、Bが演じても可）

〈とき〉
一九七四年、夏。

〈ところ〉
アジア電気テレビ工場、アフターサービス課、サービス部品発送現場他。

1

コーラスAとB登場――

コーラスA　サラリーマンとは労働者の一種である。

コーラスB　サラリーマンとは、ウラミとアキラメを共有する人種である。

コーラスA　サラリーマンとは多数決により独裁者を選ぶ危険性のある階層である。

コーラスB　また、労働者階級として人民解放の斗かいの戦列に加わる可能性を有する階層でもある。

コーラスA　サラリーマンには、男女ともに定年あり。

二人去る。

2

糸川と良子（案内嬢）が登場――

糸川　本日は御忙がしい中、当アジア電気テレビ工場へ見学におこしいただき、どうもありがとうございます。おかげさまをもちまして、アジア電気も今や日本の家庭電気業会で名実共にトップ企業になることができました。当工場は、最新式技術と設備を投入しました東洋一の近代化工場であり、その生産スピードは世界一とたたえられております。では早速、係の者が御案内申し上げます。（良子に）君。

良子　は、はい。

糸川　（小声で）ぼくは重要会議があるんで、あと頼んだよ。

良子　でも、私、まだ――

糸川　入社してもう五ケ月過ぎたんだよ。君に話してもわからんだろうがね、ぼくは参議院選挙の、工場内総務担当に任命されて目茶苦茶忙がしくなるんだから、これからは一人で、いいね。（走り去る）

良子　……では、ふつつかではございますがご案内させていただきます。まず、左手に見えますのが、当テレビ工場自慢の噴水塔でございます。七色の虹を生み出すその美しさは、中部地方で一番とたたえられているのでございます。続きまして、右手に見えますのが、製品倉庫とトラック発着場、そのとなりがこの劇の主要な舞台となりますアフター・サービス課の、サービス部品発送現場でございます。

幕があがり、主舞台となる。アフターサービス課の発送現場。テーブルで電話を受けたり、伝票を切っている太郎。はるみは台車（手押車）に、段ボール箱入りの、アフターサービス部品を運搬している。

壁面には、「共に前進・共に繁栄」の大社訓、「安全第一」「ZD運動展開中」「早いサービス・お客の信頼」「世界へ売り出せアジアのイカレトロン」等々のポスター類がはられている。その中で、場違いな感じで、年配の婦人の絵（太郎の亡妻、ふゆ）が一枚飾られている。

良子　全国で愛用されていますアジアのイカレトロンテレビの、アフターサービス部品を一手に引受けて、各地へ直接出荷しているのがここでございます。では、時間もございませんので、どうぞあちらの組立ラインへ。通産省より、全国合理化モデル工場といたしまして、一昨年特別表彰をさずかっております。

去りぎわに、サービス部品を運搬している夏雄とぶつかる。

夏雄　よっ、すまん、すまん。（良子とみとめて）やあ。

良子　（す早くポケットから手紙を出して）あの、これ、あきらさんに。

夏雄　ラブレターか。ああ、恋しい、恋しい――。ほっほっ。

良子　ううん、そんなんじゃないの。

夏雄　まかしとき。

良子は去る

太郎　（電話で）そんなはずはありません。今朝たしかにトラック便で出発しましたから……。

夏雄　ラッシュ、ラッシュ。

太郎　そう、ラッシュとぶつかっているかも知れませんから……はい、もう少しお待ち下さい。

夏雄　チェッ、文句言やあええと思やがって。俺たち運転手の身にもなってみろ。

チャイムスピーカーが流れる。

スピーカー　連絡いたします。連絡いたします。本日十二時十分から、重要な放送がありますので、食堂または各課のモニターテレビの前へお集まり下さい。

夏雄　へえ、特別一時金でも出すって話か。

あきらが帰ってくる。

あきら　ああ暑い、暑い。

夏雄　ようっ。

あきら　あっちもこっちも車ばかりでうんざりするな。（太郎に）受取り。

太郎　ごくろうさん。

夏雄　あたいの胸のうちをつづったのだから　あきらさんに届けてね、チェッ、（あきらに手紙をわたす）彼女から。

あきら　サンキュー。

　読みはじめたあきらの後へこっそりまわり、のぞいている夏雄。電話――　通り合わせたはるみが取る。

はるみ　はい、アフター……ああ英夫さん、（声を落して）どうして会ってくれないの……電話したわ、きのうも、おとといも……忙がしくったって、連絡ぐらいできるでしょ。……えっ？預金のノルマが一千万円……大丈夫？だめよ、家の現金は全部英夫さんの銀行へあづけたんだもの、もう……腰？ええずいぶんよくなったわ、ほんとよ。ねえ、それでいつ会って……連絡してね、きっとよ。……あっ、もしもし――（切る）

太郎　いつもの人か。

はるみ　すみません、いつも。（去る）

夏雄　……労務課でいつも名前が出るので心配……へんなラブレター。

あきら　こらっ。

夏雄　お前、何かやらかす気か。

あきら　別に。

夏雄　俺にかくすとはみずくさい。門の前でまいてた合理化反対のビラ、お前らがつくったんだな。図星だろう。

あきら　夏雄！

夏雄　バカヤロ。俺がたれこみなんかするか

あきら　決まったら話すからな、それまで。

　昼のサイレン――

夏雄　（あきらに）行くぞ、食堂。

あきら　学校給食。（パンを出して食べる）

夏雄　おおい、はるみちゃん、食堂へ行くぞ。（気にしつつ去る）

あきら　南さん、再就職決まった？

太郎　……いいや。（弁当を開ける）

あきら　へえ、まだ。

太郎　不景気だからな。

あきら　組合にも頼んどいたら。

太郎　組合、か。

あきら　そりゃ、今の組合、頼りないけどさ、要求ぶつけ合って強くするより仕方ないもんね。

　はるみが報告にくる。

はるみ　岐阜サービスの配達分、用意しました。

太郎　ありがと。昼休みだよ。

はるみ　はい。（去る）

あきら　俺……組合の執行委員に立候補しようと思うんだ。

太郎　へえ……会社と組合の推せんとらなくて、当選できる見込みあるのか。

あきら　それは、これからのがんばり次第さ。一人だけじゃない。今の会社の合理化や、それにベッタリの組合を変えていこうって何人かで話し合ってる。

太郎　そんなこと、わしに話していいのか。

あきら　南さんだから相談しているのさ。

太郎　定年前のおいぼれにか。

あきら　色々聞いたんだ。南さん、昔第一組合に残ってやってたこと。

太郎　どうも……忘れっぽくなってな。

あきら　南さん。

太郎　おまえ、いくつになった。

あきら　十九。

太郎　十九か……いいときだ。

　北山課長が急き足で入ってくる。

北山　（あきらに）君、ちょっと特別会議室へ来てくれ。

あきら　何の話ですか。

北山　行けばすぐわかる。労務課長が待ってるからな。

太郎　課長。

　あきらは去る。

北山　困った奴だ、アカに染まりかけて。君、何か気づいていたんだろう。

太郎　いえ、別に。

北山　そうかねえ。まあ君も苦い経験があるからわかってるだろうが、部下に変なのが出たら我々の評価もとたんに落ちてしまうんだから。

太郎　はあ。

北山　君も、もっと監督をしっかりしてもらわなくちゃ困るな。さて。（行きかける）

太郎　あっ、課長、先日お願いした件なんですが――。

北山　ああ、再就職の件ねえ。わたしも努力してるんだが、何しろ今は不景気だろ。工場も、人が減っていく分は補充してないし外注も仕事がなくなって草むしりってるような時期なんでね。労務も選挙でガタガタしはじめてるし、全く――。

太郎　選挙、ですか。

北山　参議院の。まっ、もう一度話してみるがね。どうなるかな。さて――（去る）

　太郎は椅子に座る

額のふゆ　あなた、食欲ないの。

太郎　いつものことさ、夏になると。

額のふゆ　大根おろし、食べてる？

太郎　いいや……そうか、ジャコいれてよくつくってくれたな。

額のふゆ　飲みすぎちゃだめよ。

太郎　ああ、このごろはせいぜい一合どまりだ。

額のふゆ　娘たちが相手をしてくれるんでしょ。

太郎　早く片づいてくれりゃいいのに……余分な気使いして。

額のふゆ　自分たちなりに考えているのよ。

太郎　……片親だからって、みじめな思いは味あわせたくないからな。

額のふゆ　定年になっても、ここで働ける？

太郎　わからん……。

額のふゆ　ごめんなさいね、あんたにばかり苦労かけて。

太郎　なあに、とにかく娘二人嫁がせるまでは働いて――（電話が鳴るので取る）はい、アフターサービス課です。えっ、静岡サービス？……はい、UHFチューナーですか。はい、UF・三三一A……。

3

　ボリウムいっぱいの社歌が流れる。日の丸旗と社旗をバックに、テレビ放送。

工場長　今や国際的に過当競争の時代であり、資源不足の日本企業が生きのびていくには、極めて困難な情況と申せます。国内においては、社会公共性も考慮しつつ安定した利益を追求すると同時に、海外へは輸出を伸ばしていく――この課題、つまりス

タニスラフスキーのいう超目標は、ただ単に一企業の努力だけでは成し得ないものでございます。政治です。私ども電気産業の代表を国政の場へ送り出すということは、内外における我々の発言力を強めることであり、高価格、低税金等々の条件を勝ちとる有効な道であるのであります。したがいまして、来るべき参議院選挙は、生活向上の道か不安の道か、二つに一つの選択をする歴史的に重大且つ切実な斗かいでございます。この選挙に、私ども労使は今まで以上にガッチリ手足を組んで、元アジア労組委員長、余時武夫氏を候補者と決定し、当選目指して全力を尽くす決意です。どうか皆さん、仕事と選挙の二本柱の活動を綜合的に進めて、年間売上げ一兆円と、余時氏の勝利を手にしようではありませんか。アジア労使の連帯と発展バンザイ。（拍手）どうも効果さん。ありがとう。（退場）

糸川　（拍手をしつつ登場して）どうも工場長の熱烈なご挨拶ありがとうございました。ええ、では続きまして、御多忙の中、駆けつけて下さいました余時武夫先生をご紹介申上げます。どうぞ。（かわる）

余時　皆さん、余時であります。どうも労使そろっての強力なご支援ありがとうございます。このたび全社党の推せんを受け、我がアジア電気並びに電気産業の代表として立候補することになりました。今や保守か革新か、いたずらに激突をくり返す時ではありません。その隙をねらって、革命勢力が台頭してきている脅威の時代と申せます。彼たちに天下を明けわたすようなことになれば、日本のあらゆる自由が消滅し、生活はどん底に陥イリ、大混乱をきたすことは必至であります。我がアジア電気にとりましても、死活問題でございます。どうか皆さん。私たちの生活向上と平和のため、必ず選挙を勝利するよう絶大な御支援をお願い申上げます。（うたう）アジア、アジア、アジア、アジア、アジア――御静聴ありがとうございました。（去る）

糸川　どうも（最敬礼）。ええ、では最後に、選挙へ向けてのスローガンと合言葉を発表いたします。『おやつは三時、選挙は余時に、テレビはアジアのイカレトロン』よろしいですか。続いて合言葉、『何時？』『四時』『選挙』『余時』。はい、これまたいいですね、では明朝より、いっせいにビラ配布をいたします。がんばっていきましょう！

社歌が勇ましく流れる。

4

トラックの運転台。

運転している夏雄とバックで横になっているあきら。

夏雄　てやんでえ、何が余時だ。八時二十分みたいな面しやがって。選挙なんか誰いれようと勝手だろうが……（クラクションを鳴らして）俺たちを安給料でこき使ってるくせして――。

あきら　選挙で金を湯水のように使ってか。

夏雄　起きてたのか。

あきら　そんなでっかい一人言聞かされたら眠れやしないだろう。

夏雄　すまんすまん。また信号か。（ブレーキをかける）

あきら　（起きて助手席に座る）おい夏雄、あのハシケや倉庫を見ろ。

夏雄　ほう、やけにふえたな。

あきら　石油や食糧品が一杯つまってる。

夏雄　何っ。

あきら　大手の買占め、値上げ待ちょ。選挙が終れば軒並だ。

夏雄　畜生、火でもつけてやるか。

あきら　青。

夏雄　チェッ。（エンジンをかける）

あきら　火をつけたら何もなくなってしまうぞ。

夏雄　じゃどうすりゃいいんだ。

あきら　安い値段で国民に売らせるのさ。

夏雄　そんなことできっこないだろう。

あきら　いいか。大独占がな、これほど横暴にもうけられるのは、今の政府自由党と金でびったり結びついてるからだ。

夏雄　それぐらいはわかってらあ。

あきら　そのくされ縁を断切って、国民本位の政治に変えていこうってのが今度の選挙なんだ。

夏雄　おやつは三時で選挙は余時か。くそったれ。

あきら　敵さんもバカじゃないからな、人気落ち目の中で過半数の議席を確保しようと必死だ。その一つが、余時武夫よ。表面的には革新的なことも言っちゃいるが、中味は会社べったりさ。

夏雄　どうりで、会社が気狂いみたいに推してるんだな。この間もよ、課長が珍らしく君づけで呼びとめてな。『君、選挙の票読みのためなら、どんどん休暇とっていいんだよ』ってぬかしやがった。

あきら　猫なで声でか。

夏雄　ああ。（窓外へ）気をつけろ、オタンチン。

あきら　よせ、アベックじゃないか。

夏雄　でれでれしくさって……結局どうしようもないってわけか。

あきら　一人でぶつぶついってるだけなら。

夏雄　えらそうに言うじゃないか。またまた信号ときた。（ブレーキ）

あきら　夏雄、俺たちの組合強くしていくことだ。

夏雄　あのしまらねえ組合をか。

あきら　（うなづいて）今夏の役員選挙に、『もっと組合を強くしていこう』という仲間が立候補するんだ。

夏雄　おまえ、じゃー。

あきら　俺も出る。今の壁をぶち破りたいんだ。

夏雄　（勢き出して）気の長い話だ。

あきら　一日や二日ではできないさ。でもなあ、みんなの中にくすぶっとる思いを寄せ集めれば――おい。

夏雄　（うつらうつらとしかかっていて）あっ。（急ブレーキをかける）

あきら　しっかりしろ。

夏雄　このごろ、ちょっとえらいんだ。

あきら　しばらくかわろう。（運転をかわってスタートする）

夏雄　すまんな。（横になり）はるみの腰、大丈夫かなあ。

あきら　医者へ行ってるらしいが……気になると見えるな。

夏雄　この間、朝帰りん時、腹が痛いってぼやいとったら、正露丸くれた。

あきら　直ったか。

夏雄　ああ、直りすぎてふんづまりになっちまったよ。……いい娘だ。

あきら　……彼がいるんだな。

夏雄　大学出の銀行マンじゃ相手になれん。

あきら　えらい弱気じゃないか。

夏雄　いとこらしいが……まっ、幸せになれやいいさ……ああ……（眠る）

運転を続けるあきら。

5

選挙スローガンやシンボルマークが一面に張ってあるサービス部品発送現場。夏雄とあきらが、段ボール箱に入れたサービス部品を必死に運び込んでいる。

はるみ　（手伝いつつ）ごめんなさいね、私がのろいばかりに。

夏雄　気にせんでもええて、このごろヤケにサービス部品がふえてやがるからな。

はるみ　これでも。

あきら　休んでな。重い部品運びはこたえるから、いつもこうやって残しとけばいい。

二人去る。電話にはるみが出る。

はるみ　はい……今さら何……貯金を解約しないでっていうの……ふふふ……わたしは貴方の預金ノルマ獲得運動に協力してただけなのね……それだけのことで……あんまりおかしくって涙が……さよなら（切る）

夏雄の「はるみちゃん」と呼ぶ声。気づいて行こうとするが再び電話――。

はるみ　はい。……偏向コイルですか……TDY二〇二四D五箱と……えっ？トランジスタ二SC一一七二B七箱……京都サービスさんですね。

糸川が入ってきて切ろうとする受話器をひきとる。

糸川　おやつは三時選挙は余時に、テレビはアジアのイカレトロン、よろしく。（切る）電話の最後には必ずこれを入れて。ねえ、私用電話でも何でもジャンジャンかけていいから。（大声で）一人十票は獲得しましょう！南班長は？

はるみ　あちらで荷造りの指示を。

糸川　そう……君、ここ組合の選挙カンパ集まってる？

はるみ　えっ？

糸川　聞いてないの、余時必勝カンパ――。

はるみ　そんなのあるんですか？

糸川　おいおい、冗談じゃないよ。南さんどういうつもりかなあ、よその職場じゃ一人三百円以上出してるというのに――（机のまわりをさぐって）あっ、これこれ、（見て）白紙――君、ほんとに南さんは一言もPRしてないんだね。

はるみ　……ええ。

糸川　ふうん……ひょっとしたら意識的に放っておく……考えられるな、これは。休火山でも噴火することがあり得るから――。

はるみ　何かご用でしたでしょうか。

糸川　いや、待ってるからいい。（額のふゆの絵を見て）社内コンクールで一等の絵か、これがね……君っ、この絵、動いたよ。

夏雄とあきらが部品箱を運ぶ。

夏雄　さあ、どいた、どいた。

糸川　何っ。

夏雄　『仕事中は持場を離れるな』って、労務ニュースに書いてあったろう。

糸川　君、ぼくは労務の――。

はるみ　これ、京都サービスです。

あきら　オッケー。（去る）

糸川　じゃ、もう一度くるからね。忙がしい忙がしい。（去る）

夏雄　はるみちゃん、塩まいたれ……どうしたの。

はるみ　ううん。

夏雄　元気出せ。

太郎戻ってくる。

太郎　これで一段落ついたな。（奥へ）あきら、一休みしよう。

はるみお茶を入れる。あきらもくる。

夏雄　へんなネズミがうろうろしてるから気をつけろよ。

あきら　うん。

太郎　九州のおふくろさん、元気か。

あきら　ええ、まだ野良に出てるってこの間手紙が。

太郎　そりゃいい、健康なのが一番だ。

あきら　……会社からひどい手紙が届いたらしい。

太郎　そうか、やっぱり。

あきら　会社に多大な迷惑をかけているって。だから、おふくろ……びっくりして…。

夏雄　くそっ、執行委員選挙への圧力だ。

あきら　覚悟はしてたけど……思うように進まない。

太郎　世間がいくら動いたって、会社ん中は同じだからな、ずっと。

あきら　でも、職場が変わらない限り、社会もほんとにはよくならないと思うんだ。

太郎　長く、ながく、かかる仕事さ。

アナウンス　連絡します。連絡します。選挙行動ナンバー三十五としまして、選挙ハガキの発送をします。各課一人当り五枚、確実に宛名書きを実施して下さい――。

夏雄　誰がやったるか。おうあきら、負けるなよ。

はるみ　私も一票入れるわ。

あきら　ありがとう。

電話――。

太郎　はい、アフターサービス課……えっ、今すぐ、無理ですよ。もう今日の分は積み込んじゃいましたから。

夏雄　もう満杯（選挙スローガンを破って鼻をかむ）

太郎　はあ、そこまで言われりゃ……二〇TBのブラウン管ですか……六箱。はい、東京サービスですね。

夏雄　（受話器をとり）運ぶ身にもなってみろ。おやつは三時、氷は金時（切る）チェッ、東京野郎えばりやがって。

太郎　（伝票を切って）すまんがこれ頼む。あとまわし。

夏雄　電気店が待ってるらしいし――。

あきら伝票を受取り、奥へ去る。

夏雄　おい。

太郎　すまん。

北山が勢いよく入ってくる。

北山　何時！

太郎　えっっええっと三時十分ちょっと。

北山　困るなあ、班長がそういうことでは。

太郎　ああ、ええっと四時でしたね。

北山　それではランボが出ないんだよ。いいかね。何時！

太郎　四時！

北山　選挙！

太郎　弁――。

夏雄　おやつは三時、選挙は余時、定時は五

時で八時は『全員集合！』

北山　まだスタートしないんか。

夏雄　追加。

北山　（太郎に）君も人がよくって困るな。

あきら　（サービス部品を持って）行くぞ。

夏雄　よし。八十キロでぶっとばせ（去る）

北山　（あきらに）君。

あきら　急いでますから。

北山　どうだ。役員選挙おりる気持になってくれたか。

あきら　指図は受けません。

北山　いいかね、会社と組合は昔から仲良く選挙運動をやってきたんだ。それを——。

あきら　だからこそ、やめさせたいんです。

北山　これは、おそれ多くもかしこくも社長命令だよ。

あきら　悪いことはわるいことです。

クラクションと、夏雄の呼び声。

あきら　行ってきます。（走り去る）

北山　ただではすまんぞ、……南さん、また一つ頼まれてくれないかなあ。

太郎　何でしょう。

北山　またポスターなんだが、一兆円企業化達成のPRとして、どうだろう。

太郎　一兆円——。

北山　まあ会社としても年間売上げが九千億で足踏みしてるんで、利益増大のキャンペーンをやろうってね。その一環としてー。

太郎　いゃあ、安全運動のポスター位ならいいんですが……。

北山　なに職場の末端から個けようという雰囲気を盛りあげればいいんでね。たとえば……そう、『マッチ一本火事の元、ネジ一本赤字の元』これはうけるよ。

糸川が、カメラマン（コーラスAでも可）と助手（同じくコーラスB）を連れてとび込んでくる。

糸川　南さん、お願いがあるんですが、写真を一枚。

太郎　写真わたしの——。

糸川　（北山に気づいて）あっ、課長！

北山　（機先を制して）何時！

糸川　（負けまいと）四時！

北山　選挙！

糸川　余時！今度の参議院選ポスターに南さんの写真をってことになりましてね。まあ社歴も古いし、みんなの人気もあるってことで選ばれたんでしょう。

北山　困るな、担当課長のことわりなしでそういうことをやられちゃ。

糸川　課長。お言葉を返すようですが、選挙期間中一切の課別セクトや職階制抜き、勝つためには手段を選ばず——これがもったいなくも社長命令です。

北山　だからといって一般職場のルールを無視してもらっては——。

糸川　この非常時態にいいんですか、そういう固定的否定的閉鎖的緬張り的姿勢は。

北山　君はわしに意見するのか。

糸川　いえいえ、不肖糸川孝太郎、ただひたすら会社のため、もとい労使のため。（無視して太郎を椅子に掛けさせて）どう、これで。そうそうお茶を飲んでるところ。これ、茶わん持ってもらって……いい、いい。これでいこう。『老後をお任かせします。余時さんやってくれますね、やりますとも』ぴったりでしょう。

カメラマン　もう少しニッコリ笑って。

糸川　笑って——。

太郎戸惑う、全体静止。

額のふゆ　笑っちゃだめよ。

太郎　……仕方ないだろ。

額のふゆ　貴方の老後は保障されていないの。国からも会社からも。

太郎　入社して一番古いって言われちゃ。

額のふゆ　仕方がない、仕方がないでどんどん流れてゆくわ。

太郎　……妥協して、組合の赤旗をおろし、朝鮮戦争も、安保も、ベトナム戦争も、ずっと黙って見てきたんだ、今さら。

額のふゆ　ううん。貴方なりに一生けん命やってきたのよ、だから、だからそんなポスター張られること嫌なの。

太郎　わしだって嫌さ。

額のふゆ　だったらにらんでやりなさい。

太郎　にらむ？

額のふゆ　さあ。

カメラマン　（動き出して）さあ笑って。

糸川　笑って。あっぷっぷのぷ！

太郎　はっはっはっ……。

フラッシュの一閃——。

6

コーラスA、B。テレビ枠を持ち登場。

コーラスA　コマーシャル。苦しい時も悲しいときも、腹が立つ時もやっぱり自由党。

コーラスB　コマーシャル。右左よく見て横断。右を向き左へ寄らない全社党——。七時をお知らせします。ブァ、ブァ、ブァ、ブーン。

コーラスA　七時のニュースです。各地で企業選挙への批判が強まっています。七月七日の参議院議員選挙が近づいてくるにつれ、各党必死の攻防を繰返していますが、いわゆる企業ぐるみ選挙に対して社内からの告発が目立ってきております。今日もアジア電気テレビ工場の従業員から、『眼にあまる押しつけ選挙』として投書がありました。**うらあきら**という仮名入りのその投書は、企業内候補者に対して一人十票以上獲得しないと嫌がらせをされたり、仕事中にビラまきを強制されている実態が詳しく述べられており、各方面から批判の声があがっております。

コーラスB　終ります。

7

工場長室、秘書はコーラスBでも可。

工場長　君、無能だよ、こんなこと許しとって。（新聞を叩く）

糸川　はっ、まさかこの工場の中からそんな投書なんて夢にも思いませんでしたので。

工場長　それが間違っとるんだよ。現に投書が新聞にもテレビにも載ってしまった。わたしはテレビが憎い。

糸川　メシのタネでございます。

工場長　君は総務担当として、その投書した犯人が誰かぐらいおよその見当もつかんのかね。

糸川　はっ、大体の見当は——。

工場長　どこで働いている。誰だそれは。

糸川　はあ、アフターサービスの方にいる……ではないかと。

工場長　名前は。

糸川　ですから、まだ確たる証拠がございませんからもうしばらく——。

工場長　名前を言いたまえ。

糸川　はあ……山野あきら……。

工場長　何、山野あきら……あきら……そいつだ、決まった。（秘書に）君、アフターサービス課の課長――。

糸川　北山さんです。

工場長　そう。彼をすぐ呼びたまえ。

秘書　はい。（電話が鳴るので取る）はい、工場長室です。……しばらくお待ち下さい。工場長、社長からです。（去る）

工場長　何！（受話器に）もしもし……はい、代りました。……はい、すみません。はい、申訳ありません。……はい、大体目星がつきましたので……はい、もうしばらく……はい、判明次第本社へ伺います。……どうも失礼いたします。（切る）

糸川　御苦労様です。

工場長　社長もカンカンじゃないか。君、この責任は全て君にあるのだぞ。

糸川　はい。

工場長　一体君は、今の情勢をどう分析しとる。

糸川　はあ、追込みの時期だと――。

工場長　時期ばかりじゃない。工場中の気持がどこまで固まっているかということだ。

糸川　はあ、組合の方もがんばってくれてますし、下請けも、発注減とからめて運動やらせてますので割合――。

工場長　それもこのニュースが拡大していってみろ。尻込みしてしまうじゃないか。

糸川　それにつきましても、私、各部課長がどこまで積極的に力を注いでくれているかいささか疑問に思います。

工場長　諸々は感じているんだがな。連中は表面では話を合わせているくせに、本当の意味でこの選挙の重要さがわかっとらん。

糸川　全く、全くその通りでございます。

秘書が、北山を連れて来る。

北山　どうも、お呼びだそうで。

糸川　大変なんですよ。

工場長　この朝刊のニュース読んだかね。

北山　はあ、なんのに。

工場長　アフターサービス課に妙な奴がいるそうじゃないか。

北山　妙、と申しますと。

工場長　気がつかんのかね、君は。

糸川　ほら、あの連中のことですよ。

北山　一人、組合の役選に出た奴がおりまして、誠に私の監督不行届きで何とも――。

工場長　そいつだ、投書した犯人は。

北山　まさか、そこまでは。

工場長　すぐ調べろ、その背後関係もな。

北山　背後関係？

工場長　必ず若い奴をたきつけている大物がいるはずだ。

糸川　ほら、あの南さんだってわかったもんじゃありませんよ。選挙カンパも全然やる気ないんですから。

北山　君は少し黙って――。

工場長　南……。

糸川　ポスターのモデルです。昔、組合運動をやってたという。

北山　もう二十何年も前のことですから。

工場長　昔だからといって油断できない。革新のムードに乗って眠っていた血が騒ぐってこともある。いいから叩きあげろ。

糸川　そこなんです、私が申上げたいのも。

工場長　よし。糸川君、すぐ部課長を全員特別会議室に集めろ。

糸川　はい。

工場長　いいか、食うか食われるかの斗かいだ。もし、余時候補を落選させるようなことになれば、政界財界から相手にされなくなるし、労使協調路線にもヒビが入りかね

ない。そればかりか、拠点工場に指定された我々の立場も危なくなる。今や容易ならざる事態だ。わかるか。

二人　はい。

工場長　国の選挙も、組合の選挙も全てアジアのため、一本の線でつながっている。死に物狂いで両方共うまくいくようにするんだ。失敗は許されない。いいか。

二人　はい。

工場長　よし、何時！

二人　四時！

工場長　選挙！

二人　余時！

工場長　行け！

二人行進して去る。

工場長　（秘書に）何時だ。

秘書　四時！

工場長　バカ、正確な時間だ。

秘書　すみません。八時四十五分です。

工場長　時間も日日もどんどん過ぎるというのに、どいつもこいつも頼りない奴ばかりで――。

秘書　申訳ございません。

工場長　いいからお茶でも持ってきなさい。

秘書去る。

工場長　（電話をかける）もしもし、公安庁査庁ですか。……課長お願いします。……あっ、登録ナンバー三五ですが、至急ご相談申上げたいことが……はい……。

8

アフターサービス課、早朝。

盆栽手入れの太郎と掃除中のはるみ――

はるみ　毎朝手入れするの……大変ですね。

太郎　盆栽だって、生き物だからね。

はるみ　生き物――。

太郎　それぞれに生命がある。だからね、こうやって手入れしとると段々情がわいてくるんだ。

はるみ　でも針金で曲げられてるでしょ。かわいそうみたい。

太郎　ははは……曲げられて……うん、そうかも知れないな。種から、やっとここまでになったところでひん曲げられちゃうんだから。ほほう、曲げられた枝から小さな葉を突き出している。こりゃ精一杯の抗議をしているのかも知れんな。

はるみ　……どうなってもいいって思うこともあるわ。

太郎　どうして、一度や二度、はるみちゃんのような経験は過きていくもんだ。これからの人生のこやしにすればいいのさ。

はるみ　……これからの人生……。

太郎　かえってこないよ、青春は。ははは……こりゃ柄にもないこと言っちゃったな。

はるみ　ううん。

太郎　若い人には弾力があるからね、すぐまっすぐに戻れる。体も心も。（水をかけ）さあ、もっと青々となれよ。

はるみ　……ねえ南さん。この工場のどこかに、やはり今度の選挙に腹をたてている人がいるのね、あきらさんたちが言う通り。ひょっとしたら、明日の執行委員選挙勝つかも知れないわ。

太郎　さて、どうかな。

夏雄が走り込んでくる。

夏雄　南さん。あきらが労務へ呼び出された。すぐ――。

太郎　労務へ。

夏雄　良子がこっそり知らせてくれたんだ。私服の刑事もきているらしい。

はるみ　どうなるの、ねえ。

夏雄　会社側は、あの投書した人間をあきらと決めつけているんだ。

はるみ　南さん。

額のふゆ　貴方、行ってあげなければ――。

太郎　わしに何ができる。

額のふゆ　若い人は、投書という方法でなく、正面切って向っているのよ。

太郎　だから……でかすぎる相手の前で、結局つぶれて。

額のふゆ　また立ち上がるわ。

太郎　立ちあがる――。

額のふゆ　時代は、少しずつ変わってきてるのよ、まわり道しながら少しずつ――。

アナウンス　「緊急連絡します、全員体育館へ集合して下さい。大至急集合して下さい。緊急連絡します……」

夏雄　くそっ。また集めて締めつけやがる。

太郎　……労務へ行ってみよう。

夏雄　そうこなくちゃ、よおし。

太郎　いや、二人はここで待っててくれ。

はるみ　どうして。

太郎　いいから、なっ。（走り去る）

はるみ　あきらさん、大丈夫かしら。

夏雄　あいつはしっかりしてるからな。

はるみ　この間――。

夏雄　（同時に）俺――。

はるみ　……座ぶとん、ありがとね。

夏雄　ああ、あれね、あれバーゲンでさ、五百円で売ってたから、バーゲンで、ははは……腰、どう。

はるみ　ありがとう。だんだん楽に。

夏雄　うん、そりゃあよかった。

はるみ　私……アジア電気やめようと思ってたけど、やはりここで働く。

夏雄　ほんと！

はるみ　うん。

夏雄　どこで働いたって一緒だからね。去るも地獄、残るも地獄っていう言葉もあるからな。

はるみ　でも……どこかに私たちの夢をかなえてくれる場がありそうな気がしてたの。

夏雄　自分でつくらん限り、そんなとこありゃしない。

はるみ　自分で――。

夏雄　組合を、ほんとの組合にしていこうとがんばっているあきらたちを見てきて、俺も変わってきたんだ。今の社会をよくしていくのは俺たち労働者だってな。

はるみ　私もふくめて？

夏雄　ももろん。

はるみ　……そうかしら。

夏雄　はるみは悲観的すぎる。

はるみ　あなたは楽天的すぎるわ。

夏雄　だから、二人合わせると丁度いい。

はるみ　えっ？

夏雄　（一人言）こんなにスラスラいっていいのかな。（はるみに）何だ男の一人や二人、くさるほどいるじゃないか。

はるみ　でも、私の全てを賭けてたの。

夏雄　気障なこというな。

はるみ　ほんとよ、身も心も。

夏雄　てやんでえ、こちとらそんな打込める恋も味あわない毎日だ。いつまでも泣言並べないで、前向いて歩いたらどうだ。

はるみ　……。

夏雄　笑え。

はるみ　今は、むり。

夏雄　じゃとっておきの話聞かせてやるか。

『おおい八っつあん、塀をなおしたかい、

へい』『おおい熊さん、かこい作ったかい、かこいました』

夏雄は、笑いかけたはるみをいきなりかつぎ上げる。

はるみ　やめて、みんな見てるわ。

夏雄　随分重いなあ。

はるみ　男でしょう。

夏雄　歯生、やいもっと胸を張れ。

はるみ　はってるわ。

夏雄　オッパイじゃないぞ。胸だ、生きていく姿勢だ。

9

コーラスAとB。

コーラスA　選挙結果を報告します。まず参議院議員全国区の結果から。

コーラスB　全国区第一位宮田馨（自由新）二百五十九万五千二百三十六票当選、第三十六位余時武夫（全社新）六十四万七千四百七十六票当選、第五十九位下り坂健（自由新）五十一万六千百五十九票落選。

コーラスA　では続きまして、アジア電気テレビ工場もとい、アジア労組テレビ支部の執行委員選挙結果、定員八名。

コーラスB　第一位以下八位まで、会社及び労働組合推せん全員当選、次点山野あきら（フリー）四百三十九票。以下省略。

コーラスA　終ります。

10

スピーカーから拍手、万才等々。

インタビュア　どうもご当選おめでとうございます。

余時　ありがとうございます。出身母体であるアジア電気はじめ、多くの方々の一丸となった御支援の賜と、深く感謝申上げる次第でございます。

インタビュア　新議員としてまず手がけたいことはいかがですか。

余時　福祉ですね。特に働く人たちの定年後の生活を保障できるようしたいものです。

インタビュア　労使協調の選挙運動ということで注目された訳ですが、賃上げについていかがお考えですか。

余時　まあ上がり過ぎてもいけないし、上がらなくてもいけない、かように考えとります。

インタビュア　物価、とりわけ電気製品の値上がりについては――。

余時　上がらなくてはいけないし、上がり過ぎても――まあ石油並はやむをえないとかように考えとります。

インタビュア　日米安保条約について一言。

余時　なくては困るし、あっても困らないものと、かように考えとります。

インタビュア　最後に、余時新議員は、保守革新いずれの陣営と考えればよろしいでしょうか。

余時　そういう両極を排した保守的革新、又は革新的保守とかように考えとります。

インタビュア　はい、どうもありがとうございました。

11

たたずむ、あきらと良子。

あきら　だから……どうしてもう会えないのか話してくれ。……嫌いになったというならあきらめるさ、でも——。

良子　ついていけないの、私には。

あきら　ついて——だって俺は何も特別なことをしているんじゃないぞ。

良子　そうよ。でも……私の生まれ育った環境からは特別なことよ。これ以上もう父や母に心配かけたくないの。

あきら　何を言われたんだ、労務に。

良子　貴方とのことを根堀り葉堀り……。

あきら　くそっ。

良子　私、こたえなかったわ。知らない知らないって。そうこたえながら、じゃあきらさんのことどれだけ知っていたのかと思い返して……涙がとまらなかった。

あきら　あの選挙で終ったんじゃない。組合民主化の運動も、俺と君とのことも、これからじゃないのか。

良子　高校卒業して入社したときは、いっぱい希望を持っていたわ。働いて自分の生計をたてていく、すごく緊張もしてた。

あきら　みんなそうさ、そういう夢をぶちこわす体制を何とかしなければ、負けていくばかりだ。

良子　気の遠くなるような道のりね。

あきら　今度の組合選挙だって、俺たちの支持票は三割も伸びた。あの南さんだって俺のために……遠いように見えてもいつか—

良子　私、ここで。色々、ありがとう。

あきら　おい、待ってくれよ。

良子　身体に気をつけてね、ほんとに。

あきら　どうするんだ、これから。

良子　しばらく会社休んで、色々考える。

あきら　働くこと、やめちゃだめだぞ。

はげしい雨音——。

良子　はじめてトラックに乗せてもらったのもこんな雨の日だったわね。傘がなくて大通りを走っていたら……新入社員の私にはとてもうれしかった。

あきら　君の両親に合わせてくれ。

良子　ううん。もう、さよなら（走り去る）

見送るが、やがて歩き出すあきら。

夜、一人仕事をしている太郎。

太郎　……高圧パックTPA—二〇〇四A……今月の出荷が（そろばんを入れて）十二の、八の、五の……。

額のふゆ　明日は定年退職式でしょ。

太郎　……二十四の……この追加分が……。

額のふゆ　もう仕事は終えたら。

太郎　けじめだけはつけとかなくちゃ、月じまいの在庫整理だからな。

額のふゆ　再就職の話、どう。

太郎　合計百六十三、在庫は、差引くと—。

北山課長がくる。

北山　わるいな南さん、定年前日まで働かして、ほんとにすまん。

太郎　課長。

北山　もう係長だよ。

太郎　係長——。

北山　選挙の不手際で格下げさ……あの糸川が一足とびに課長代理……ひどいもんだ。わしたんか、あの大争議のとき、真先会社に忠誠誓って行動した人間なのにねえ、君の話もあきらのことで結局。

太郎　あれはただ、仕事場へ返してと——。

北山　通じないんだよ。まあ、どの道来月から帰休一週間に踏み切るらしいし……何のために一生けん命参議院選挙やったんだろうねえ、全く。まっ、愚痴を言っても始まらないが、（ポケットからウイスキーを出して）これ、ほんの気持だ。受け取ってもらえるかな。

太郎　どうも……そうですか……。

北山　気をつけて帰ってくれよ、何しろ明日は大切な退職式だからね。じゃ、（去る）

太郎は再び座って仕事をはじめるが、やがてキリをつけ、ふっと、ウイスキーを開けて飲む。なつかしい歌をそっとうたうが、そのうち机に伏して眠る。あきら、夏雄、はるみの三人が来る。

夏雄　南さん、南太郎さん。

はるみ　シッ。どうしょう。

あきら　起さない方がいいよ。（包みを出して）置いて行こう。

はるみ　（机の上に置いて）南さん、色々お世話になりました。どうもありがとう。

夏雄　これ、絵の具です。また、（額のふゆを見て）いい絵を描いて下さい。

あきら　おやすみ。

三人去る。眠り続ける太郎。

額のふゆ　終ったのね、やっと。明日は定年退職式。誓く骨休みしてからこれからのことは考えましょう。娘たちも、自分たちなりにやがて家庭を持っていくでしょうから……ずっと前ね、『お父さんは男らしくない』って言ったから怒ってやったのよ、どんなに辛いことがあっても働いて働いてあなたたちを育てて、家も建てて、おばあさんを大切にして……男らしい父さんじゃないかって、ご苦労様。私も生きていたかった。貴方のそばにもっといてあげたかった……ほんとに、ご苦労様。

夢の退職式——。

工場長　二十五年、三十年という永年勤続の皆様方の御力が、当アジア電気を支えてきてくれました。お疲れさまです。皆さんの数々の功績はこれからの若い従業員の模範として生き続けてゆくことでございましょう。アジア電気もおかげをもちまして参議院選勝利と、一兆円企業化達成への見通しも出て参りました。これからは外からこの会社を見守って下さい。どうか退職後は、長年の疲れをいやされて、のんびり健康に過ごされるよう御祈り申上げます。

下がった工場長に糸川が耳打ちする。

糸川　工場長、玄関に車が待っております。

工場長　そう。

糸川　今日は中央カントリークラブですね。

工場長　君、定年の連中はこの後適当に飲ませて、うっちゃっとくんだな。

糸川　はい。どうぞ行ってらっしゃいませ。

二人消える。

太郎が立つ、酔っているようでもある。

太郎　……本日は私どものためにこのような盛大な式典を挙行していただきましてありがとうございます……思いかえしてみますれば入社して三十年、色々なできごとが今走馬灯のようにかけめぐるのでございます……楽しいこともありました。芋をかじり

ながら、旋盤をまわしてこれからの日本の産業はわしたちが盛りあげていくんだという夢を抱いていたこともあります…それが今はどうでしょう。何から何まで合理化されて、働く人間は機械の一部になってしまいました……働くことが嫌だとか辛いと申すわけじゃありません。もっとみんなが楽しく働くことができ、定年がきても老後に不安のないような……そういう風にしてもらいたいのです。わしたちが、のんびり暮れをいやすことができるでしょうか……これからも、どこかでずっと働き続けて参ります……これからもずっと……。

ふっと我にかえる太郎。

職場の中を改めて見まわした後、風呂敷を広げふゆの絵を外して包む。もう一度見直して、ゆっくり去る。

――幕――

◆作者付記

この作品は、名芸の上演台本を再度改稿して短かくしたものです。

演出を担当された浦はじめ氏（劇団演集）の助言をいただきましたこと、付記して御礼申上げます。

（一九七四・一二・三）

相沢嘉久治戯曲集Ⅰ

「北方の記録」

「北方の記録」「風」「雨」「雪」「北方の灯は消えず」の五つの作品が収録されている。処女作と云われる「北方の記録」の一九六一年頃から、ほぼ十年にわたる、作者の、それも生地山形に材をとったいわゆる「北方もの」の集成をここに見ることができる。

「北方の記録」は知られているように京浜協同劇団によって初演（一九六三年十一月二〇日）、翌年には東京芸術座でも上演された。山形県大高根村、戸沢村の米軍射撃場に対する、苦しい、農村青年たちの闘いをえがいたものだが、これは、山形常話の会「もんぺの子」同人共同創作「山が泣いている」山形農民文学懇話会「地下水」同人の記録より、とあるように、闘いそのものの経過よりも、青年たちの、うつりゆく生活、思想の襞が、作者の熱い共感によって、濃密に描かれているのが特色である。処女作に相応しい、力と喜びにあふれている。

「北方の灯は消えず」は故佐々木隆氏に捧ぐとあって（この佐々木の誤字は手痛い）、作者も、その上演を托した文化座の佐佐木隆氏と倶に、この戯曲を未上演のまま葬るらしい。敗戦を境とした、ある東北地方農村の小学校の一女教員の物語と云ってもいいが、むしろ、ここには、教育受難、変節教育者への作者の怒りが猛っている。「北方の記録」に見合った力作である。

他の三作品は、「月山三部作」とよんでいる。それぞれに托した思いは伝わるが、ぼくは「雨」にひかれた。（萩）

発行所　東京都渋谷区代々木二―四の四
永楽ビル一F六号　場出版局
電話〇三（三七〇）三四三一
定　価　一五〇〇円

花火

小島真木

浅野ふく
とき　千恵子
佐々木光子
石川孝作
近所の主婦1
〃　2
〃　3

川に近いある駄菓子屋の店先き。舞台には家の前面だけが見える。ガラス戸にはトコロ天アリマスとか、やきそば、おでん等の貼り紙がしてあり、氷をかく場所が少し突き出ている。

家の前に縁台が二つと、ガムの出る子供用パチンコ台が一つ、アイスボックスが置かれている。

大通りから花火見物に河原へ急ぐ人々のざわめきが聞える。

夜空にくっきりと花火があがる。

ふく、縁台にちょこんと坐りこんで花火を無心にながめている。主婦一、二、三登場。祭りの夜らしくのりのきいた浴衣姿で。

主婦1　ああ、のどがかわいた。

主婦2　――あれ、おばあちゃん、いいとこで見てるじゃんか。

主婦1　（ボックスからジュースを出して、奥に向って）おばちゃん、ジュースもらうよ。

ふく　お母ちゃん、お客さんだよ。

とき（声）はいよ。――ちょっと待ってて。

主婦3　飲み逃げしちゃうよ。

とき登場。

とき　あれ、どこの人かと思ったよ。――あんたっち似合うじゃん。

主婦2　おばちゃんの見立てがよかっただよ

主婦1　着手がいいだよ。女盛りだけんねえ

主婦3　もう、今日の内職代パーだよ。おばちゃんとこへ浴衣のお金払わなきゃなんないでしょ。――おばちゃん、パーマかけて、セットしたら四千円とられただよ。

とき　ほんと？　まあ何でも高くなったね。

主婦2　工賃だけは上がんないだよねえ、仕事は減ったし。

主婦1　もう景気の悪い話はやめやめ！おばちゃん氷あずき作って。アンコたくさん入れてよ。

主婦3　あたしも。

主婦2　あたしはトコロ天。

とき　あいよ。（内へ入りながら）だけど不景気だねえ。

主婦2　あれ、こんなとこでもひびくかね？

とき　ひびく、ひびく。こうゆうとこだから ひびくだよ。あんたっちが不景気だもん。つめるとこったら買い食いぐらいしかないじゃん。

主婦1　だけんさ、一日一回はおばちゃんの顔みないとせいせいしないだよ。亭主と面つきあわせてケミカルのふち縫いやってりゃ、いい加減肩がこっちゃうよ。

とき　もったいないこと言いなさんな。一緒にやりたくたって、いないもんもいるだよ

主婦1　そいじゃおばさん貸してやるよ。

とき　くれてやるって云わないだけ可愛いじゃんか。（笑い）ここら、昔はみんな下駄ばっかだったにねえ。

主婦3　おばちゃんちも下駄だっけ？

とき　うちは鏡台塗りをやってただよ。

主婦2　（主婦3の下駄を指して）あたしゃそうゆうのの下塗りやってたじゃん。トノコとニカワ塗っちゃあさ。ねえ。（主婦1に）

主婦1　あんた、よくかかとがひびわれないねえ。

主婦3　気をつけてるだもん。うちのお父ちゃんはガサガサした足の女はきらいだって云うだよ。ザラザラするから気持悪いだって。

主婦1　（とぼけて）へえ、ザラザラするって、どう云う時判るだか。

主婦3　いや――、おばさんたら！いやらしい！

主婦1　あれ、いやらしいことなのかね。

主婦3　知らない、もう！

とき　お待ちどうさん。ちょっと布団いらない？

主婦1　何でここで布団の話が出るだよ、おばちゃん。

とき　「星の友」って、ほら、月賦の布団があるじゃん。委託販売頼まれちゃっただよ

主婦2　浴衣だの布団だの、おばちゃんも嫁ぐねえ。

とき　お客さんに頼まれるもんでね、月賦もさ、千円でいいだよ。

主婦1　夏掛けがボロだから、欲しいことは欲しいだけんさ。明日見にくるよ。

とき　うん、そうして。まず奇麗で新婚さんみたいのだよ。

主婦3　おじさん身体がもたないって云うよ、きっと。

主婦1　よく云うだよ。なにが〝おばさんいやらしい〟だね。うちは、あんたっちと違って、もうザラザラしないだよ。

主婦3　また！

主婦2　浅野さんはえらいって、うちの父ちゃんが云いきれないだよ。女の細腕一つで子供を大学までやってさ、嫁っこもらうって云や、二階もあげてさ。

とき　何言うだか、稼ぎ手がいる家のようにはいきっこないじゃん。借金コンクリートだよ。

主婦3　おばちゃんちは遺族年金もらってるだもん、いいわね。うちなんか赤紙で行っただもん、一番低いだよ。ねえ、軍人でえらい衆っちはたくさんもらうらしいけえが――死んでも命の値段までちがうだよねえ

主婦1　もらえないよりはいいわね。うちの父ちゃんなんか死んだって一銭にもなりはしないよ。

とき　そう云うもんじゃないだよ。

主婦3　せっかく建てんのに息子さんも何故ここに住まないだか。もったいないじゃんねえ。

とき　はじめは二人だけでやってみる方がいいと思ってね。

主婦3　おばちゃんがしっかりしすぎてるから嫁さんが入らないんだって云ってる人っ

ちがいるだよ。ねえ、おばちゃんはそんな人じゃないのに。

とき　――（明るく）女世帯だといろいろ云われるだよ。まづ、男の人とも立ち話しもできないわねえ。もう、あたしゃ何云われたって気にしないだよ。いやな想いするだけ馬鹿馬鹿しいもん。

主婦2　本当だよ、おばちゃん。云いたい奴にゃ云わせとくさ。

主婦1　そう云うあんただって結構人のこと云うの好きじゃんか。

主婦2　あたしゃね、おばちゃんのことなんかこれっぽっちも云ったことなんかないよ

とき　判ってるから。もうやめようよ。お祭りの晩じゃないの。

ふく　お母ちゃん、兄ちゃんはまだ来ないのかね。

とき　（強く）何度聞いたら判るだか！……今夜は来ないって云ったじゃん、おばあちゃん。

ふく　あれ、そうだったかねえ。

主婦1　何で、おばあちゃん。刺身やらいろいろ買いこんでたっけじゃん。

とき　ちょっと嫁の方で急に親戚の人が来たもんでね。

主婦1　嫁っこもらったら男の子はもうおしまいだね。

とき　一軒はりゃあ、いろいろあるでしょうよ、あの子っちだって。

千恵子かけこんでくる。

千恵子　おばちゃん、あのね。

とき　何だね、あんたは。じきいなくなっちゃって。店番にもなんないじゃん。

千恵子　だって橋のとこまで行かないと仕掛けが見えないだもん。

主婦1　弟さんとこの子だっけか。

とき　ねえ、アルバイトさせてたんで調子のいいこと云って。もう、おばちゃんはアルバイト料なんか払わないよ。

千恵子　いやあ、もうあてにしてるんだから。ねえおばちゃん、今ちょっとだけだよねえ。

ふく　あれ、光ちゃん。どこへ行ってきただねえ。

千恵子　また！ズッコケちゃうな、おばあちゃんは。あたしは光ちゃんじゃないの。千恵ちゃんなの。

ふく　ありゃ、わしゃこのごろ眼がきかんもんでね。悪いっけゃあ。

千恵子　云っちゃ悪いけど眼の故だけじゃないじゃない？

とき　ねえ、このくらいの子見ると光ちゃんて云うだよ、困っちゃう。

主婦2　このごろ、少しぼけてきたね。

主婦1　だけどあんた戦争の頃のことだけはあたしらよりよく覚えてるよ。

主婦3　そろそろ行こうよ。きっと怒ってるよ。

とき　あんたっち子供っちはね？

主婦1　先きに亭主にくっつけてやっちゃっただよ。さ、いかず。

光子登場

千恵子　（小さい声で）あの人がね、ここに浅野って家はないかって、聞いただよ。――近でさ、とまっちゃってじっと立ってるだよ。なんだか気持悪いよ。

花火。

光子　（ふくに）おばさん。

ふく　……

光子　おばさん、判らないかしら。
ふく　どなたさんだっけねえ。
光子　おばさん、光子です。隣にいた佐々木です。
とき　あんた、光ちゃん？
光子　ええ。——おねえさん？
とき　そう。おばあちゃん、光ちゃんだよ。あんたがいつも云ってた光ちゃんだよ。
ふく　あれ、そうかね。（あいまいに笑っている）
光子　おばさんに逢えて……よかった。（こらえていたものがふき出たように涙ぐむ）
ふく　（済まなさそうに）わしゃ、もうろくしちゃってねえ——そうかね、あんたが光ちゃんかね。（あいまいなままに）
光子　…　ごめんなさい。おばさんの顔見たら何だか泣けちゃって。
主婦1　あたし判る？
光子　——角のおねえさん。
主婦1　そう。この人わかる？
光子　健ちゃんちおばさんでしょ。
主婦2　そうだよ、よく判ったっけねえ。
光子　ほんとに。
主婦1　墓参りかね。
光子　ええ。
とき　まあ、何年ぶりだろう。
光子　何十年ぶりなのよ。子供たちが大きくなったもんだから、やっと出て来れたのよ
とき　女はいつまでたってもやるせないだよねえ。——そう、千葉へ行ったのは終戦の翌年ぐらいだっけねえ。

花火。

光子　あんまり変っちゃって——。あの大通り、ものすごい人出なのね。——人に押されて歩いてきたら何だか胸が一杯になっちゃって…
とき　……大通りの交番のとこだっけねえ。
主婦1　そいでも、あんただけよく助かったけだよねえ。
光子　途中ではぐれちゃったもんだから……呼び合って行ったんだけど、気がついたら一人だったの。
主婦2　あの人ごみじゃはぐれもするさあ。わたしらは早く逃げた方だよ。まだここらへは焼夷弾は落ちてない頃だもん。それがあんた、あっちからこっちから避難する衆が出て来て、あっと云う間に道いっぱいになっちゃって、まずすき間もなくなっちゃったもん。子供がぬげたよって泣いたって、身をこごめることもできないじゃん。〝あきらめな、手を離したら駄目だよ。つぶされちゃうよ〟ってどなるのが精一杯だったもん。
主婦1　十一時半頃一度空襲警報解除になっただよねえ？そいでふとんへ入ったっけだよ。入ってすぐだったね、ドドッって音がして外へ出たら駅前の方がもう真赤じゃんね。支度して逃げる頃にゃすぐ近くまで落されてるだもん。飛行機が低くつっこんでくるとザザッて音がして焼夷弾がつながって落ちてくるだけえが、まるで火の壁が空から落ちてくるみたいだったねえ。まづあんな近くで飛行機見たのは初めてだよ。ニヤニヤ笑ってる兵隊の顔まで見えたもん。
千恵子　おばさんオーバー。見えっこないじゃん、夜なのに。
主婦1　馬鹿だね、火がバンバン燃えてて、真昼間と同じ位い明るいだよ。
主婦3　あたし先きに行ってるよ。おばちゃんちの空襲の話が始まるときりがないからね。（去る）
主婦1　あたしらもすぐ行くよ。
ふく　まず、あの晩のことはどんな人でも十

中八九ほども話せる人はないズラよ。火の粉がザアザア降ってきて、こんなもえさりがバラバラ落ちてくるんだよ。防空頭布だって、まつげだって、なんだって燃えちゃうだよ。どの位い水をかぶっちゃ逃げただか。それにあんた、火は風を呼ぶっていうけど、まず竜巻きみたいな風が吹いてね。わしら河原へ逃げただけえが、お母ちゃんもわしも立っていられなくて、はいずってただよ。大水にも大火にもあったけえが、空襲はたまんなく恐ろしいって思ったけや。逃げるとこがないだもん。
主婦1　そりゃそうだよ。先きにまわりへぐるっと落しといて、そいから中へびっしり落しただってもん。ねえ、油までまいて焼き殺そうとしただもん。あたしら雨が降ってきたと思って喜こんだら、油だっただもんね。
とき　わたし一人だったから、とっても逃げおおせないっけよ。道路は火の河みたいに火がくるくるまわりながら流れてるだもん。赤ん坊は熱いのと煙でぐったりしちゃって生きてるだか死んでるだか判んないし。何度大通りの防空壕へ入りこみそうになったか判んないよ。そのたびに河原まで行かにゃ死んじゃうよ、あんたっち死なせたら戦死したお父ちゃんに申し訳けがないだよっておばあちゃんに云われて、やっと河原へ逃げただもん。
主婦1　おばちゃんは命拾いしただよ。あの道の両脇にずっと堀ってあった防空壕でどの位い人が死んでたか、まず服だってなんだって焼けちゃって真黒けの泥人形みたいだよ。髪の毛だってありゃしないだもん、男だか女だか判んないじゃん。
ふく　光ちゃんちお母ちゃんちもそこで亡くなっただよ。赤ん坊とちっちゃい子をこうやっておなかの下に抱えるようにして、上の子がぴったり腕にすがりついたまんま亡くなってただよ。せつなくてねえ。お母ちゃんの金歯と赤ん坊のおしめの切れはしでやっと判っただよ。あの大通りの両側に、ズラッとヤケトタンかぶせた死んだ衆いっぱいならべてあってねえ。地獄とはこのこんだと思ったよ。一枚一枚ヤケトタンめくっちゃ、光ちゃのお父ちゃんとどのくらい探して歩いただか。
とき　（光子の涙を見つけて）おばあちゃん。
千恵子　あの大通り？　なんだか信じられないな。
ふく　あんたはあたしを困らせただよ。
千恵子　あたしが？
ふく　まず、ひどい火傷だったけじゃん。背中が一番ひどくてね。（千恵子抗議しようとして、ときに止められる。）しまいにゃあんた蛆がわいちゃって、それがもぞもぞ動くたびに痛い痛いって泣くだよ。どの位いピンセットでとってやっただか。ガーゼをはがすときせつなくってねえ。
光子　おばさんにどの位い世話になったか……我儘の云い放題云って。
主婦1　光ちゃんはどこにいたっけだねえ。
光子　（一つ一つ眺めるように、おぼつかない様子さえみえる）角に銀行をこわした空地があったでしょ。そこに防火用水みたいなコンクリートの箱が埋まってたもんだから、その中に朝までじっと伏せてたの。最初は安倍川へ逃げようと思って大通りへ出たのね。そしたら人がもう一杯で、とっても行きつけそうもないから学校の方へ逃げようって戻ったの。〝こっちは火の海だぞ〟ってみんな戻ってくるでしょ。反対の方へ行くとまた〝だめだ〟って戻ってくるのよ。結局またあの道にみんなかたまっちゃったのね。——火が吹きつけるみたいに

ぶつかってきて、どうしてか判らないけど、身体が浮いて地面に叩きつけられるの走ろうとすると、また地面に叩きつけられる。——煙で息もできないのよ。苦しくってねえ。どうしてそのコンクリの中にいたのか判らないわ。きっとそこまできて動けなくなっちゃったのね。——どのくらいそこにいたのかも思い出せないの。気がついたら、夜が明けかかっていて、近くに黒こげの死んだ人がまだペラペラ燃えていたわ。あんまり手がひりひりするから見たら、両方とも皮膚がぶらんってたれ下っていてね——眼が乾いて乾いて水を頂戴、水を頂戴って云い続けていたら消防団の人がバケツに水をもってきてくれたのね。もうガブガブ半分位い飲んじゃった。あの水のおいしさが今だに忘れられないわ。

千恵子 おばさん、そん時いくつだった。

光子 十二よ。

千恵子 あたしと一緒だ。——こわいっけでしょう、おばさん。

光子 ……（千恵子をじっと見つめて）こんなだったのね、あたし。

花火。

ふく この花火も戦災で死んだ仏さんちの供養であげただけえが、——みんな忘れちまって。

千恵子 だって、これは〝安倍川の花火〟でしょ？

ふく ちがうだよ。ほれ、この河原でさ、亡くなった衆をみんな自分ちで焼いたっけじゃん、焼けぼっくい集めてきちゃさ。身許のわかんない衆は刑務所の囚人がトラックで集めてきちゃ焼いたっけだよ。夜になるとあの河原一杯に五十も百もボッーと赤い火がもえてたっけよう。——その供養の花火だよ。わしらん和夫も満洲で死んだで、こうやって焼かれたのかなあって、せつないっけや。

主婦2 毎日臭いっけねえ。あんた千七百人だか死んだだってね。

光子 ——淋しい花火だっけ。——ぽつりぽつり雨が降って。

ふく 仏さんの涙雨だよ。

千恵子 仕掛け見たら仏さんもびっくりしちゃうね。お茶の番茶堂とか、ホテルシズオカなんて。

主婦1 今夜あたり三十万からの人が出てるだってよ、さっきテレビで云ってたあね。もう二十何年もたってるだもん、仕様がないさ。仏さんも賑やかでいいじゃんか。

ふく あんなむごい死に方をした衆を忘れちゃ可哀想だよ。それが生きてるもんの務めだよ。

孝作登場。主婦1のお尻を叩いて。

孝作 ほい、おまっち父ちゃんが若い娘と浮気してたぞ。

主婦1 何云ってるだか。そんな甲斐性がありゃ苦労しないよ！

孝作 何が浮ばれないだって、ええ？

主婦2 供養のためにあげた花火だってこと話してただよ。

孝作 今は市の名物になっちゃってるだからそれは仕様がないだな。川であげるから背景がいいだもん。供養なら他にいくらでも方法はあるさ。

主婦1 さていかず。——おばちゃん、あたしジュースと氷。

お金を渡す。主婦2も。

とき はいよ、ありがとうよ。

孝作 おまっち父さん怒ってたぞ。きっと浅野さんで油売ってるから、すぐ来るように云ってくれってカンカンだったぞ。

主婦1 その手にゃのらないよ。光ちゃん、それじゃあね。

主婦2 また家にも寄ってよ。

主婦1 さあ早く行かないと仕掛けが始まっちゃうよ。

主婦1、2賑やかに退場。千恵子片附けを始める。

孝作 あの連中がいなくなったら、ほれ、虫が鳴きだしたあ。——おばあちゃん達者でええな。

ふく ちかごろ足が弱くなってねえ。

孝作 そりゃ八十にもなりゃ誰だってちったあどっかに云うとこは出てくるさ。うちのばあさんが明後日（あさって）息子の立日だからまたお念仏あげに来てくりょうってさ。

ふく わしゃ足が弱くなっちゃってねえ。

とき あたしが送ってくから大丈夫だよ、おばあちゃん。

孝作 昔は命日って云やあ、ここの遺族全部揃って線香あげに行ったもんだけえが、だんだん気持が薄くなるだな。今じゃ、おらん家と豆腐屋とここだけだもんな。

とき やっぱ仏さんの話が出来るのが一番嬉しいみたいで、おばあちゃんも楽しみにしているだよ。

ふく 護国神社から命日祭の通知が来てね、出掛けたっけだよ。ちゃんと浅野和夫って名前を呼んで御祈禱してくれてね。お供物も戴いてきたっだよ。

孝作 ほうか、ええっけなあ。

とき、ジュースを運んできて孝作と光子に。

とき 商売もんでわるいけど。

孝作 いつも悪いね。あんたっちはどこだっけ？

とき 満洲の牧丹江ってとこだよ。病気でね、居職（いじょく）の坐り仕事ばっかしてた人だから、兵隊なんかできる身体じゃなかっただね。——（小さく）光ちゃん、悪いね、ちょっと待っててね。

孝作 そんとき、おときさんはいくつだったっけだ？

とき 十九年の暮だから、二十四だね。

孝作 それからずっと空家か。

とき 借り手がないもんでね。

孝作 そうでもないっけら。

とき 食うことで精一杯だあね。一息ついた時にゃ、はあ、こんなおばあさんになっちゃってさ。

孝作 まだまだ。今からでも遅かあないぜ。

とき そいじゃおじさん探してちょうだいよ

孝作 俺じゃどうだ。

とき 年寄りの世話は一人で充分。

孝作 俺はまだ現役だぜ。

とき あれ、お見それしました。（笑い）

孝作 馬鹿云ってると肝心の用を忘れちゃう、靖国神社参拝の募集の紙が来たで持ってきたよ。今年はおばあちゃんは駄目ずら？どうだい、おときさん。あんた行ってくんないかな。遺族もみんな年とっちゃって行けない衆ばっかだっかだよ。あんまり人数が少いのもまとめるわしらとしてはなあ——。

とき ほんとにいつも世話になるばっかで、何にもできなくて——。行きたいと思っても商売やってるとなかなか思うようにならな

ないもんでね。

孝作　短っ子だっけか。このねえちゃんに頼んだっていいじゃんか。ほれ、靖国神社を国でまつってもらうように、ずっと運動してきたっけら？　その法案をこの秋の国会に出してくれるってことに決まっただってよ。この前の時は安保条約改定の時だったで大事をとりたいって、ああ、それに万博の時だっけだよ。外国のお客もくるから国会の見苦しいところを見せたくないって廃案になっちゃったっけだよな。今度は絶対通すって、いつも面倒見てくれて議員の衆が云ってくれたっていうで大丈夫だと思うだよ。ま、そういう含みもあるで、なるべく大勢の衆に行ってもらいたいだよ。――おときさんは、前に行ったことあったっけか。

とき　やるせはなくって、一度も行ったことないだよ。

孝作　そりゃあんた参拝に行ってやんにゃ、旦那が可哀想だよ。

とき　行かなきゃとは思ってるだけど……

千恵子　そこ、何のお宮さん？

孝作　――これだんてな。やっぱ俺っちが死んだらだんだん心が薄くなって、まつってくれるもんなんかいなくなるだよ。せめて国でまつってもらわにゃ安心して死ねないよ。靖国神社は国を守る為に戦って死んだ衆を英霊としてまつってあるとこだ。

千恵子　エイレイって？

孝作　すぐれた霊って書くだよ。英才の英、英語の英に霊魂の霊だよ。

千恵子　なんですぐれた霊だか。

孝作　命を犠牲にして国を守ったからだよ。

千恵子　同じ命でもいろいろあるだねえ。空襲で死んだ人だって国が戦争したから死んだんでしょ。やっぱ国の為なのにね。

とき　千恵子。

孝作　ま、とにかく昔は戦死したら靖国神社にまつられるって約束でみんな戦争へ行っただよ。ここのおじさんだってまつられてらあ。なあ、おばあちゃん。招魂式へは行ったっら？

ふく　ねえ、わしらみたいなもんを立派な衆が、まずねんごろに世話してくれて申し訳けないみたいだっけゃ。わしゃ。あんなにねんごろにされたのは生れてはじめてだっけよ。「息子さんは天皇陛下の為、国の為に名誉の戦死をしただから護国の神になってここにまつられたです」って云ってくれてねえ。――天皇陛下と皇后陛下が参拝してくれて、そのあとを大臣やらえらい衆がずっとつながって――。わしゃはじめて陛下をおがんだけえが、もったいなくて涙がこぼれたっけゃ。和夫が戦死したのも悔ないって思ったっけよう。

孝作　うちのばあさんも、あれでやっとあきらめがついたっけだよ。

千恵子　天皇って、今のあの人？

孝作　あの人？――そうだよ。

千恵子　馬鹿みたい。

孝作　今の衆にゃ判らないだろうなあ。――だけえが好き嫌いに拘らず国の為にって、そう信じて国の命令で死んでいっただからそれだけは判ってもらわにゃ、本当の犬死になってしまうだよ。なあ、何の役にもたたないことに人の命が使われていいものかどうか。この学区の慰霊祭だって先生の中に反対するもんがいて学校の講堂も貸してもらえないっけら。軍国主義は悪かったかも知れんが、死んだ衆に責任はないじゃんか。こんなに粗末に扱われて肩身の狭い思いをさせちゃ可哀想だよ。国がまつってくれて、もっと一般の衆が「国の為に死んだ」と顕彰してくれるようになってほしいって気持だけだよ。なあ、おときさん。

とき　赤紙一枚で連れていかれただからね。

ふく　まず子供をどんなに可愛がっただか。静岡連隊に入隊して一週間ばっかたって、面会に行ったけだよ。子供を乳母車にのせて、お母ちゃんと門を出てきたら、追いかけてきて、「子供だけは元気に育ててくれや、おまっち風邪をひくなよ」って子供の顔をしげしげと見ていたっけだよ。わしにゃあと二三年すれば帰れると思うから、それまで子供っちを頼むって……。あれが最后だっけねえ。すぐ中支へ行っちゃったから。――いつまでもその顔が忘れられないだよ。

千恵子　おばあちゃんたら、いつも同じことばっか云ってる。そいでいつも同じとこで泣くんだから。

孝作　まあいいって。こう云う話はいくら話したって話し足りないだよ。――おらんうちじゃガダルカナル島でマラリヤと栄養失調でやられたっけだよ。遺言状を送ってよこして――なまじああ云うもんがあると、いつまでも心が残ってよくないなあ。――戦争は二度といやだなあ。

ふく　わしゃ、戦争だけはやってもらいたくないやあ。テレビで兵隊が撃ち合いやったり、子供らが逃げてくとこ見ると辛いで、すぐ消やしちゃうだよ。わしゃ戦争だけはやってもらいたくないって、どうかしてえらい人っちに云いたいや。

とき　何云ってるだか、そんなおばあさんが国のこと云っても仕様がないじゃん。

ふく　わしゃ静かにおだやかに死にたいだよ。えらい人っちも大変だろうけどねえ。

孝作　よし、俺が大臣に云っといてやるぞ、おばあちゃん。（笑い）そいでおときさん、ええら、行ってくれゃ。ついでに成田山へもまわるだってよ。

とき　そうだねえ、どうしょうかねえ。

孝作　こういうことは思いきって行くって決めちゃうだよ。女衆はそうしないとどっこも行けないぞ。

とき　本当にそうだね。あれもこれもって考えるとそいだけでもう面倒くさくなっちゃうだよ。

孝作　今度は未亡人の衆が割合い行ってくれることになっただよ。山田さんも鈴木さんも行くからな、あとは何とだってなるよ。

とき　――そいじゃ、行こうか。

孝作　そうこなくっちゃ。気のかわらないうちにこの申込書書いてくれや。ちっと早いけえがもらってっちゃうわ。書くもんはあるよ。

ふく　わしゃ、お母ちゃんにいつも云うだよ。普段わしらなんにもできないだから、お金のことだけはちゃんと出してくりょうよ。お国でたくさんお金をもらって申訳けないで。

孝作　いつもおときさんはちゃんとしてくれてるで大丈夫だよ。おばあちゃん、（立ってパチンコ台の方へ行く）子供っちがよくやってるな。（パチンコをやる）

とき用紙を光子の坐っている縁台の端に置いてしゃがみこむ。

とき　わたしゃ字が下手だから困るよう。

孝作　ええよ、ラブレター書くわけじゃないだから。

光子　お姉さん、行くの？

とき　……？

光子　和夫さんがまつられる式にどうしてもいやだって行かなかったお姉さんを――わたし覚えているわ。

ときの動きがとまる。

間

孝作　おっ、はじまったぞ。

打上げ花火が激しく夜空を採り消えていく。

間

ときの、名前を書き終る。

ときお　お待ちどうさん。

孝作　ありがとうよ。そいじゃ、まだ廻るとこがあるだよ。

ときこ　こんな日におじさんも大変だね。

孝作　なまけものの節句働きだよ。昼間は仕事が忙しくてとても廻っちゃいられないからなあ。町内会の方もあるし、――邪魔したっけや。

ときこ　ご苦労さんです。

孝作去る。千恵子コップを片付ける。

間

光子　（立って）わたしも――ご馳走様でした。（千恵子コップを受け取り家の中に入る。）

小さな間。

ときこ　光ちゃんとは旦那さんがいるでしょ。

光子　ええ。……？

ときこ　亭主のいる者といない者じゃ、世間の見る目がちがうだよ。ちょっとでも変ったことをすれば、すぐ蔭口きかれるんだから。何があっても旦那に頼っていればいいんとはちがうんだよ。あたしら。――こんな商売してるんだから、世間にさからうようなことはできないよ。――行こうと行くまいと別にどうだっていいことじゃんか。

千恵子、戸口まで出てきて、二人の気配に押されたようにそこにじっと立っている。

光子　余分なこと云ってごめんなさい。――あの時、「お参りすりゃあ中からあの人が生きて出てくるならどんなことしても行くよ。だけどあの人はあんなとこにいない、ここに戻ってきているよ。名誉の戦死なんて云ってもらいたくない。」っておばさんの前で泣いていたおねえさんを、わたし子供だったけど、いえ、子供だったからかもしれないけど、灼きついたみたいに覚えていたもんだから。――でも、もう二十八年もたってるんですものねえ。

ときこ　……

花火、観衆のざわめき。

光子　（ふくに）おばさん、元気で長生きしてね。

ふく　いつお迎えがくるだか。（笑っている）

光子　さようなら。

去ろうとする。

ときこ　光ちゃん。……あたしがかつぎ屋をやっていたのを覚えている？――あんただって職人の娘なんだから判るでしょう。職人の家で働き手を連れて行かれりゃ、その日

から食う道がなくなるだからね。あとはお国の為に霞を食って生きていくとでも思ってたっけでしょう。ねえ。――混んだ汽車のデッキに片足でぶらさがっちゃ、米だァ魚だァ、豆だァ死にものぐるいでしょって きて売って歩いたよ。警察につかまって何度荷物とりあげられただか。

光子　わたし一緒についてったことがあったわね。橋のたもとに警官がいて、背負ってきたもの、みんなとりあげられちゃったで。――〝前には戦争未亡人って云うから見逃してやったけど、もうその手はきかないぞ〟って――わたし黙ってお姉さんのあとからついていったわ。橋の真中で、おねえさんもう暗くなった川へ向って〝馬鹿野郎！〟って怒鳴ったわ――戦争の終った年の暮だったみたい。

ときこ　それだって、まだかつげるうちはいいっけだよ。逃げる時、駅の階段で足をぶって、それも出来なくなって、飲み屋の皿洗いやったり、家政婦やったり、……あたしあの頃どうやって暮らしていただか――後妻に行かないかって云われてね、麻機（あさばた）のずっと向うまで逢いに行ったことがあるだよ。めちゃくちゃに散らかった家の中に小さい子供が三人いて、〝明日からでも来て欲しい〟って……家までの道が遠いっけよ。なんだかむやみに涙が出てきて仕様がないっけよ。……子供を殺して死ねばそれで終りになるんだけなあって思ってね。――眠っている子供の首をかかえたらたあいなく、あたしの手の中で頭をぐらぐらさせて眠っていただよ。……あたしらおばあちゃんみたいに、いつまでもあの人が生きているように思っちゃいられないだよ。毎日毎日もう死んでいないんだって思い知らされて暮らしてきたようなもんだからね。忘れなきゃ生きちゃこれないじゃん。女一人で子供をかかえて暮らしてくる辛さは亭主のある人じゃ判らないだよ。

光子　……ごめんなさい、おねえさん。……どうかしてるのよ、わたし――戦争が終っても――向うへ行ってから、気落ちした故か、じきわたしたちには父も亡くなってね。あの食べ物もない頃親戚の家に厄介になってるのもあんまり楽じゃなかったわ。――おねえさん、わたし、後妻に入ったの。

ときこ　……

光子　あんまり長く歩くと、火傷のあとが痛んで――ごめなさい。（珍台に腰かける）さっきあの通りを人に押されながら歩いていた時ねえ。後からつらく押されて倒れそうになったの。まわりの人たちもわあって云って――ほんの一、二秒だったかもしれないけどほんとにあの空襲の夜みたいな気がして、道の隅にしゃがみこんでじっとしてたの。わたし――本当に、ごうごう燃えてる音ときゃあきゃあ云う悲鳴みたいな声が、聞えたのよ。本当なのよ、おねえさん。歩いている人も花火もみんななんだか遠くに見えるの――でも、そんなの変よねえ――あんまり何も彼も変ってしまって、きっとわたし頭がおかしくなったんだわ。

ときこ　光ちゃんだって、ここに住んで毎日毎日見てればきっと慣れちゃって何とも思わなくなっちゃったけでしょうよ。

光子　そうかもしれないわ――道にしゃがみこんでしまった時ね、誰にも話さないで自分の中にだけおしこめてきたあの空襲の夜のことや、黒こげになった母たちや、この火傷の跡のことも、やっぱり遠くに見えるような気がしたの。こんなもんじゃなかったって気がしたのよ。忘れたくても忘れられっこないと思いこんできたけど、いつの間にか忘れているんじゃないのかしら、わ

たしも……

ふく 寿命じゃないだで、死んだ衆を忘れちゃ可哀想だよ。みんなで思い出してやらにゃ仏さんは浮かばれないよ。それが生きてるもんの務めだよ。

花火、観衆のざわめき。

光子 ——この花火を見るように、いつかはあの戦争のこともただこうやって眺めるだけになってしまうのかもしれない。……母たちは何んの為に死んだのかしら？

とき ——忘れなければどうなるって云うだね。

光子 ……

打ち上げ花火、激しく。

間

光子 さようなら。——

立っている千恵子の傍を通って去りかける。

千恵子 おばさんちは、何故、戦争はいやだって云わなかったの？

光子 ……そういう教育されてて、そうしか思いようがなかったのよ。

千恵子 ふうん、判んないな。——でも、おばさん、あたし、今日のこと覚えていると思うよ。——きっと覚えていると思う。——あたし、おばさんと同じ年だったんでしょう？

光子 ……さようなら。（去る）

間

千恵子 あれ、雨じゃない？ ぽつんって……

とき あ、本当だ。千恵ちゃん、出てるもん中へ入れて！

あわてて片付け始める二人。

ふく ほれ、また仏さんの涙雨だよ。

大きく、花火。そのまま灼きついたようにじっと見つめる、とき。

——幕——

■紹介誌

「創造」（映像・劇・評論）115号

〈大阪シナリオ学校編集〉

内容

特集 リアリズムと大橋喜一

劇評 未来「コンペア野郎に夜はない」大阪「風成の海碧く」

討論 いつまで「動員」演劇を続けるのか（仲武司、和田澄子提言に寄せる） 十津川 計

日本映画にあらわれた大平洋戦争とその傷痕の系譜（五人の斥候兵） 岡本 純

◇ ◇

70年代の西日本の演劇と文化状況をきりひらく、プロ、アマ、愛好者一体で創る。月刊誌。

西リ演運営委員会推せん。

購読料 一年 二五〇〇円

半年 一三〇〇円

店頭売価三〇〇円（〒70円）

発行所 大阪市北区万才町52万栄ビル

電話 〇六 三一二 四一九七

〈一九七三年度小野宮吉戯曲平和賞受賞〉

河

四幕

土屋 清

■詩

峠 三吉作

「絵 具」

「怒りのうた」

「八月六日」

「一九五〇年の八月六日」

「その日はいっか」（部分）

林 幸子作

「ひろしまの空」

■登場人物

（年令は開幕時）

峠 三吉		三一才
春子		三二才
市河睦子		一九才
見田 要		二〇才
大木英作		三〇才
鈴木凱太		五一才
せき		四六才
増田正一		二九才
吉本久子		二一才
岩井美代子		一九才
オルグ		
青年		
その他青年たち		

改稿の過程

第一稿—初稿のテキスト・レジーを経て、一九六三年八月、大月洋演出・広島演劇サークル協議会合同公演上演台本として発表。「テアトロ」一九六三年九月号所載

第二稿—一九六四年五月、劇団月曜会上演のために改稿（土屋清演出）

第三稿—一九六五年五月、郡山勝利演出・京浜協同劇団上演のために改稿後、同年八月、同稿にて再び広島演サ協合同公演（土屋清演出）

第四稿—一九七二年四月に上演された、熊井宏之潤色・演出・東京演劇アンサンブル「炎のように風のように」の仕事を経て、一九七三年十二月、劇団月曜会上演のために改稿（土屋清演出）

第一幕

〈絵の具〉

一九四八年。十二月はじめの夜。まだビルの残骸が残る広島市。ある川のほとり。崩れかけた煙瓦塀のかげに峠三吉の仮住居がある。

春子をモデルにして画家の大木がキャンバスに向っているところ。

峠がお茶を入れて大木のそばにそっとおく。

川船ののぼってくる音。

大木　砂船か？

峠　うん。あの音だけは昔のままじゃね。

大木　なにもかもよ。原子爆弾といえども何も変えはせんかった。ピカッと光って焼野原になって、これで世の中まるきり変るか思ったが。幻想じゃ。日本人という奴はどこまでいっても日本人。御主人を変えただけのことよ。

峠　そうかな。

大木　しかし、美しい。いい着物だ。

春子　まあ。（笑う）

大木　なにがおかしい？

春子　あたしがほめられたんか思うたら着物が美しいんじゃと。まあ！

大木　着物が美しいということは、同時にそれを着とる人間も美しいということ。わかっちゃおらんな。

春子　でもよかった。着物だけでもほめていただいて。なんどお米ととりかえてしまおうと思ったことやら。その度にこの人にとめられて。それだけは絶対手離すないうて

大木　そこよ。どういう時代になろうと美の追求を忘れん心。それがこの家にはある。わしがほれとるのはそこじゃ。

春子　もうしゃべってもいいの？

大木　ん？あ、そうか。まあええ。休憩じゃ奥さんも疲れたでしょ。

春子　（急いでキャンバスの絵をのぞきこむ）まあ！これがあたし？（峠を手招きして）あまり似てないようねえ。

大木　おいおい、大道の似顔絵かきじゃないぞ。わしは奥さんの内面を――。わかっちゃおらん。

春子　はいはい。どうせなにもわかってない女です。

春子台所へ。

峠　（絵をみつめていたが）似てるねえ。やっぱりおふくろに似てる。

大木　ほう。おふくろさんに？

峠　着物姿の美しい人じゃった。古風、というより古典的な感じいうんかね。それでいてけっこう平塚雷鳥なんかを尊敬する新しさをもっていた人でね。熱心な仏教信者のくせにお坊さんから「女は罪が深い」いうお説教聞かされて、えらいこと怒ってね。その日から仏さん拝むのをやめてしもうた

大木　なるほど。ははあ！春子さんにほれた理由もひとつはそこか。（春子がふかし芋や漬物をのせた盆を運んでくる）お！こりゃ御馳走。いまね、奥さんのこと、いまどき珍しい古典的な感じをもった女性じゃと話しよったところですよ。

春子　わかってますよ。お母さんのことでしょ。お母さんの話になるとすぐに夢中になってしまうですよ。この人。あたしといっしょになるときだって、たったひとつの贈り物がなんじゃった思う？大木さん。お母さんの形身の腦髄の雪なんよ。この人いう

たら、とっても真面目な顔して「ぼくは母を誇りにしてます。もし妻とよべる人ができたら、その人の黒髪に飾ってもらおうと思ってこれを大切に残しておきました」

峠　春子。

春子　いいじゃないの。嬉しかったのよ。あたし。

峠　また、甘えん坊じゃといいたいんじゃろ。

大木　へ！いつまでも新婚気分だして。聞いちゃおれん。（かたわらの焼酎びんをとりあげてコップにつぐ）

峠　春子によくいわれるんだよ。あんたはええとこのお坊ちゃん育ちだから駄目だ。見栄坊だ。お体裁屋だ。甘えん坊だ。そんなふうに見えるかい。

大木　そりゃまあな。

峠　ぼくが小学校に入る頃は、おやじの経営していた工場ももう左前でね。貧乏暮らしの連続だったんだよ。自分が生まれ育ってきた環境というやつはそれほどついてまわるもんかねえ。ほら、ロシヤの小説なんかにようあるじゃろ。没落階級の人間で、なんとか新しい生まれ変ろうとするんじゃが、なかなか出口がみつからん。もがけばもがくほど傷が深うなっていく。――ぼくの詩もそうなんだ。古い形骸に骨がらみしばりつけられて。なんとかそっから脱けだしたいと思うんだが。

大木　どうしてそうつまらんこと気にする？峠一家の文学的土壌と、長い間の孤独な斗病生活が生みだしてきたせん細な情緒、それがいまのあんたの叙情詩を形づくっとるんじゃないか。なんでそれにもっと自信をもたん？春子さんだって、そこを一番認めとるんじゃ。なあ、奥さん。いや、峠三吉の中身を認めたのは、ひょっとしたら奥さんよりも俺の方が先じゃったかもしれんがな。なにしろ俺が広島に出てきたのも、敗戦後の焼野っ原に、去勢されたような人間ばっかりうじゃうじゃしとる中で、まるでちがうムードをもった峠という男に出会うたがためじゃもんな。ありゃ許戦の年の冬じゃったか。三次の穴ぐらからようようはいだして、広島ぐらいは文化のかけらでも残っちゃおるまいかと思うて、流川通りをウロウロしよったら、偶然あの詩画展の看板にぶつかった。

峠　あ、アムールの二階でやっていたね。あのときのあんた、リュックかついで、わらじはいて。

大木　そうよ。一週間分の芋と、たったひとつ焼けだされずに残ったロートレックの画集を、大切もっこにかついでな。二階にあがると、気味のわるいどろーんとした眼をした男が受付に坐っとる。それがあんたじゃった。それから大盛うどんを食券食堂でおごってもろうて。

春子　よう小さなこと覚えて。

大木　そりゃそうよ。わしと峠三吉との運命的な出会いの場面じゃ。あのどろんとした眼つきの奥にゃ。なん度も死線をこえてきた者しかもっとらん光があった。炎のような峠三吉の明日が燃えとった。わしはひと眼でそこに共鳴したんじゃ。あの地獄のような焼野原の中で、いち早く、被かいされつくした心の栄養をまずとり戻そうとした。どん欲なまでの情熱になあ。

峠　飢えていたんだねえ。文化というものにほんとに飢えていた。手当り次第にいろんなことやったねえ。

大木　うん。詩画展、人形劇、ピアノとヴァイオリンをバックにした朗読詩の発表会。宗教研究会。レコードコンサート、文芸誌の発行。

峠　世の中がすうっと広うなったいうか。急に肩の重みがとれた、そんな感じだったよね。あの頃は。そりゃぼくだって、ピカにやられて戦争がおしまいになったときは、正直いってこの先日本がどうなるかと思ったもんじゃが。それがひと月もたたんうちに、こりゃ、やっぱり敗けてよかったんじゃないかと考えるようになったからね。

大木　新鮮だった。水々しかった。どういう新時代が到来するか、胸がわくわくする思いじゃった。それがどうじゃ。この三年間、新文化のうわっ面だけはひろがったが、中味の方はあいかわらず空っぽじゃ。結局なんにも変っちゃおらん。口先だけで労働者文化とか、職場芸術とか、革命的創造とか、自分でわかってもおらんへ理屈をふりまわす奴の数がふえただけよ。

峠　ゆきづまりは感じてるんだ。ぼくも、文化連盟も一人へり二人へりしてバラバラになっていくし。今日は詩の座談会、あさっては「地熱」の編集委員会、その次は朗読研究会と、くる日もくる日も追い立てられるような生活を繰返しているけど、疲れてきた。せまい町中で、こんなこまかなことをあれこれいじりまわしていて、それがどんな文化運動になるんだろうか。

大木　それそれ。その文化運動という奴よ。近頃の奴らはなんでも頭数を集めにゃ芸術の仕事まで始まらんと思うてやがる。弱い犬ほど群れたがるとはよう言うたもんじゃ。やせ犬どもが寄り集まって、やれ賃上げだ、やれ吉田内閣打倒だ、やれストライキだとほえたてる。それはええとしても、そのついでに職場の芸術ときた。芸術は労働組合の進軍ラッパじゃないぞ。

春子　まあ！じゃあたしもそのやせ犬かしら。あたしだって私鉄総連電鉄支部の組合員ですよ。

大木　立派！そりゃ必要なことだ。けど奥さん、そいじゃ何故あんたはバリバリの組合オルグと結婚せずに、峠三吉のとこへ来ましたか？

春子　そりゃ……（笑う）

大木　それみんさい。やせ犬どもと峠三吉は根本的にちがうんだ。なんじゃ一体！ベレーかぶってロシヤ民謡うとうて、ダンス踊って、「春子」「ひろし」――それが民主的で文化的かい！馬鹿馬鹿しい。（焼酎をあおり）おい、ないぞ。

峠　買うてくるか。酒屋はまだあいとるじゃろ春子さん。

春子　あら。春子、と呼んだっていいのに。ねえ、大木さん。（笑いながら酒びんをもって立ち上る。）

大木　やめとこう。ここらでメートルあげてもしようがない。それより仕事だ。

風呂敷を首につり、両腕をまくりあげてキャンバスに向う仕度。それをみて、峠素早く春子に目くばせし、キャンバスの前に座らせる。

大木　なあ峠。もう一度あの水々しさをとり戻そうや。お互いあの焼野原のなかの天涯孤独に立ち戻るんだ。芸術というものは、もともと孤独の厳しさの中からしか生まれんもんだ。どだい、訳もわからん連中を相手に啓蒙運動など始めたのが間違いのもとじゃった。（絵筆をもつ）ああいう連中にはな、こうしてキャンバスに向っておのれの心と対峙する大木英作も、緊張と不安のなかで自らの詩を探ろうとする峠三吉も理解できはせん。ましてや食堂の水にジャブジャブひたりながら峠の詩を支え、キャンバスの前に座るときは目のさめるような美女となってあらわれる、そういう奥さんの美しさなんぞてんでわかりゃせん。これも連中にかかると、奥さんのブチブル性ということになってしまう。

外の方で「今晩は、今晩は」という声。

峠　はーい。いいよ。ぼくが出る。

峠、戸口へでる。外に市河と見田が立っている。

市河　あ！あの、峠さん。ですか？

峠　ええ、峠ですが。

市河　よかった！やっぱりここじゃった。あのあたし、市河と。こないだ手紙を。

峠　あ、市河さん。「生活の詩」の？うん知ってる、知ってる。よくここがわかりましたね。

市河　ずいぶん探しました。

峠　そりゃ寒かったでしょう。さ、こっち（入って。（市河をいざない入れる。市河戸口の外へ見田を呼ぶ）

市河　見田さん。

峠　あ、お連れですか。ごめんなさい、気がつかずに。さ、どうぞ。

春子　いらっしゃい。ちょっとこのまま失礼ね。今動くとこの絵かきさんに叱られるから。

峠　（春子に）市河さんて、ほら、二、三日前手紙をもらった、「生活の詩」に投稿している人だよ。うたはいつも拝見してますがね。どんな人だろうと想像してました。こんなきれいなお嬢さんとは知らなかった。（見田をみて）お友達ですか？

市河　はい。

見田　今晩は。僕、青共の見田です。

峠　は？セーキョー。

見田　ええ、日本青年共産同盟。マルクス・レーニン主義の旗の下に団結する全青年の革命的組織です。

峠　はあはあ。

大木　（じろりと見田を一瞥して）なるほど。七つ釦にベレーときたか。

見田　は？

大木　なんでもない。こっちの話だ。（峠にウインクしてみせる）市河さんで、「秋」をかいた市河睦子さんですか？

市河　はい。

大木　あれはいい。ぼくは好きだね、ああいう詩。

峠　そうだね。だけど僕はその前の詩も。（見田に）すみません。そこのスクラップブックを。

見田　これですか？

峠　どうも。（めくって）うん、この「らっきょう」。この方がもっと好きですね。とっても新鮮な感動をうけました。あなたの感じたものがそのまま詩になっている、真実感があふれているんです。それに比べると「秋」のほうは、少しきれいにつくりあげすぎている、うまくなりすぎている。わかりますか？

市河　（首をかしげる）

峠　勿論、実感だけじゃ弱いし、技巧は必要なもんです。ところが、この技巧という奴がくせもんで。こりゃ自分の詩で感じることなんですがね。うまくなろうと努力して、自分で磨きもし、貯めてもきたつもりの言葉が、こんどは逆に邪魔になってきて。一体、上手になるということはどういうことなんじゃろうねえ？あ、こりゃ訳のわからん話をはじめてしもうて。こういう僕が、新聞の投稿詩を選んだり、批評するい

うのも、妙な話じゃね。（笑う）

市河　（つりこまれて笑う）

見田　（さっきから、イライラの書類をだしたりひっこめたり、ひろげたり、たたんだりしていたが、緊張しきった面持で）あのう、実はですねえ。

峠　はあ？

見田　僕、青共の地区委員会として、その青年文化連盟の委員長としての、峠さんにですね、正式に申し入れたいことがあってきたんですが。

峠　はあ。

見田　これなんですが。（書類をおしやり、一気に）申し入れ書です。実はですねえ、それに書いてあるようにですねえ、現在広島にはいくつかの青年組織があるんですが、それが横の連絡もなしにみんなバラバラに動いとるんです。ところが情勢はですねえ、東宝争議の弾圧以来ですねえ、国鉄や全逓の青年行動隊の職場放棄が、全国の労働者を蹶起させたようにですねえ、行動力のある青年の全国的な戦線統一が急務になってきとるんです。そこでですねえ、広島でもですねえ、バラバラに動いとる青年戦線統一のためにですねえ、民主主義青年連盟広島準備会いうものをつくって、全青年組織へ参加を呼びかけることになったんです。中心スローガンはですねえ、「平和・民主・独立。全青年は二度と銃をとらない」です。

峠　なるほど。

見田　それでですねえ、ひとつその、峠さんにですね、結成準備会の発起人グループに入ってもらいたいんです。

峠　僕にですか。

見田　青年文化連盟は広島でも最大の青年組織ですからね。それに、峠さんは文化人としてもですね、入場税反対の声明をだされたりして、非常に積極的な立場に立っておられますし、是非お願いしようということになったんです。（別の書類をおしやって）これが承諾書です。ここへ署名して頂けますか？どうでしょう。

峠　はあ。ぼくでよろしかったら。

見田　あ！いいですか？そりゃ！（大喜び）それからですねえ、もひとつお願いがあるんですが。（一枚のポスターの原画をとりだして）これ、参加を呼びかけるポスターなんですが、勤労者美青協会の石田さんにかいてもろうたんです。ほいで、これに、さっきの中心スローガンを要約したですね、簡単な詩を峠さんて入れてもろうたら、どうじゃろうと、いわれてきたんですが。

峠、ポスターをひろげてみる。黙々と横たわる戦死者の様が、極めて克明に描かれている。

峠は壁にはりつけてみつめている。

見田　どうでしょう？

峠　これにねえ。中心スローガンを要約するといったってねえ。大体どんな言葉を考えているんですか？あなたとしては。

見田　は。それは。（助けを求めるように市河をみる）ぼくとしてですか？ぼくとしては、そりゃ、やっぱり「死んだ人々は還ってこない以上、生き残った人はなにをすればいい」という、ああいう言葉を、もうちょっと、この。

峠　なるほどねえ。わたしにできるかどうか。考えてみます。

大木　（横あいからポスターをにらんで）おい峠、あんた、この絵をどう見る。

峠　うん。これはちょっとねえ。死体をこう克明に描くことが戦争の否定になるとは

ねえ。

大木　戦争画だよ。こりゃまるで。それ以外のなにものでもない。

見田　この絵、そんとにようないですか。

大木　よくない、というより、僕は、こういうものは絵として認めない。

見田　そうですかね。石田さんは、そりゃ本職じゃないかもしれんですが。しかし沢山の仲間たちを、こういう悲惨なめにあわせた軍国主義に対して、憎しみを燃えたぎらせて書いて下さったにちがいないんです。そっから二度とこういう戦争は。

大木　芸術家というものはね、そういう憎しみやら、叫びやらにわれを忘れたとこから物事をみることはしない。もっと冷静に、客観的に、魂の本質をえぐりだすとこからはじめる。幾百万の兵士が倒れていった、その情況を描くことじゃない。たったひとりの兵士の胸のなかにポッカリあいた心の空洞をね、拡大して描くことなんだ。

見田　ようわからんですね、ぼくにゃ。

峠　ねえ、見田君。これをかいて下さった人には悪いけど、どうだろう。この人にも、もう一枚かいてみてもらったら、大木君の絵なら、ぼくも充分はなしあって、ちゃんとマッチした詩をきざめるかもしれんし。かいてくれんか、君。

大木　おい！あんた本気でいよるんかね、そういうこと。

峠　たしかに、このポスターでは、ほんとに平和の呼びかけの力になるかどうか疑問だ。かといってね、近頃じゃ原子爆弾を花にたとえてみたり、被爆者が倒れていくさまを、人影の乱舞で美しく象徴してみたりね、ああいうのがしきりともちあげられるだろ。あれじゃたまらんよ。もっといかんよ。見田君のいったアピールを、まっすぐにうけとめてみるのが、むしろ本当かもしれないよ。とにかく、かく必要はあるんだから。戦争や原爆は、いつまでたっても。

大木　お断りだね、俺は。わしは、そういう政治的アピールに安直に結びつくような絵はかかんといよるんじゃ、

見田　安直に？どうしてですか。平和・民主・独立というスローガンは、全青年の要求ですよ。

大木　安直でいかんなら、自分の心の中に、こんこんとわきあがってくるもの以外はかきたくない、という意味ですよ。誰に要請されるでもなく、誰に強制されるでもない、己れの自由な意志でしか、かきません、僕は。

見田　ごまかすんじゃないですよ。そういう言いかたは、いかにも中立的にみえても結果的には反動を助けとるんじゃ。

大木　すぐそうきめつける。それが君たち共産党青年部の。

見田　共産党の青年部じゃない。青年共産同盟です。

大木　同じことじゃない。どっちでも。要するに、あなたのようにマルクス・レーニン主義を既に卒業して、世界観も思想も確立した、完成された人間じゃないのよ、僕たちは。愚かな大衆をこれ以上相手にしなさんな。奥さん、奥さん！どこへ行ってしもうたんじゃ、実際！

いつのまにか姿を消していた春子、大木の大声にびっくりして、キャンバスの前に戻る。大木はキャンバスをにらみつけるようにして仕事をはじめる。

見田　わかりました。ここへお願いにくるべきじゃなかったんです。（壁にはってあったポスターをはずしてくるくるまきはじめ

る）僕たちのためにはかいてくれんでも、反動のためなら喜んでかくんでしょう、あんたがたは。

大木　（憤然として）君！あんたいくつかね。

見田　はたちです。どうかしましたか。

大木　戦争中、三次で代用教員をしている頃ね。木銃ひとつようにぎらんフニャフニャ絵かきだと、散々馬鹿にされたもんだ。いっとくがね、わしが軍事教練にでなかったのは、足が悪かっただけじゃない。この戦争と、わしの絵かきとしての仕事は、なんの関係もないと思っていたからじゃ。軍人勅諭も読めん先生じゃいうんでな、配属将校がわしを張り倒した。すると、それを見とった、ちょうど君と同じ年恰好の生徒たちがな、てんでにわしに石を投げよった。豚！ちんば！非国民！ちゅうてな。その連中がどうじゃ、戦争が終ってみるといっせいに左旋回で、こんどはわしを反動扱いじゃ。わしゃそういう、右に左にウロウロする奴は絶対信用せんことにしとるんじゃ。自由な立場でものをかく、それを貫き通すということが、どれだけ苦しみを伴うもんか、君たちにゃとても理解できまい。

見田　わからんですね。心のうちからこみあげてくるのを待っとるあいだに、日本はどうなったんですか？戦争が罪悪だということを知っとられたんなら、なんで自分の絵にばっかりしがみついとらずに、なんにもわからん僕たちにそのことを教えてくれんかったんです。なんで戦争中から戦争反対の絵や詩をかかんかったんです。（とりだした申込書や承諾書をバタバタしまいはじめる）あんたがたインテリはいつだってこうなんじゃ。行動にうつすことは忘れて、手をこまぬいて評論ばっかりしとる。おかげで僕たちまで戦争にかりだされたじゃないですか。

峰　君。僕はなにも発起人になることに反対している訳じゃ。

見田　いいんです、もう。

春子　（峰と大木に）仕様のない人たちね、あなたたちも、なにもこの人のおっての前でポスターの批評なんかはじめんでも、あたしだってわかりませんよ、何故あれじゃいけないのか。

キャンバスをにらみつけていた大木、突然完成間際の絵を切りさいてしまう

春子　大木さん。なにするんね。

峰　大木君！

見田　とにかくね。僕らが特攻隊にいっとるあいだも、あんたがたはルーズベルトも話せばわかるとかなんとかいうて、自由主義者面しとったんでしょ。天皇陛下万才いうて、訳もわからずに死んでいった一兵卒の方が、あんたがたより、よっぽどましだ。僕はね、いつだって一兵卒でいいんだ。お邪魔しました。

市河　見田さん。

峰　君、待ちたまえ。

見田　（市河に）あんた、なんぼでも詩の講釈聞いてかえれゃ、ブチブルが！（とびだす）

市河　待ってえ（あわてて後を追う）

峰　大木君。困るじゃないか。

大木　なにいうとる。あんたがよう断わらずにおるから助け舟だしてやったんじゃないか。それを何じゃい。俺にポスターかけなんぞと、尻こっちにもってきて。

峰　だからといって折角できかかっていた絵を。

大木　それとこれとどういう関係がある。ああいう若僧のいうことをいちいちまにうけて、人の好いにも程がある。

峰　彼だって、いうことは直線的すぎるかもしれんが、今の社会をまじめに考えようとしているひたむきな青年じゃないか。

大木　おまえのカトリック的人道主義も相手を選ばんと、味噌もくそもいっしょくたにして自分を見失ってしまうぞ。現にそうじゃないか。あっちにもこっちにも首つっこんで雑誌くばったり辻詩はって歩いたり、一晩に二つも三つも会合開いてみたり、労働組合のオルグといっしょになってかけずりまわってみたり、そういうことをやっとるあいだに、自分の身体も感覚もすりへらしてしまいよるじゃないか。

峰　君は何故もっと民衆を信頼せんのじゃ。これからの新しい美の創造は民衆の中からだよ。それがわからんのか。

大木　ああ読んだ、読んだ。「美の解放」という論文だ。削岩機のような生活、鋼鉄のような腕が新しい詩をつくりだす。気負った言葉だ。削岩機だの、鋼鉄だのそんなものはあんたの病弱著意識からくるコンプレックスに過ぎん。民衆を信頼するだと？そいじゃ聞くが、ヘドをはきちらして、くさい息を吹きかけてくる土方とあんた雑魚寝ができるか？できやすまい。腹ん中じゃ顔そむけとるくせに、口じゃ信頼するという偽善者だよ、おまえは。

峰　偽善者だと？あんたこそ孤高の中にとじこもったようなポーズして、独善者だよ。

大木　独善者けっこう。おれは孤独を恐れんよ。おまえは孤独から逃げたんだ。戦時中は神、こんどは民衆ときた。いつも何かを信じこんどかんと生きていけん人間じゃ。

峰　なんと理屈をつけようと、この絵をこんなにすることないじゃないか。春子はそりゃ楽しみにして、昨日から二日も休暇をとって君の前に坐っていたんだぞ。

大木　あんたも芸術家のはしくれならわかるだろ。誰がこの絵をぶちこわしたんじゃ、一体。

峰　そんなこというとったら、絵をかく場所など、どこにもないよ。ぼくたちのまわりは、いつも生活でいっぱいじゃないか。生活ぬきに芸術もないじゃないか。

大木　生活生活いうて、じゃおれが自分の絵と向いあうことは生活じゃないとでもいうんか。

峰　そんなことじゃないよ。この絵の具だってね。今月の最後の四百円を、タンスの底からひっぱりだして買ってきたものなんだぞ。

春子　あなた、なにもそんなことまで。

峰　それも君にとっちゃ何でもないことなんじゃろ。自分の作品以外のことは、生活も社会も、戦争も平和もなんの関係もないといいたいんじゃろ。思いあがるのもええかげんにせえや。

大木　そんなセンチメンタリズムが仕事に通用するかい。

二人、しばらくにらみあったまま。

大木　（からのコップに手をだしかけて）みい。焼酎もないじゃないか。

峰　だから、さっき買うてくるいうたじゃろ。

隣の家のせきが顔をのぞかせる。

せき　奥さん、奥さん。ありゃ、お客さんでしたかいな。奥さん、毎度すみませんがこ

れに醤油二合ほどかしてもらえませんか。

春子　はいはい。いいですよ。（ビンに醤油をつぎながら）おばさん、寒いから中へ入ってらっしゃいよ。

せき　ええんですよ。あたしゃここで。

春子　じゃ、これ。

せき　すみませんのう、いっつも。

春子　おたがいさまよ。前はうちこそあんなにお米融通してもらって、今月は、お米十五日分になるんじゃそうですね。

せき　そうじゃげなですの。ほいじゃが、なんぼ二合五勺増配になったいうても、五一円にもなったんじゃねえ。ほんまに、通帳満配、腹欠配ですわい。

春子　ほんとね。うちでさえ四苦八苦だから、おたくのような大世帯はねえ。でも、おじさんがちゃんと大きなとこに勤めとってじゃから、いいじゃないですか。

せき　なんのなんの。それがあんた、製鋼所も来年あたり人員整理があるらしいいうんで大騒ぎしよりますんじゃ。そうなってみんさい。うちのとうちゃんら年ひろうとるけえまっ先じゃいうて。

春子　そうですか。日本製鋼のようなとこでもねえ。

せき　ほんまにこの先どうなることですかいのう。ピカは落ちるし食糧攻めにゃ会うし、こんだあ首切りじゃと、日本もぼちがあたったんですのう。（小声で）だんなさんはこの頃はもうええんですか。

春子　ええ。やはり入院しないと駄目らしいんよ。

せき　奥さんもおおごとですのう。やれ、お邪まして。ほいじゃ二、三日中に、ありがとうございました。

春子　いいんですよ。いつでも。

せき、消える。大木はリュックに身のまわり品をつめこみ帰り仕度をしている。

峠、急にうつむき、ハンケチに痰をそっと吐く。

峠　春子、塩水。

春子　あなた。（かけよってのぞきこみ）また血痰が？

春子、塩水を汲んでくる。峠うがいをし、壁にもたれて眼をつぶる。

春子　あまり興奮するから。

大木　大丈夫か。

峠　大丈夫。こういうことはしょっちゅうだから。心配ないよ。

大木　奥さん。悪いことしました。

春子　あなたのせいじゃないですよ。あなたがたやりあいはじめたらどうせとめても無駄なんですから。

大木　検査の結果はどうだったんです？

春子　肺だけじゃないらしいの。空洞は、どうもえそでできたものらしいって、先生はいうてんじゃけどね。はっきりしたことは、入院して検査しないとわからないらしいの。

峠　（そろりそろりと二人の傍へよってくる）こう慣れっこになるとね。傍目でみるほどじゃないもんよ、本人は。僕は死ぬときだって、横目でどんな死に具合か自分をみてるだろうよ。（笑ってみせる）

大木　馬鹿なこというんじゃないよ。だけどね。奥さん。さっきはあんな口論になってしもうたけど、おれは、ほんまに心配なんじゃ。このままじゃ峠の才能は、有象無象にふみつぶされてしまう。おまけにこんな身体で……。やめとこう。こいつほどおと

なしそうな顔しとって、その実強情な男は知らんからな。（荷物をもって立ち上る）

峠　帰るんか？

大木　うん。もうこれ以上おってもな。それに、いっときも早う東京へでる準備せんと。せまい広島にゃ住みあきた。

峠　帰る金、あるんか？

大木　（だまって笑う）しかし、わしらの考え方、えらいくいちごうてしもうたもんじゃのう。

峠　ほんまのう。

大木　一週間居候して、それだけがわかったとは情けないが、ま、しかたない。峠、こんど東京へでたらな、自分の力で個展を開いてみせる絶対に。大衆づらをした既成画壇になぐりこみじゃ。

峠　うらやましいね。

大木、外へ。峠と春子送ってでる。

大木　奥さんの絵は東京でかき直して送りますよ。奥さんの美しさは、ちゃんと、ここにしまいこんである。

春子　待ってますよ。

大木　東京で安心して療養しながらのびのびと詩が書ける場所みつけたらすぐに呼ぶからな。じゃ。

大木去る。遠くで市電の音。

峠　いってしもうた。

春子　あなたのいいとこも悪いとこもみんな知っとっての人じゃったのにね。

峠　うん。別々の道を歩きだしてしもうたんじゃねえ。

春子　さ、早う入らんと、風邪をひきますよ。

峠　ちょっと外の空気が吸いたいんだ。春子、夕方文具屋で電話してみたよ。実のとこに。

春子　実に？

峠　うまい具合にねえやさんが出てね、また寝こんでるらしいんだ。

春子　どうしたんじゃろうねえ、あの子。昨日あったときはとても元気じゃったのに。

峠　明日にでもそっと見にいっておやりよ。

春子　ええ。

春子、もう涙ぐみながら家の中へ。

峠、川岸へよって大きく深呼吸。霧笛の音。市河があらわれる。

市河　峠さん。

峠　あ、君。

市河　さっきはすみません。

峠　僕の方こそ。見田さん、どうしました？

市河　先に帰りました。ひとりで。

峠　悪かったなあ。さっきのことでけんかになったんでしょ。

市河　……なんでも、かんでも、ブチブルじゃいうて。

峠　煮えきらない僕がいけなかったんです。はっときさせられましたよ。一兵卒でいいんだといった彼の言葉。いい青年だね。

市河　……。

峠　君、家はどこ？

市河　細工町のおじさんのとこにいます。

峠　家の人は？

市河　（首をふる）

峠　厚爆で？

市河　はい。

峠　みんな？

市河　母と、弟と、ひと月ほどしてお父さん

が。

峠　そう。

市河　あたし、平気です。こんどは、もっといい詩をつくります。

峠　うん。そうだね。ぼくもつくるよ。いっしょにやろう。

市河　あたし、峠さんの詩、好きです。「絵の具」、あれがいちばん好きなんです。あれ読むと、とっても元気がでます。

峠　絵の具、ね。絵の具。あれは、いまの僕にとっては、とても恥かしい気がするんだ。

市河　は？でも、あたしには、大切な詩なんです。

峠　ぼくにとっては、恥かしい詩でも、君には大切な詩か……。

市河　はい。（手さげ袋からノートをとりだして読み始める）

澄明な空に黒々と雲が漂い
山影に環まれながら
バラックの町は昏れる

少女は町角、町角に佇んで私を待ち
私は少女の母の
二枚の着物をもって古着屋を廻る
「絵のために売るんだから
母さん怒らないわね」と
少女は風の襟をたてながらくりかえし
千円　千円とつぶやきながら
私は少女の亡き母を
手のなかにたしかめて
灯ともるバラックの町の空に
朱傘、たいしゃ、さんご紅と
日本画の絵の具の
彩をみつめる。

――幕――

第二幕

＜怒りのうた＞

一九四九年六月。ひるまえ。川ぞいの道は見違えるほどきれいになり、煉瓦塀もとりのぞかれている。峠の家では、午後から開かれる日鋼事件鎮圧反対人民大会への声明書を起草する増田。＜怒りのうた＞＜共斗の誓い＞などの〃辻詩〃をつくっている峠と吉本。

川べりでは、幾人かの若者たちが歌の稽古をしている。

見田が青共のオルグを伴ってかけこんでくる。

見田　おう、やりよる、やりよる。ごくろうさん。ちょっとこれからの行動説明してもらうけえの。静かにしてくれえや。

オルグ　ごくろうさんです。今日は、午後一時から、平和広場で、鎮圧反対人民大会が開かれます。これには、産業防衛会議加盟の各単産から、約五千人が動員される。一般市民を入れると、七千人規模の大集会になるでしょう。

若者一　すごいの。

若者二　メーデー以上じゃ。

オルグ　それから、市役所までデモ行進して、市長、公安委員長、警察局長に面会し、鎮圧の責任を徹底的に追求する。とにかく、船越の方じゃ、ポリ公みたら子供までが石をぶっつけるいう情勢じゃ。大衆の憤激は今は頂点に達しとる。人民裁判に発展することは間違いない。みんなも、ひとつその先頭にたって斗って下さい。

岩井　ひゃあー、面白い！

見田　おい、修学旅行じゃないぞ。

オルグ　警官隊は、恐らくこの前よりも、もっと動員してくるでしょう。東京の、公安条例反対斗争で、橋本金二が虐殺されたように、敵は、どのような挑発をかけてくるかわからん。文化サークルのグループは、見田君に掌握してもらう。絶対に勝手な行動はとらんように、ええの、見田。

見田　おう。ほいじゃ、ここはこれで解散じゃ。十二時半。万代橋のたもとで会おう。

一同、興奮を包みきれない様子で、峠や増田に声をかけながら退場。

見田は、ちょっとためらいながら、峠の家の方へ行こうとする。

オルグ　見田。はようこんか。次のオルグじゃ。

見田　うん。わし、こっちへ、重大な任務が残っとるんじゃ。

オルグ　早うこいよ。先へいっとくけ。（去る）

吉本　イッちゃん、ちょっとこれ手伝ってよ。

市河　はーい。

岩井　見田さん、なんね？重大な任務いうて。

見田　なんでもよかろうが。

岩井　！（肩をすくめる）

家の中で、市河が、峠のかきあげた「怒りのうた」を壁にはりつけている。

吉本　あんたたち。できたよ、峠さんの辻詩が。

見田と岩井、入る。みんな辻詩に眺め入る。

増田　おう。できたの。「怒りのうた」か。（読む）

きのうまで
ミシンや車輌を生んでいた機械はとまり
労働者らは追われ
きょう　閉された屋上に
にくむべき警察のはたはひるがへる
折られた旗ざおはつなげ、おお！
縛られたりょう胸はふりほどけよ。
たといわれらの血は埃に吸われるとも
われらの息は　けい棒の先に断えるとも
撃されたピストルを　とつとつと老労働者は訴え
くびおりて背の児はねむれど女房らは去りもやらず
刈々とかずを増して工場をかこむ、組合旗のゆらぎのなかに
うたとなるわれらの怒り
唄となるわれらのなみだ
かなた夕ぐれる木陰の土に　日鋼の労働者らたおれて睡り

そのあたり　しずかに刪し
——。

自転車で帰ってきた鈴木凱太が峠の家のまえでとまり、いつのまにかみんなといっしょに増田の朗読に聞き入っている。

凱太　ふーん。これじゃのう。ゆんべ峠さんが読んでくれちゃったのは。ええ。なんかいきいてもええ。こりゃ。

増田　おじさん。きとったんですか。

凱太　ゆんべはありがとがんした。あんたんとこはまた豪勢にトラック横づけで米俵のカンパじゃけんの。たまげたでよ。

増田　なあに。広船いうとこは世帯が大きいんですけ。

凱太　ありゃ?あんたは……附属病院の看護婦さんじゃなかったかいの。

吉本　ええ。毎日御苦労さんです。

凱太　やっぱりほうじゃ。峠さん、あんた、こん人たちゃのう、あの弾圧のあった日にゃ非番の人までかけつけてきてくれてのう。徹夜でからに病院に詰めとってくれんさったんじゃ。

増田　ほう。そりゃ知らんかった。ようやってくれたのう、そこまで。あ、おじさん。ゆんべのことがでてますよ。(新聞を渡す)

凱太　なんじゃと?(読む)カストリに吹く秋の風、売れよ飲めよと自由酒でまわる…なーにをいうとるんじゃい。こっちはカストリものめんもうのに。

岩井　おじさん、どこ見よるんね。裏よね。裏。そこそこ。

凱太　ほうほう、ほんまじゃ。でとるでとる。

増田　しかし峠さん。よかったですね。

峠　うん。

増田　鈴木のおじさんがいうてのように、日鋼の労働者がみんなええいうてくれる。こりゃ、「怒りのうた」に対する、なによりの評価じゃないですか。

峠　うん。ほんとに、喜んでいいんじゃろうねえ。なにしろ、大急ぎでつくったもんじゃし。

増田　(笑って)なに言うとるんですか。そりゃ、正直いうて、この中にゃ、まだ古い定型から抜けきってない点もあるかもしれんですがね。しかし、峠さんの詩が、こんどのような、労働者の高揚した空気に触れるなかで新しう生まれたいうこと。こりゃ大きいですよ。この詩は、峠さんの新しい誕生を意味するもんじゃとぼくは思いますね。

凱太　(声にだして読みはじめる)十七日午後七時頃から、人民大会席上で催された青年共産同盟文化工作隊の労働歌合唱、日鋼紛争を主題とした詩の朗読があり、時あたかも警官隊の撤退がはじまり、屋上の警察旗がするするとおろされたときでもあり、つめかけた組合員はどっとどよめいた!。ふーん。ほんまじゃ。わしゃの、峠さん。一番うしろの方でみよったんじゃが、なんやら面白うもない歌うたいやがるんで寝よったんじゃ。

岩井　まあ。ありゃ、うちらがうとうたんじゃに。(笑い)

凱太　はァ、ほうかいの。ほいでの、ひょっとみたら、あんた、やせこけた峠さんが、ひょろひょろ演壇にあがってくるじゃなあかい。たまげたのう、あれにゃ。わしゃいままで、詩じゃことのいうもんは、蝶じゃ花じゃいうとりさえすりゃええもんか思うとったが、あがいなもんとは知らなんだのう。

吉本　ほんと!うちのサークルの人も、あれ聞いてとっても感動して。詩いうて、こういうもんか、いうてね。今まではね、新しくサークルに入ってきた人たちに、こんどの斗争で、じかに感じたことをそのまま書いてみて、いうてもなかなか書こうとせんの。こんなことは詩にならんと頭からきめとったようなとこがあるんよね。こんどはちがう思うよ。

岩井　ほいでも、うちのサークルじゃ、こうなんよ。ぼくもサークルに入りたいけ、読んでみてくれ、いうてね、同じ課の子が詩をもってきたんよ。どういうて書いてあった思う?

ぼくはそっと読んだ
すずきの林のそのかげで
あなたの美しいお便りを
誰もみてない　すずきの波のその中で
ぼくは　そっと呼んだ
なつかしいあなたの名前を

ほいでね。うちの顔をじーっとみるんよ。きゃーっ!気持わる。(笑い)

増田　たしかにのう。詩、いうたら、星やら、夢やら、恋やらをうたうものとだけ思いこんどる人は多いからのう。しかし、そういう、感傷みたいなもんやら、夢みたいなもんも、いちがいに否定はできんぞ。そこも包みこんで、なお生活から湧きあがってくるような詩を職場からつくるいうことは、こりゃ、まだまだこれからじゃ。

市河　そうよね。うちも、はじめはやっぱり甘い甘い詩が好きじゃった。「怒りのうた」みて、はじめて、なんかちょっとわかったような気がしたもん。

見田　あんた、おくれとるぞ、だいぶん。

市河　知らん、見田さん、うちの詩、いっかいも読んでくれたことないくせに。

見田　よお、横断幕まだじゃろ。時間がないぞ。

見田、市河、岩井、吉本、布や墨汁をもって外へ出る

見田　おじさん。十四日の晩はね。俺たち青年共産同盟も、みんなすわりこみにいったんですよ。

凱太　ほうかいの。みんなして寄ってたかって応援してくれてのう。有難いこっちゃ。ほいじゃがおっとろしかったろうがい、え?武装警官がやってきたときにゃ。

見田　怖いことないですよ。みんな張りきっとったけ。

凱太　ほうかいの。頼むで。まだまだこれから長うなるじゃろうけえの。なーに。わしがついとりゃ、なんぼ奴らがきても、あんたらに指一本さわらすんじゃないけえの。わしゃ東口を守っとったがの。突っこめ!いうたか思うたら、来たわいの、火けなポリが、わしにつかみかかってきての。わしゃ旗竿もっての(身振りよろしく)こうじゃろがいの。こうきたよの。ほいで、わしゃ旗竿相手の首にこうあてごうての。ウーいうたところを、ポンと足でけあげて。

せき　あんたがポリに、そうやられたんでしょうが。

凱太　なに?(振りむくと、せきが立っている)

せき　なにをいうとるんね。この人は。大ぼらばっかりふいて。あんた、後の後で足がガタガタふるえて、なにがなんやらわきゃわからんかったいうて、言うたじゃないね、わたしに。

凱太　いつのまに来とったんじゃい、おまえ。

せき　いつのまじゃありゃすま。なんしに帰

ったん、あんた。このまっ昼間に。またデモを抜けだしてきたんでしょうが、飲んどるね？あんた！

凱太　なにをいうとるんじゃい。こっちは朝からワッショイ、ワッショイ、いうて。え？おまえら、腹すかしとるじゃろう思うて。給料いらんのかい、給料！

せき　え？でたんかい？給料。

凱太　馬鹿いえ。今からでるんじゃい。松石寮から西正門までデモ行進して、給与課長ひっぱりだして、かけおうて、昼からでるようになったんじゃい。ほいでハンコとりに帰ったんじゃろうがい。

せき　そうかい。でたんかい、あんた。やっとねえ。みなさんのおかげじゃ。みんなで応援して下さったおかげじゃ。

峠　よかったですね。おばさん。

凱太　なにをめそめそしょるんじゃい。馬鹿が。

せき　そいでもあんた、四十日ぶりの給料じゃ。その間、あんた、応援カンパのお米で、やっと一家七人が……。

凱太　もうええ、もうええ。早うハンコとってこんかい。早う行かにゃ支払いが始まるが。

せき　やれやれ、これで飯の一匹でも買うてやれる。有難いこっちゃ。（泣き笑いしながら帰っていく）

凱太　へへ。すぐあれじゃけんの、オナゴは。

岩井　あれ。イッちゃん、泣いて、（自分も顔をふいている）

増田　こんどの日鋼家族会の頑張りぶりは、凄かったけんのう。警察に、弾圧反対の陳情に行ったり、板垣所長代理のとこへ押しかけていったり。たいしたもんで、あんたがたのおばさんも。

凱太　なーに、峠さんとこのに比べりゃ、うちのやなんぞ。奥さん、今日も勤めですかい？日曜日じゃいうのに。

峠　買いだしですよ。草津の方に。

凱太　ようやってじゃの、奥さんも。

せきがあらわれる。

せき　ほんまに、赤ん坊背負うたもんにまでこん棒ふるうてのう、憎たらしいいうたらありゃせん。なんでもかんでもアメリカの命令じゃいやええかと思うて。こんどのこたあ絶対忘れるんじゃないけ。ほいじゃが、こりゃ、どうでもアメさんと、会社と警察はグルになっとるんで？ほうでしょうがい、峠さん。

見田　おばさん。いちばんいけんのはね。吉田内閣の、産業破壊政策なんですよ。ポツダム宣言は、日本の財閥と天皇制をないようにして、軍国主義の息の根をとめることを要求したんですからね。それを、今の政府は反対のことばっかりやりよる。大金持の都合のええように、意識的に産業を破かいしようとしとるんですよ。そいじゃから全国でも日鋼のようなことが起きよる。

せき　ほいじゃがあんた、アメリカのラガーとかヘガーとかいう大尉が命令を下したけん、県知事は退去命令をだしたんじゃいうとる。アメリカが命令せにゃ警察もだしゃせんかったいうて、はっきりいうとるじゃないね。

凱太　なにを、ベチャクチャいつまでしゃべくっとるんじゃい。はよハンコだせ。

せき　あ、わしもいまから日鋼へいくけ。

凱太　なにしに？

せき　家族会と民婦協の懇談会よ。あんた終るまで待っとりゃええ。

凱太　ええ？

せき　帰りにまた飲もう思うてもそうはいきゃせんよ。はよ乗せていきんさい。

凱太　馬鹿いえ。おまえ乗せたらパンクしてしまうわい。

岩井　照れくさいんでしょ、おじさん。

凱太　なにを言よる。はよ、乗れ。（ブツブツ言いながら後に乗せてやる）ほいじゃ。

凱太とせき、でかける。峠も増田も、みんな見送っている。「ええぞ！」「頑張って！」等の声。

旅行カバンを持った大木があらわれてそれをみている。

峠　あれ？大木君、大木君じゃないか。

大木　あれ、とは御挨拶じゃな。半年ぶりの広島帰りでいの一番にここにかけつけたちうのに。

峠　久し振りじゃねえ。あれから手紙もくれんから、もう絶交されたんか思うとったよ。

大木　そりゃこっちのセリフよ。もう大木英作なんぞ見捨てられて、挨拶もしてもらえんのじゃないかと心配してましたね。あんた、元気そうじゃない。

峠　覚えとるかい？見田君と市河君。

大木　お！あのときの。これはこれは。

峠　紹介しょう。大木さんいうてね、青年文化連盟の時代からの親友なんだ。東京で絵をかいている。（大木に）増田さんだ。広島造船の人。それから、中国電力の、岩井さん。吉本さん……ぼくが療養所時代にお世話になった看護婦さんだよ。今は日本製鋼の附属病院。みんな、職場の文学サークルの人たちでね。ま、とにかくあがれよ。寝れたろ。春子も、もうじき帰ってくる。喜ぶよ、きっと。

増田　あとでまた。ちょとやりかけの仕事がありますから。

大木　ええ、どうぞどうぞ。

峠と大木、家の中へ。あとの者は横断幕などをつくっている。

大木　（壁に貼ってある「怒りのうた」などを読めながら）いやにものものしい雰囲気じゃねえ。一体なんの騒ぎだい。

峠　え？君、まだ知らんのか。ここへくる途中も沢山貼ってあったろ。日鋼弾圧反対のポスターが。

大木　そうじゃったかの。

峠　無頓着だねえ、あいかわらず、こういうことになると。ほら向洋に日本製鋼広島製作所というのがあるだろ。あそこで六百六十人の首切りがでてね。組合員はみんな工場の中にたてこもって毎日首切り撤回の交渉を続けていたんだ。それがね、十五日の朝になって、いきなり二千人の武装警官がっこんできたんだ。組合員を外にたたきだすためにね。単なる労働争議にだよ。君、二千人もの武装警官くりだして、おまけにそのやりかたときたら、無抵抗の人たちを無茶苦茶になぐりつける、逃げ廻るところをつかまえてはのど首をしめあげる。足ばらいをかけて地べたに叩きつける。足を折って片輪にされた人まで出たというんじゃから。まるで治安維持法の時代に逆もどりだよ。

大木　ふーん。そりゃ確かにひどい話だねえ。（タバコをとりだして）おい、マッチないかい。

峠　ぼくがかけつけていったときは、みんなもう門の外へ押しだされてしまったあとだった。担架で負傷者が運ばれてくる、樹陰では頭を割られた労働者を看護婦さんが

手当している。正門前では四千人近い群衆がごったがえして、構内を占拠した警官隊と殺気だったにらみあいを続けとる。日が暮れていくにつれて、急を聞いてかけつけてくる労働組合の人たちが続々と増えてきた。そして夕闇の中で数千人の人々のインターナショナルの大合唱だ。あっちでもこっちでも、黒々と固まった労働者たちが抱きあって男泣きながら。あれは、なんとも形容しようのない、「うた」というようなもんじゃなかった。ほんとうに、人間の肺腑をえぐるような、怒り、と、どよめき、それがひとつの大きなうねりになってねえ。地底から湧きあがってくるような。

大木 （マッチを探しあて）あ、ごめんごめん。マッチ、あったよ。

峠 書いてみたんだよ。それを。これ、この「怒りのうた」。

大木 （ふりかえって壁に貼られた詩をみる）

峠 ゆうべね。労働者の前で朗読したんだ。そしたら凄い反響で。僕は思わず泣けたね。生まれてはじめてじゃからね。ぼくの詩が民衆の心の中によろこんで受け入れられたのは。

大木 うむ。

峠 ぼくが、十年以上詩をつくってきたいうても、そもそもの動機いうたら、まあ療養生活の手慰さみみたいなもんじゃったからねえ。ほら君にもいわれたじゃないか。偽善者だ。民衆、民衆いうが、腹ん中じゃ民衆から顔をそむけとる。あれはこたえたね。この半年、そればっかり考えた。それが、やっとね、民衆と、どっかで、つながれるものになってきたと思うんだよ。この詩で。この二、三日の、こんな充実した気持は、はじめてだよ。やれそうだ。こんどこそ、何かやれそうだよ。

大木 あんた、ほんとにそう思いこんどるんか？

峠 思いこむ？

大木 それこそ、腹ん中じゃどう思うとる、この詩を。

峠 いや、だから、この詩で、こんどこそ僕もはっきり変ったと。

大木 ふむ。変ったとは言えるかもしれん。しかし、変るいうことは、よくも悪くも変るいうことじゃ。

峠 ……つまり、これでは、駄目ということか？

大木 駄目じゃな。これまでのあんたの仕事のなかでも、こういううつろな響きをもった詩はみたことがないよ。こりゃ詩じゃない。運動会の応援歌じゃ。

峠 日鋼事件を、運動会といっしょにするんか。

大木 わかっとる、わかっとる。日鋼事件じゃない。わしゃあんたの詩について論じとるんじゃ。あんたの詩が、運動会の応援歌ふうなんじゃ。なんでこうりきみかえった言葉ばかり並べんといかんのじゃ。この中には、もう峠三吉といえる言葉はひとつもないじゃないか。あんた、誰に頼まれてこれをつくった？

峠 頼まれた、いうて、君。

大木 （仕事をしている四人の方に目をやって）言うてもらわんでも大体わかるが。

峠 なにが言いたいんじゃ、君は。だからさっきも言うたろ。僕は、あの夕闇の中でわきあがってくる歌声に。実際に、その場に居あわせて。

大木 ほんとにお人好しじゃの、あんたは。これくらいのことがわからんのか。この詩が喜ばれたいうのは、ひとつの政治的なできごとにすぎんのじゃ。はっきりいうとくがこの詩、自体の、芸術的な評価とは無関

係なんじゃ。そこがわかっとらんと、ほんまに、自分をつぶされてしまうぞ。

峠 （まじまじと大木をみつめる）

大木 こういう言いかたすると、あんたいやがるのは、わかりきっとるが。わしゃあんたに、もう少しずる賢うなれと言うとるんじゃ。（溜息をつく）わからんょうなのう。仕様がないのう。大体が、政治に首つっこむ奴は、どっかに腹黒うて、計算の効くとこをもっとる連中ばっかりなんじゃ。あんたときたら、純真というんか無垢というんか、生まれたての赤ん坊みたいなまんまで、そのくせ政治好きときとるんじゃからのう。

峠の家の裏手から春子の声。

「ちょっと誰か手伝ってえ」

四人かけよっていく。峠も遅えにでる。春子、野菜や米などの入った大きなリュック、風呂敷包みをかかえてあらわれる。

峠 お帰り、大変だったろう。

春子 鈴木のおばさんにもわけてあげようと思って欲ばったもんだから、ああ、胸が抜けそう。

峠 それ、かしなさい。

春子 無理ですよ。あなたには。

峠 馬鹿にすなや。これくらい。よっこらしょっと。

峠、むきになって一番大きな米袋をかつぎ、ふらつきながら運びこむ。

（笑い）

春子 まあ、大木さん。いつきちゃったん。連絡くらい、しといてくれてならええのに。

大木 お久しぶり。いや、今ついたばかりですよ。

春子 くたびれちゃったでしょ。まあゆっくりして。

大木 ええ。ちょっと身体ふかせてもらおうか。広島はやっぱり東京より暑い。

春子 どうですか？東京の方は、個展、開きました？

大木 まあね。いろいろとね。生活、生活。峠のいう生活の洪水じゃ。食うために、いろいろやってますよ。

春子 （考えこんでいる峠に）どうなさったの。無理するから。

峠 いや。そうじゃないんだ。

仕事をしている一同のところへ、いつのまにか姿を消していた見田が、また大急ぎでかけもどってくる。

見田 ああ、腹へった。

市河 （峠の家の中へかけこむ）

吉本 見田さん。あんた、また朝御飯も食べてないんでしょ。

見田 うん。

吉本 あんた、無理よ。そんなことしてちゃ長つづきしないよ。青共の常任いうても給料でるわけじゃないんでしょ。

見田 そりゃそうよ。

市河 （帰ってきてパンをだす）これ。

岩井 お！気がきく。

見田、ガツガツと食っている。

岩井 見田さん。いつかイッちゃん言よったよ。見田さんお母さんのとこへ、どうして帰らんのじゃろか、いうて。

見田 イッちゃん、そんとなこというたん

か。

市河 ほいでも……。うち、不思議でしょうがないん。折角お母さんがおってじゃのに。

見田 わからんもんじゃの、実際。うちへ帰っても甘やかされて活動がにぶるだけじゃいうたろうが。

吉本 だってお母さん心配してるでしょ。文無しでどうやってくらしていけるの。ねえイッちゃん。

見田 うるさいねえ、あんたは。献身的に活動しておればねえ、黙っとっても、大衆が支えてくれる。

岩井 へえ！

増田 その大衆というのは、案外イッちゃん一人のことじゃないんかい。

見田 え？（考えこむ）ほんというと、地区の同志にゃ内緒じゃけど、ときどきこっそりアルバイトにいって活動費稼ぐんじゃ。

岩井 へえ、どこへね？

見田 米軍キャンプのな、雑役よ、ウオールロッカー直したり、プレスマンやったり。

市河 プレスマン？

見田 うん。アイロンかけよ。

岩井 見田さんが。アイロンがけするん？

見田 おう。アメちゃんのアイロンは大きいけんの。持っただけで重たい。しかし胸くその悪いとこで、あそこは、飯どきになったら、（イ、パブさん、チャブ チャブ O K、こうじゃからの。（食べ終る）うまかったあ。イッちゃん、水。

市河 （また峠の家へ水をとりにいく）

岩井 お、いばっとる。

吉本 だけど、どうしてアルバイトするのに、内緒でないといけんの？

見田 そりゃ、常住、みんな食うや食わずやで頑張っとるのに、おれだけアルバイトにいってきますいうて、大きな声でいえるかい。……わしゃ、やっぱり弱いんじゃのう。他の同志みたいに、活動だけで資金をつくることができん。

吉本 わからんねえ。どうして。

見田 （プラカードに字を入れながら）美しい社会をつくるために、そのために斗っておればこそ、男は女を愛し、女は男を。

吉本 （ふきだして）見田さんのひとつ覚えじゃ。

見田 （市河のもってきたコップをうけとり）お！サンキュー。

増田 見田君よ。男は女を愛し、いうとこばっかり言うとらんと、早う実際行動に移せや。ぼやぼやしよったら、イッちゃんどっかへいってしまうぞ。なあ、イッちゃん。

市河 知らん。

見田 増田さん！これは革命的精神の問題ですよッ！（吉本たちまたふきだす）

大木が手拭いで首をふきふきあらわれる。

大木 （下手をのぞいて）奥さん。いつもあなんですか。

春子 ええ、以前もそうじゃたけど、ここんとこすっかり若い人たちの集会場になってしもうて。

大木 （笑って）こりゃたまったもんじゃないな。それでね、峠君、これからが肝心の話なんじゃが、東京でね、君も知っとる、ほら中央芸論の坂巻さんね。

峠 ああ。

横断幕やプラカードを仕上げた見田たちが家の方にひきあげてくる。

見田 峠さん、できましたよ。

峠 （腰をうかし）うん、どれどれ。

春子 落着いて聞きなさいよ、あなた。しょうのない人ねえ。

大木 その、坂巻さんの企画でね。新しく詩の評論雑誌がでるんだそうだ。その編集担当者として、峠君、あんたの名前が浮かびあがったんだよ。坂巻さんはあんたの仕事をよく調べていてねえ、才能も充分にかっている。思いきって任せるから、どしどし独自のプランでやってもらいたいというんでな。頼まれてきたんだよ。

春子 あなた。

峠 うん。

大木 今、どっか勤めよるんかい。

春子 それがねえ、大木さん。この三月から、県庁の施設農協連で、農村巡回映画の仕事をしていたんですけどね。トラックに揺られどおしで、やっぱり無理じゃったんねえ。また喀血して、こんどばかりは危篤状態じゃったんよ、ひと月ほど前に起きあがったばかり。

大木 無茶だよ。峠の身体でそんな仕事できる筈がない。しかし、東京へでてくれば身体のことは坂巻さんにもよく話してあるし、設備の整った病院で診てもらえるし。

春子 夢のようなお話ですわ、ねえ、あなた。

峠 そうだね。じゃが、みんなとも相談してみんと。

春子 なにもこんなことまで皆さんと、みなさんだって喜んでくれてですよ。あれだけみんなしてあなたの身体のこと心配してくださってたんですもの。ほんとに大木さん、喀血のときゃなんか、並大抵のお世話じゃなかったんですよ。毎晩看病に来てくださるし、輸血の血をだしてくださるやら、栄養になるものを集めて下さるやら。

大木 そうですか。まあ奥さんも苦しいことだらけじゃったろうけど、峠三吉の存在も、この頃じゃ全国的なものになってきてますからね。

春子 また大木さんの大げさな。

大木 いや、ほんと。「鏡占い」「三人の子供」「美の解放」、ああいうものが、みな一流誌に掲載されとるとはねえ。僕も東京へでてみるまで知らんかった。

峠 そりゃ、君、みんなずっと以前のもんだよ。

大木 なんにしてもだ。チャンスはチャンスよ。坂巻さんもな、既成の詩壇の人材じゃあきたりずに、魅力的な新人を探していたとこじゃいうんでな。大いに峠三吉の新鮮さに期待がかけられとる。このチャンスを逃すいう法はないと思うがな。

峠 うむ。（考えこむ）

見田 峠さん。東京へいくんですか？困るよ。そりゃ。今峠さんにでていかれたらわしらどうなるんです。

大木 いや、あんたがたも、峠のことをほんとに考えてくれるんなら、これが一番ええ。

見田 そりゃ、峠さん個人の幸福のためにですか。

大木 むろんそれもあるさ。

見田 しかし、ぼくたちの社会を一日も早う実現させにゃ。峠さんのほんとうの幸福もこんのじゃないですか。

大木 そんな、観念的な。

見田 いや事実をみて下さい。革命はそう遠いことないですよ。共産党の国会議員が、三十五人も出るいうようなことが一年前に考えられましたか。一度広島を歩いて、日調の弾圧に対する市民の反響をみてみりゃええんです。広島じゅう権力に対する怒りで沸きたってますよ。

市河 そようなこというても、峠さん早う身

体直さんといけんし、治療しようと思えばお金もかかるし。

見田　もうちょっとの辛棒なんじゃ。今は、ひとりの活動家も失わずに、力を集中する必要があるんじゃ。大衆斗争が質的に変ってきとることを、こんどほど肌身に感じたことはないじゃろ。この夏が恐らく吉田内閣の最大の危機になるじゃろうと言われとるし、国際情勢も大きう変ってきとる。中国で革命政府が樹立されるのももうすぐじゃ。

増田　見田君。

見田　増田さん、すぐまたうけうりじゃいうけど、そうでしょうが、ポツダム宣言じゃ平和的で民主的な政府ができりゃ占領軍は撤退するいうことをはっきり書いてあるんじゃから、大衆の圧倒的な支持さえありゃ、おれたちの政府をつくって連合軍にもそれを認めさせることができるんじゃ。それもこの秋には可能性が。

春子　見田さんの話をきいとったら、明日にでも革命がきそうだけど、なかなかそんな風にはねえ。

大木　あほらしい。あんた革命までカスミを食うて待っとれいうんか。それまでどうはりやら集会やら演説やらで、峠をひきずりまわそうというんじゃろ。その間に峠の身体はばらばらになってもかまわんと言うんか。身体だけじゃない。才能もすりへってしまう。第一峠三吉の流麗な詩情をぶちこわして（壁の詩をみて）こういう乾からびた詩をつくらせたのは一体誰なんじゃ。

増田　大木さん。そりゃ違いますよ。「怒りのうた」は立派な詩じゃと、ぼくらは思ってますよ。

大木　ぼくら、とは誰のことじゃ？どこかの指令部か？

増田　ぼく自身。それからここにおる者、こんどの日鋼事件の斗争に参加したものみんなですよ。

大木　そりゃ、これだけ旗ふってもろたら、誰じゃて喜ぶわい。そこがあんたらの思う壺じゃくらいはわかりますよ。

見田　峠さん。この人といっしょに有名になりたいんじゃったら、東京へないとどこへないといきゃええでしょ。

大木　またそういう極端な。誰が有名になるためだけに東京へでろといよるか。自分の才能を充分に発揮できる場所、少なくともそれに専念できる場所として、東京行きをすすめとるんじゃ。自分の才能をためす機会がきたら、臆せずにそれにとびこむのがなにが悪い。いつまでもここで、お山の大将でおっても峠三吉のためにはならん。

峠　大木君。あんた、ぼくの流麗な詩情をぶちこわしたのは誰じゃというとったが、そりゃ他でもない、ぼく自身だ。自分じゃそう思うとるんよ。ぼくは、近頃になって、やっと自分のなかのいやなところに気づきはじめてねえ。少しくらい破綻があってもいい、強引にそいつをぶちこわしてみようじゃないかとね。ところが、ぶちこわしたあとに新しいものをうみだすつもりでも、なかなかそうはいかないもんだ。（壁の詩をみて）うつろな響きか。そうかもしれないね。さっきぼくは、こんどこそはっきり変ったというたけど、考えは変ったつもりでも、身体にしみついた情感というのか、情緒というんか、そいつは古いまんまなんじゃ。言葉になってあらわれるときは、だから、やっぱりぶちこわしたつもりのいやなところがうかびあがってくるんじゃねえ。ぼくがあのとき見たのも。ほんとはこんなもんじゃなかった筈だ。そうだろ。増田君。鈴木のおじさんみたって、せきさんみたって、あの弾圧といきどおりをくぐりぬけたあくる日に、どうしてああ明るいんだろう。ぼくの眼じゃ、どうしても、そこがとらえきれない。どうして、ぼくの言葉は、こう心情のなかにこもっていくのかねえ。こりゃ、やっぱり峠三吉流の泣き節じゃ。（立上り、辻詩をくるくるまめていく）たしかに、ぼくはお調子のりじゃねえ。だけどね、大木君。君はお山の大将じゃ駄目じゃというたけど、あれは違うよ。青文連時代のつきあいは、あんたはあんた、おれはおれという風に、お互いの自由を認めあった上でというところがあったけど、ここじゃそうはいかんのだよ。みんな相当手厳しうてね、僕の詩なんか、古くさい、古くさい言われ通しで、一番痛いところをぴしぴしついてくるんじゃ。

増田　（笑いながら）相当に脱線して、混乱ばっかりさせてね。

岩井　そうよ。見田さんの国際国内情勢も、ときと場所によりけりよ。（笑い）

春子　それで、あなたどうなさるの、大木さんのお話。

増田　大木さん。僕は、峠さんが、いろんな困難にぶっつかりながら「怒りのうた」までたどりついてこられた道は、お互いの問題としてもっと細かくふりかえってみる必要があると思うんです。それが言いたかったんですよ。大木さんが、峠さんの仕事と身体のこと心配なさって、いろいろと奔走してくださっていることは勿論ぼくらも感謝します。わしらは、どうも、ものをつくる人の、細かい内側の問題まではようわからんところがありますから、ひとつ、ゆっくり相談にのって下さい。お願いします。さあ、みんないこうか。

風にのって遠く近く歌声が聞えている。
五人は横断幕やプラカードをもって外にでる。岩井、川土堤へかけていく。

岩井　お！いきよる、いきよる、向う岸！

峠　あ、待ってくれ。僕もいっしょにいくよ。

増田　ええんですか、峠さん。

峠　大木君、この増田君とも相談してね、もうすぐ僕たちの間で「われらの詩」という、新しい詩のグループが生れるんだ。雑誌の第一号も、もう準備にとりかかっとるんじゃ。こんな僕でも、広島での仕事が次々と……。そうにらむなや。どう せ今日は泊っていくじゃろ？今夜また、な。

峠と、五人、下手へ。

見田　峠さん、その詩のグループ。わしも入れてもらえるでしょうか。

岩井　え？本気？見田さん。

見田　おかしいかの。

峠　そんなことないよ。やろうよ。楽しうなるよ、そりゃ。（市河をふりかえる）

歌声が騒然と入りまじる中で

——幕——

第三幕

1　〈八月六日〉

一九五〇年六月。夕刻から夜にかけて。急ピッチの都市復興は川岸の風景も一変させている。川土堤の一角に「平和記念都市建設法による緑地帯指

定区域。立入禁止。広島市。」の立札がみえる。

峠の家の表には「われらの詩の会事務局」の看板。部屋の壁には「火を吐く歌を！」という絵入りのスローガンがひときわ大きく、その他「八・六反戦デーに結集しよう！」のポスター、ストックホルムアピールなどがところせましと貼られてあり、生活の場は片隅におしやられている感じ。

峠、増田、市河、吉本、岩井の五人が製本されてきた「われらの詩」発送の区分け作業。

市河　「芸術は人間のためにある。人間の世界が危機にさらされるとき、人間がこころにもつ最も美しいものの結晶である芸術は、ただちに人間の敵に対する最も鋭い武器とならねばならぬ。」

増田　むつかしい。実にむつかしい。なんと俺たちの詩の、なかなか火を吐かんことか。

峠　（笑って）気になるとみえるねあの批評。（市河たちに）いやね、このまえだした反戦詩歌集。その宣言文もあれから転載したもんじゃけど、宣言文自体はなかなか立派じゃが、詩の方はさっぱりじゃという批評よこした人がいるんだよ。

吉本　そうかしら。あたし峠さんの書いた「よびかけ」。あれ読んで思わずどきんとしたわよ。「いまでもおそくはない！あなたのほんとうの力をふるい起こすのはおそくはない」

増田　うむ。で、俺の詩はどうじゃった？

吉本　え？増田さんのものっとったかね。

増田　絶望じゃ。やっぱり絶望じゃ。

吉本　（笑いながら）ごめん。まだ全部読んどるわけじゃ。

増田　ええんじゃよ。パラ読みでもあんたの眼にとまらんということは、それはそれでひとつの解答じゃ。芸術は人間のために、か。これくらい、いまのわしらの気持を言いあてた言葉はないんじゃがの。「今や歌がと絶えざるためには人民の魂が鳴り出でねばならぬ時がきた」、われらの詩第一号の、峠さんのあの扉のことば。あれから号を重ねてこの宣言文へきた。こりゃたしかにわれらの詩の会の思想の発展を物語るもんじゃ。部数もこれだけ増えたし、支部もあちこちにできた。こんどは反戦詩歌人集団も出発して、原爆の街から全国に先がけて反戦ののろしをあげた。こういう性格の会で、これくらい活発に動きよるところは広島しかないそうなけん、ほんまに誇りに思うてええんじゃろうが……。

吉本　絶望したり、誇りに思うたり、でもたしかにそうね。

岩井　「西日」、岩井美代子か。

吉本　あんた、さっきからなんべん自分のとこみよるん。

増田　誰しも自分の詩は一番気になるわい。ところがおのれときたら、いつまでたってもほんとに武器になれるような詩はよう書かんときとる。情けのうもなるわい。イッちゃんらどうや？

市河　でも、人間の敵とか、武器になる詩とか、そういうことを意識しとかんと、ほんとにいい詩は書けんもんじゃろか。

増田　うむ。むつかしい問題じゃ。

人夫のかけ声や建物の倒れる音がする峠の家のすぐ脇まで区画整理がやられているのである。

岩井　あ！なに、あれ。

峠　立退きなんじゃ。あそこに立札が立っとったじゃろ。平和都市の建設だそうだ。

岩井　いやじゃのう。戦時中の建物疎開思いだす。

吉本　どんどん焼跡整理して、はようビカのことは忘れてしまえいうとるみたいじゃね。

増田　（立ち上って工事の方へ目をやりながら）峠さん、ここは大丈夫なん？

峠　当分はね。鈴木さんとこも大変じゃ。立退きには会う。日本製鋼は追いだされる。辛いだろな。

増田　はようわかっとりゃ、立退反対同盟でもつくって

峠　それがねえ、鈴木のおじさん、おばさんも知らん間に市役所から補償金受けとってしもうて、競輪にみなつぎこんでしもうたんじゃそうな。日鋼を首になってからつとめだした大洲の工場もつぶれてしまうし、やけになっとってんじゃろうが……。

見田がのっそり入ってくる。

増田　そうか。（立ち戻って）あ、ストックホルムアピールの署名用紙入れるの忘れんようにの。どう、あんたの方は。平和署名、進んどる？

吉本　ええ。だけど、この頃みんなこわがりだしてね。「われらの詩の会」いうだけで警戒する人がおるん。

岩井　そうなんよ。うちのとこやなんかね、組合が民同で固っとるでしょ。組合員を再登録して、共産党系は全部組合から追出してしまういうはなしよ。組合から追出されたものはみんな人員整理の対象になるんじゃいうて。

吉本　まあ、それじゃ労働組合が首切りのリストつくるようなもんじゃない。

岩井　そうなんよ。まえは会社の労務ににらまれるのがこわかったのがこの頃は組合役員に目をつけられるのがおそろしいいうてみんなビクビクなんよ。こないだもね、ストックホルムアピールの署名頼んだら、その人、カンパならだすが署名は名前が知れるからのう、組合につかまれて、痛うもない腹探られるのはかなわんし。どうじゃろ、偽名じゃいけんか、いうて。

増田　それで、あんた、どうした？

岩井　どうしたいうて、まさか偽名の署名もらうわけにもいかんでしょ。そんならええいうて断ったん。

峠　どこも同じなんじゃねえ。増田君、昨日八・六平和大会の実行委員会があったんじゃが、県労協の役員は全員実行委員会からおりてしもうたよ。

増田　そうか、やっぱり。

峠　大会スローガンに、ストックホルムアピールが入っとるのがいけんいうんじゃ原子兵器禁止だけにしぼらんと、運動がひろがらんという。最初に原子兵器を使用する国を戦争犯罪人とみなすいう条項なんか露骨にアメリカを指すもんで、ストックホルムアピールなんて明らかな反米活動だ。いや、平和擁護世界大会そのものが共産党の国際組織だと言いだす人もでてくる始末なんじゃ。

岩井　うちもね、こようなこと言うたらまた怒られるかもしれんけど、ときどき思うんよ。こんとな小さい紙きれに、うちらの名前書きこんで、それでほんとになんかの力になるんじゃろうかと。

見田　そりゃちがうぞ、あんた。

峠　うん。しかし、岩井君だって、なにも署名活動そのものに意味がないと言うとる訳じゃないだろ。胸の奥にある疑問を正直

にだしてみただけなんじゃろうから。それに、そういう疑問は、岩井君だけのことじゃないかもしれんし。ただね、ほら、このまえフランスのレジスタンス詩集を翻し読みして話しおうたことがあったじゃろ。ファシストの戦争をくいとめていった一番大きな力、平和な時代をつくりだす根もとになった力いうのは、やっぱり一人一人の人間じゃった。一人の人間の力いうて大きいもんじゃのういうて。「この小さな人間の威厳にみちた果てしない力よ」……。あそこのところにとても感動したよねえ。ストックホルムアピールいうのは、ああいう第二次大戦下の抵抗運動で人類がはじめて学びとった教訓からひきだされたとっても大衆的な運動なんだと僕は思うよ。単なる反米活動なんてもんじゃない。もっと拡がりのある。あれだけの犠牲をはらって築きあげた戦後の平和の時代を、ほんとうに確かなものにしていくための運動だと思うよ。ただ、この国際的な統一行動の課題が、広島でさえも、首切りや弾圧の問題にかくれて、まだまだ切実なものになってないという現状が残念なんじゃが。

見田　とにかく、広島で原爆に会うた人間が、平和署名に疑問をもつなんちうて、わしゃ想像もできんぞ。岩井さん。

岩井　ほいでも、見田さんがいうようにはいかんよ。見田さんは、すぐ、サークルが、もっと職場の前衛にならにゃいけん、われらの詩も、もっと反帝斗争に眼を向けた活動をすべきじゃいうけど。

見田　そりゃ、これだけ弾圧が厳しい状勢じゃけえ、困難じゃいうことはわかるよ。ほいじゃが、今みたいに労働組合がどんどん右寄りになってしもうて、平和の問題や、全面講和の問題や、とにかく日本人の運命を左右する一番大事な問題をいっこうにとりあげようとせん状態じゃ、やっぱり、われらの詩のようなサークルが。

岩井　ほいでも、われらの詩は、詩のサークルでしょ？見田さんも、自分がいうような詩をいっぺんぐらい書いてみりゃええんよ。

見田　それ言われると弱いが。（頭をかく）

市河　（さっきから、区分けの手を休めずにいたが）峠さん、これ送ってきます。

吉本　あ、うちらもいこ。

岩井　うん。

市河、吉本、岩井、本をかかえて外へ。

吉本　ねえ、あんたたち、ミス広島みた？

岩井　みたみた。きれいね、やっぱり。

市河　原さんいうんでしょ。あの人、市女で一級下じゃった。

吉本　今日来たよ、うちの病院へ。

岩井　へえ、なにしに？

吉本　原爆患者の見舞。花束もって進駐軍の将校といっしょに、ケロイドでノイローゼになってる人のとこへ＝スヒロシマなんかつれてきて。見せ物じゃありませんっていってやりたかったよ。

市河　うち、きらいよ、あの人。気どって。あーっ、いやじゃいやじゃなにもかも。踊る宗教にでも入ろうか。

岩井　踊る宗教？

市河　こうやるんよ。

さあさあ天女の舞じゃ天女の舞じゃ
ナーミョーホーレンナーミョーホーレン
みんなおめめを覚ましゃんせ
おめめが覚めたら神の国
税金税金なんでもとりあげ丸裸
自我自我自我で我の天下
神のみくにの神の子が

ウジの世界に総進軍
お布施お初穂とりあげて
生クソ坊主のクソ野郎

見田　イッちゃん！やめろや、もう。

市河　さ、いこ！

市河走り去る。吉本と岩井もあわてて追う。

見田　峠さん。わしゃ。わからんようになってしもうた。

峠　イッちゃんのことかい。

見田　それもあるけど。峠さん、峠さんらは、自分で詩を書きよって、こういうことしとってええんじゃろうかと、思うようなことはないでしょうね。

峠　こういうこと……。

見田　峠さんが、そういうこと考える筈ないけど、わし、いっぺん聞いてみたかったんです。わし、詩とか芸術とかは、まるで自分の性に合わんもんと思うてきたけど、近頃になって、そういう自分がほんまもんかどうか……。やっぱりやめとこう、こがいな話。

峠　見田君。つづけてくれたまえ。

見田　いや、自分でもよう整理がつかんのです。書きたいいう気持は、これでも持っとるつもりなんです。いままでも、何回か書きかけたことはあるんじゃが、そのたんびに、こういうことしとってええんか、いまこういうのんきなことしとれる場合か、いう気持がすぐ頭をもたげてきて、われらの詩にも、ほんとは毎日でもきたいけど、なんか他の同志たちに対して悪い気がして。

峠　そういう気持になることはね、君だけじゃないよ、見田君。僕だってある。恐らく増田君だって、誰だって。

増田　そうよ。さっきも話しよったとこなんじゃ。わしらは、こういう、かけ足で進む情勢に見あうだけの詩をはたして書きよるんかいうことをの。机に向って考えよる間にも同志たちは次々と政令違反で逮捕されていくし、あんたらの生活みよっても、それこそ分秒きざみの活動に追われて、夜は夜で弾圧に備えてズボンはいたまんまのゴロ寝生活をつづけとる。そういうこと見聞きするたびに、これでええんか、こういうことしとってええんかい気にもなるよ。しかし、やっぱりあせっちゃ負けじゃよ。あせって詩が書けるもんじゃない。

見田　ほいじゃが、峠さんらと、わしとは、やっぱり違う思うんです。峠さんにしても増田さんにしても、ちゃんと詩という分野で自分の部署を果しとってじゃ。わしは、中途半端なんです。いっつもどっかで自分を押えつけて、無理しとかんと、しゃんとできんところがある。じゃから。

峠　見田くん。そんなふうに自分を決めこんでしまうのはよくないよ。

増田　あんたの気分はわかるが、詩や芸術がのんきな問題かの？わしやそこがひっかかるぞ。あんた、ほんまは詩や芸術いうもんを、どっかで見下して考えとるんじゃないんか。いや、あんたがそう思わんにしても、今の常任連中にはたぶんにそういうところがあるけんの。政治に対して芸術は従属するいうが、こりゃなにも芸術が政治に対して副次的なもんじゃとか、れい属してくっついとるいう意味じゃなかろうが。それを、どうも近頃の指導部は、短兵急に政治課題にくっつけて、目先の効果があらわれるような芸術ばっかり要求する傾向がある。

峠さんがいう「武器になる芸術」いう意味も、ほんとはそんなもんじゃないと思う

ぞ。

峠　うん。文学団体の仲間うちでもね。最近になって、宮本百合子の文学を、急にブルジョア文学だと攻撃しはじめる者があらわれたり。どうもわからんところが多すぎる。

見田　わし、悪いけど、今日もあんまり時間がないんです。

峠　あ、そうか。

見田　実は、今日はちょっとほかの頼みがあってきたんですが。

峠　はようういうたらよかったのに。なんだい？頼みいうて。

見田　峠さんとこに、鞄があったら、貸してもらえんでしょうか。

峠　鞄？そりゃ探してみたら、あるかもしれんけど。どうして？

見田　わしも、近いうち、もぐることになるかもしれんのです。

峠　もぐる？

見田　中央委員の追放以来、矢つぎ早の弾圧でしょう。いつでも全面的な非公然活動に入れるように、常任は全員身辺の準備をせにゃいけんことになったんです。

増田　それで……。

峠　もぐるいうて君……。そりゃ、鞄のことはわかったけど君、やっぱりほんとうは、さっきイッちゃんのことが言いたかったんじゃないのかい。え？

見田　わしのこと、結局理解できんのじゃ思うんです。イッちゃんには、この頃はだんだん、離れていってしまうような気がするけど、無理もないんです。かりに、イッちゃんが、どう思うてくれたにせよ。今から先、どういう生活が待ちうけとるんか、自分でも想像もつかんような男のとこに、イッちゃん、ひっぱりこむ気にはとてもなれんし、やっぱり、あきらめるよりしょうがない。

峠　見田君、君のそういう発想方法はね、どっかに無理があると思うよ。僕は、イッちゃん、原爆で一人っきりになってからというもの、廻りは親せきの年とった人ばかりだし、君だけが心を開いて話しあえる相手じゃないか。そして、君とつきあうなかで、あんなに成長したんだ。こんどの号のイッちゃんの詩、読んだろ。あのメーデーの詩。ちょうど、今実を結んだばかりの石榴のように新鮮だ。一年間で、よくもあそこまでと、ぼくはびっくりしているんだよ。それも、君と一緒に駒くんで、生れてはじめてメーデーに参加したなかから生れた詩じゃないか。君がはっきりした態度をとらないうちは、そりゃ彼女だって動揺するかもしれん。だけどね、イッちゃんの内部には、いまきっと激しいものが動いているんだ。一度火がつけば、大きな炎になって燃えあがるにちがいない。その火つけ役は、やっぱり君が一番ふさわしいと僕は思っているんだ。イッちゃんだって、きっとそれを待っているんだよ。僕はやっぱり君の方から胸を開いて話しあうべきだと思うよ。これから先、どういう活動に入っていくにせよだ。一人の人間の愛情をどう受けとめるのか、どういう解決の態度をとるのかということが、革命というものをどう考えるかという問題と無関係じゃあり得ないだろ。

増田　そうよ。なんでそう、こっからこっちは革命、こっからこっちは違うことと分けてしまわにゃならんのじゃ。もぐるいうたって、党はまだ完全に非合法化されたわけじゃなかろうが。わからん。わからんぞ、わしは。何故そういう方針がでてくるんか？なんで、わざわざ敵の前で自分の方から手をしばってしまう必要があるんか？合法的に、大衆の面前で活動できる舞台はまだまだいっぱいあるんじゃ。そこを拡大することには眼を向けずに、自分の手でどんどんそれを切ってしもうて、あとに一体なにが残るいうんじゃ。

かりに、非合法体制が既定の事実としてもじゃ。戦前の非合法活動じゃって、話に聞く内容はこんなもんじゃないぞ。どがいに敵に追いこまれても、大衆の生活と、労働者のたたかいに根をはることだけは忘れずにやってきとろうが！

それを、おまえら……。そんなもんじゃないぞ。党とはそんなもんじゃないぞ！

見田　増田さん！いろいろあっても、決定にはやっぱり従うべきでしょうが。組織とは、そういうもんじゃないですか。

春子が帰ってくる。

春子　ただいま。まあ、こんな暗いままで。（峠、電球ひねる）あなた、ちょっと。（峠と家の外へ）今日も会議？ねえ、あなた、一度日赤の先生に診てもらえるように頼んで下さいよ。

峠　どうしたんだい。

春子　実のことですよ。

峠　寄ったんかい。

春子　なに食べさせてもすぐ吐きだしてしまうんですって。かかりつけの先生は、ただの胃腸障害じゃ言うてんじゃけど、あんまりしょっちゅうでしょう。どうもそれだけとは思えなくて。

峠　そりゃ、すぐ頼んでみてもええが、また面倒なことになるんじゃないか。あのおばあさんがカンカンになって。

春子　……どうせあなたの子じゃないものね。

峠　またそういうことを。

（市河たち三人が帰ってくる。春子さけるように家の中へ。）

春子　あらあら、またこういうものに、あなた、灰皿ぐらいちゃんと出したげなさいよ。

増田　すみません、どうも。

岩井　はい、これ、おみやげ。（あげパンやするめの袋をひろげて）奥さんもどうぞ。

春子　いえ。私は晩御飯の仕度がありますから、お茶はそこの戸棚のなか。自分たちでいれて（台所仕事をはじめる）

増田　大丈夫ですか。今日はもうおひらきにしましょうか。

峠　かまわんよ。まだかんじんなことはなにも話しあってないじゃないか。見田君ももうしばらくはいいだろ。

見田　ええ。

峠　次の号のことなんじゃがね。……なにから話したらええか。僕の頭、ちょっと混乱しとるようじゃ。

増田　峠さんの考えはね、こんどの号を、八・六の前いうこともあるし、平和特集号にして、みんなで原爆の詩を書いてみたらどうかということなんじゃ。こりゃ、生易しい仕事じゃなかろうがの。これまでの「われらの詩」をくってみても、原爆をまともにみすえた詩いうのはほとんどない。反戦詩歌集の、峠さんの「よびかけ」が、おそらくはじめてぐらいじゃないか。

吉本　そうね。

増田　何故そうなんか。そこをよう考えてみる必要があると、峠さんはいうんじゃ。わしもいつか、見田にいわれて、ハッとしたことがあるんじゃが、被爆者はなんで原爆のことになると黙りこんでしまうんか、そりゃ占領軍の圧迫ということもある。原爆

のことを表沙汰にしただけで占領政策違反に問われるいう状態じゃ、誰だっておいそれと口にはだせんよ。しかし、それだけじゃないね。わしらの方にも、ピカのことになると自分の口を閉ざしてしまいたいいう気持はたしかに働いとる。ああいう地獄の経験を人に話してみたところでわかる道理がないとみんな思うとる。そんなら黙っとった方が楽じゃ。忘れられるもんなら一日でも早う忘れてしまいたい。

岩井 そうよ！

増田 ところが忘れえいうてもこれは忘れられるもんじゃあない。

岩井 当然よ。絶体忘れられるもんですか！

増田 なんと矛盾しきっとるよの、この気持。これを詩に書くいうことは、ほんまに並大抵じゃないぞ。なんと峠さんはやっかいな提案をするもんじゃ。しかし、これだけはは っきりしとる。わしらが黙りこくっとるかぎり、あの日広島でなにが起ったか、それを広島の人間がどう考えつづけてきたか、他のもんには全然わからん。それをえええことにして、トルーマンは、広島、長崎に投下した原爆は、本土上陸で失われたであろう二十万の米軍兵士とそれ以上の日本人の生命を救うためじゃったと、つまり平和のために落したと、原爆投下の正当性を世界に向ってしゃあしゃあと公表しとる。おまけに必要なときは又使うこともあるとさえ。被爆者が沈黙しとるいうことはその人殺しの論理を認めるちうことになってしまう。

峠 そうだよ。まったくその通りだ。このまえ出席した新日本文学会の大会で、僕は広島の被爆の実態について報告したんじゃが、はじめて聞いたといって、大半の人が驚いているんだよ。何故それを書いてくれんのかといわれて、逆にこっちが考えさせられたね。プレスコードがあるといったって、文学には様々な方法があるんだ。今、あらゆる方法でもって、ほとんど真相の伝えられてない原爆の実態を知らせていくということは、平和運動にとってどんな広がりをもつことか。被爆者が口を開かぬ、平和署名をもっていってもみんなこわがる、それもある意味じゃ当然かもしれんよ。人間は誰だって一人一人は臆病なんだ。自分が口を開くことが、どれだけ重たい意味をもって外にひびくのか、どんなに沢山の人たちに共感をうみだすのか、それがたしかめられて、はじめて勇気というものはわいてくるものなんじゃろうからね。口を開きたくても、今は開けない人たちにかわって、僕たちが沈黙の扉を開く。こりゃ当りまえのことだ。僕たちゃそれこそ幸いにも「詩」という武器をもっとるんじゃから。この五年間、広島の人間の胸の中で、ブスブスと燃え続けてきたものを、緊張しきったこれまでの広島の沈黙の意味を、ぼくたちの詩で問い直してみようじゃないか。もちろん、書きかたは、うんと自由でいいと思うんじゃが。

増田 われらの詩を、原爆の詩で埋めつくして、八・六反戦デーにはそれを持って参加しようという企画なんじゃ。やわこうても、こりゃどうでも書かにゃなるまい。このままじゃ、広島や長崎で死んでいった人は、アメリカ製の平和の尊い犠牲者としてまつりあげられるだけじゃ。それこそトルーマンの思うつぼじゃからの。広島が、ほんとうの意味で、反戦平和の原点になれるかどうか、それを考えていく仕事になるじゃろう、これは。

吉本 そうじゃね。やらにゃいけんね。

岩井 うちも、書かにゃいけんいう気がして

きた。

吉本 なにか、大事なことを忘れかけとったんじゃね、うちら。ね、イッちゃん。

市河 ……うん。

見田 あのな、イッちゃん、おれ、

市河 あ、鈴木のおじさん帰ってきた。

市河、平和署名の用紙をもって外へ。下手からぐでんぐでんに酔った凱太。

市河 おじさん、これ、平和署名なんです。原爆を二度と使わせないための。署名して下さい。

凱太、それに答えず、立入禁止の立札に見入っている。

凱太 畜生！（ひきゐいて放りだす。そのまま入る）

裏から、せきと凱太の怒鳴り声。

せきの声 また競輪でしょうが、あんたどうするつもりね、こどもになにくわせるんね。

凱太の声 なに―？大けな顔すな、婆あ。どこへいこうが勝手じゃい。

こどもの火のつくような泣き声。

せきの声 あんた、そりゃいけん。そりゃ今峠さんに借ったばっかり、お父ちゃん！

凱太の声 峠さん？峠じゃと？こん畜生！

身体ごと転がりこんでくる凱太。

凱太 おい、わしらあ、乞食じゃないんじゃけえの。あんまりなめたまねすな。返すわい、こげなゼニ！

せき なにをするんね、あんたは、せっかくの奥さんの親切を。峠さんとこも楽じゃないものを、あんたがそようなけん、みるにみかねて黙って貸して下さるんじゃないか。うちが日雇にでて、なんぼになる思うとるんね。お父ちゃんいうたら！

凱太 なにが親切じゃ。大けな顔すな。おまえらの、人の斗争タネに勝手なこと書いとりゃ、名が売れてええかしらんが、こっちは首はひとつしかないんじゃ！みんなが手を結びゃ勝つじゃの、人民政府ができるじゃのとええかげん人をおだてやがって。どこへ勝った？え？結局はなーんもせんとうに、おとなしうとしとったもんだけが残って、ええことしただけじゃろが。大うそつきが！

凱太、叫びつづけながら消える。せきも顔をおおって逃げるように。

間

増田 鈴木さんが、わしらにおだてられて、だまされたんじゃ思うのも無理はない。日本製鋼じゃ今は又工員の大募集じゃ。いま頃になって人間を入れるくらいなら、あのときは一体なんのためにあれだけの首を切った？

わしらはそれを、吉田内閣の産業破壊政策ととらえとった。なにが産業の破壊じゃ。百万の首切りが見事に完了されたあげくにはじめられたのは、日本の再軍備と、戦争用物資の受註で軒並みに息を吹きかえした軍需工場の復活だ。奴らは原爆投下のその日から、こうなるように事を運んできたんだよ。周到な計画で日本をつくり変えていったんだ。そして気がついたときには、日

本はもうアメリカの極東軍事政策の大きな環の中に、身動きならんくらいに組みこまれてしもうとる。それを、わしら、長い間占領軍を解放軍じゃと思いこんでみたり、人民の手で民主的な政府をつくったら、それをちゃんと認めてくれるじゃろうと甘い幻想もったり。この責任は大きいぞ。こんなときに、かんじんの党は、まっぷたつじゃ。

見田　わしのしてきたことは、一体わしの言うてきたことは……。

峠　見田君。それは君の、君だけの問題じゃないよ。もっと、この。はぐいいねえ！ぼくたちの内輪の、一番かんじんな、大切な部分のことになると、お互いにものがいえなくなるところがあるなんて／恐ろしいことだ、ほんとにめくらじゃったんじゃねえ。飴なんだねえ、僕らは。子供だって痛い目にあえば、何故かと考えるだろうに、ぼくらときたら、原爆まで落されていながら。（だまりこくったみんなを見まわして）それでも、それでも書きつづけるしかない。少くとも僕にとってはそうだ。実はね、僕にも、あの日のことを詩にかいてみたのがあるんだよ。こういうときに、まともに正視できる詩かどうか。読むにたえられるものか。だって僕にとっての「八月六日」がほんものかどうかの問題なんだからね、これは。読んでみていいかい？

峠　峠、机のひきだしからノートをとりだす。みんなそのまわりにあつまる。

峠　＜八月六日＞

あの閃光が忘れえようか
瞬時に街頭の三万は消え
圧しつぶされた暗闇の底で
五万の悲鳴は絶え

渦巻くきいろい煙がうすれると
ビルディングは裂け　橋は崩れ
満員電車はそのまま焦げ
涯しない瓦礫と燃えさしの堆積であった
広島

やがてボロ切れのような皮膚を垂れた両
手を胸に
くずれた脳漿を踏み
焼け焦げた布を腰にまとって

泣きながら群れ歩いた裸体の行列

石地蔵のように散乱した練兵場の屍体
つながれた馬へ這いより折り重なった河
岸の群も
灼けつく日ざしの下でしだいに屍体とか
わり
夕空をつく火光の中に
下敷きのまま生きていた母や弟の町のあ
たりも
焼けうつり

兵器廠の床の糞尿のうえに
のがれ横たわった女学生らの
太鼓腹の、片眼つぶれの、半身あかむけ
の、丸坊主の
誰がたれとも分らぬ一群の上に朝日がさ
せば
すでに動くものもなく
異臭のよどんだなかで金だらいにとぶ蠅
の羽音だけ

三十万の全市をしめたあの静寂が忘れえ
ようか
そのしずけさの中で

帰らなかった妻や子の白い眼窩が
俺たちの心魂をたち割って
込めたねがいを忘れえようか！

一人の青年がかけこんでくる

青年　見田さん、やっぱりここじゃった。聞きましたか、朝鮮で戦争がはじまったのを。

見田　え？ほんまか？

青年　さっき号外がでて、ラジオの臨時ニュースでも。

峠がラジオのスイッチをひねる。みんなそれにかじりつく。

ラジオのアナウンス　二五日午前十一時、北朝鮮は韓国に対し宣戦布告を発しました。宣戦布告に先立ち、六万の北朝鮮軍は国境沿い約二百マイルにわたって攻撃をしかけ、既に双方で四千名に近い死者がでており韓国側の幾つかの都市が北朝鮮軍によって占領されました。また韓国政府のスポークスマンの発表によれば、李承晩大統領は直接マッカーサ元帥に対して弾薬と飛行機の援助を要請しました。李大統領はこの要請の中で事態は絶望的であると述べています。
京城二五日発AP至急報、北朝鮮の攻撃は二五日午前五時に開始され、午前九時四五分までに、パイク・カオン、ホーチュンの二つの市が北鮮軍に占領されました。韓国政府は二五日午後二時北朝鮮に対し公式に宣戦布告を発すると発表しました。以上臨時ニュースを終ります。くりかえし臨時ニュースをお伝えします……。

増田　おい。こりゃほんまに大変なことになったぞ。こうなりゃ韓国軍の方にアメリカがのりだすにきまっとる。さっき話したばっかりじゃないか、トルーマンの声明のことを、必要とあれば、再び原爆を使用するだろうという。

峠　おくれている。すべてがおくれとる。ぼくらはやっと原爆の意味を探りはじめたばかりじゃいうのに。もし朝鮮人の上に原爆が落されるようなことがあったら。そりゃぼくらの怠慢のせいじゃ、ぼくら広島の人間の責任じゃ。急がんと、なにもかも急がんと……

峠、急にロのあたりを押えてうつぶせに突っ伏す

春子　あなた。あなた！

吉本　あ、喀血です。奥さん洗面器。

増田　峠さん！

見田　峠さん、しっかりして！

吉本　みんな落着いて。誰か、塩水。

轟々たる編隊機の爆音。

2、＜一九五〇年の八月六日＞

一九五〇年八月六日。八時十五分をつげるサイレン。平和の鐘。それを絶ち切るかのようなラウドスピーカーの声。

スピーカーの声　市民の皆さん、こちらは広島市警察本部です。広島市警察では、みなさま御存知のような時局の情勢を考えまして、反占領軍的、あるいは反日本的なものと思われる集会、集団行進、等の行為は禁止の

方針に決定しております。しかるに、広島市平和擁護委員会、あるいは青年祖国戦線等の団体においては、本日広島市で、警察の禁止命令を無視して、集会・集団行進又は集団示威運動等を行おうとしている事実が認められます。よって広島市警察は、これらに対して、公共の秩序保持とその福祉のために、やむを得ず断固実力を行使する方針であります。これらに参加する行為は、政令三一一号、又は公安条例の違反となるものでありますから、市民の皆さんは、知らずしてこうした行為に参加して違反行為となることのないよう充分御注意下さい。市民の皆さん、こちらは……

スピーカーの声の間に、いく人かの若者たちが、一本の赤旗をもってあらわれる。別の方角から峠。若者たち無言のまま舞台中央張出舞台にそれを立てる。「一九五〇・八・六平和大会万才日本人民と朝鮮人民の連帯万才」と書かれたスローガンがおりてくる。峠、張出舞台に歩み出る。若者たちは、峠を守るようにその背後に、客席に背を向けて立つ。

峠　走りよってくる　走りよってくる
あちらからも　こちらからも
腰の拳銃を押えた　警官が駆けよってくる

一九五〇年の八月六日
平和式典が禁止され
夜の町角　暁の橋畔に
立哨の警官がうごめいて
今日を迎えた広島の　街の真中
八丁堀交叉点　Fデパートのそのかげ
供養塔に焼跡に
花を供えて来た市民たちの流れが忽ち渦巻き
汗にひきつった顔紐が
群衆の中になだれこむ
黒い陣列に割られながら
よろめいて
一斉に見上るデパートの
五階の窓　六階の窓から
ひらひら　ひらひら
夏雲をバックに　蓝になり　陽に光り
無数のビラが舞い
あお向けた顔の上　のぼした手のなか
飢えた心の底に　ゆっくりと散りこむ

誰かがひろった　胸が叩き落した
手が空中でつかんだ　眼が読んだ
労働者、商人、学生、娘
近郷近在の老人、子供
八月六日を命日にもつ全ヒロシマの
市民群衆そして警官
押し合い　怒号
とろうとする平和のビラ
奪われまいとする反戦ビラ
鋭いアピール！

電車が止る
ゴーストップが崩れる
ジープがころがりこむ
消防自動車のサイレンがはためき
二台、三台、武装警官隊のトラックがのりつける
私服警官の堵列するなかを
外国の高級車が侵入し
デパートの出入口は
けわしい検問所とかわる

だがやっぱりビラが落ちる

ゆっくりと　ゆっくりと
庇にかかったビラは箒をもった手が現れて
丁寧にはき落し
一枚一枚　生きもののように
声のない叫びのように
ひらり　ひらりと　まいおちる
鳩を放ち鐘を鳴らして
市長が平和メッセージを風に流した平和祭は
線香花火のように踏み消され
講演会　音楽会　ユネスコ集会
すべての集りが禁止され
武装と私服の警官に占領されたヒロシマ

ロケット砲の爆煙が
映画館のスクリーンから立ちのぼり
裏町から
子供もまじえた原爆反対署名の呼び声が
反射する
一九五〇年八月六日の広島の空を
市民の不安に光を撒き
墓地の沈黙に影を映しながら
平和を愛するあなたの方へ
平和をねがうわたしの方へ

警官をかけよらせながら
ビラは降る
ビラはふる

朗読の末尾から、ビラがゆっくりとまいおちる
警察車のサイレン、エンジンの音。警官隊の足音等。
スローガンは消え、若者たちは旗をしまって悠々とひきあげる。

3、〈ひろしまの空〉

その日の陽暮れどきから夜。川岸。
灯篭流しがはじまっている。
かすかなざわめき。時々風にのって読経の声が流れてくる。
峠、春子、吉本、岩井が、部屋の中で今しがた弾圧にそなえての書類整理を終ったところ。

春子　さ、これでひと安心ね。ご苦労さまでした。
あ、あなた。お薬の時間ですよ。

峠　（火鉢でメモの残りなどを焼き捨てながら）うん。（吉本と岩井に）じゃ、それ頼んだよ。

吉本　（岩井と、書類を風呂敷に分けながら）はい。峠さん、薬だけはちゃんと飲んだほうがいいですよ。熱は？

峠　大丈夫。なかった。

春子　（薬と水を運んできて）ほんとにちゃんと測ったんですか？さ、お薬。

峠　うん。

春子　駄目ですよ。今のまなきゃ。また、ああ忘れとったになるんだから。はい。
（峠に薬をのませてやる）ほんとにしょうのない。子供より始末が悪いんですからねえ。今日だって暑いひなかを外に出て歩いたらいけんいうてあれだけ先生にきつう言われとったのに。もっともそれに負けてしまう私が一番いけんのかもしれんけどね。
（吉本や岩井に）この人いうたら、朝から泣きそうな顔で私をにらみっぱなしじゃったよ。つい甘い顔したのが大間違い。表へ出たらもう大威張りでね。おい、急げ急げいうてトコトコ走りだすんだから。

峠　おい、そりゃちがうぞ。この人はね。
福屋前に近づいたら、早う早ういうてわし

の手をひっぱるんじゃ。わしゃもうフウフウ言うてしもうて。

岩井 まあ、どっちがほんまかしらん(笑う)

春子 でも、ほんとによかったわね。あれだけのことやりながら、一人の犠牲者もださずにすんだなんて。

吉本 (岩井とうなづきながら)ほんと。胸がスーッとした。

峠 あれがほんとの広島の姿だよね。だけど油断は禁物じゃ。明日の朝くらいが一番危いと増田君もいうとったじゃろ。

吉本と岩井、うなづいて立上ろうとする。春子薬ぼんを片づけにいく。市河がやってくる。

市河 今晩は。あら、あんたたちずっとここじゃったん?

岩井 うん。八・六大会にひっかけて、ここも弾圧がくるかもしれんいうんでね、書類焼いたり、大切なものは、ほら(風呂敷包みを示して)疎開、疎開よ。

市河 ごめんね。うち、手伝えんで。

吉本 イッちゃんはいいのよ。お店があったんじゃもの。凄かったよ。今日の大会。

岩井 なん回思いだしても胸がドキドキするようね。うちは平和公園じゃばっかり思うとったん。そしたら、公園のまわりはずらーっとポリさんが囲んどるでしょ。どうしたらええんか思いよったら、誰かが耳もとで福屋前、福屋前いうてささやくじゃない。あ、そうか、思うて。

吉本 あたしは金座街を歩きよったんよ。急に福屋、福屋って声が伝わってきて、それまで買物客みたいな顔してブラブラ歩きよった人たちがいきなり走りだしたの。あたしも夢中でついていったんよ。

岩井 福屋の前はもう人でいっぱいようね。そしたら、ビラが空からサアーッとふってきて、警官隊がドタドターッと屋上へかけのぼっていったん。ほしたら下で集会よ。戦争反対!原子兵器禁止!外国帝国主義は、朝鮮から手を引け!警官隊があわてて降りてきたときは、もうさっと解散。ゲリラ作戦よ。大成功じゃった。

吉本 あの、ビラが、ひらひら舞いおりてきたときは、なんともいえん気持じゃったね。

市河 ほんとね。うちの隣におったお婆さんなんか、道におちとったビラをそっとひろうて、一所懸命汚れをふいとってん。うちそれみたら胸が熱うなって。

岩井 まあ!あんたも福屋へいっとったん?

市河 うん。

岩井 意地悪!散々人にしゃべらせといて。

吉本 そうじゃったん。でも、よくお店ぬけだせたね。

岩井 オッス。イッちゃん!握手!握手!

(大騒ぎ)

峠 おいおい。君たち、あんまり派手にやるなよ。

岩井 そうじゃ。これ早う疎開しとかにゃ。

(吉本と戸口へ)峠さん、今夜はね、ゆかたきて、家の人と灯籠流しするんよ。

春子 まあ、いいわね。そうよね。今夜くらいゆっくりしなきゃ。うちも、おそうめんでもつくりましょうか。

峠 うん。それから、西瓜もね。

春子 見田さんもみえることだし、うんと御馳走しましょうね、イッちゃん。

岩井 ギョッ!いかれた。いこう、吉本さん

吉本 うん、じゃ、ごくろうさま。

「ごくろうさま」「ごくろうさん」と言いあって、岩井と吉本戸外へ。

峠 気をつけてね。街なかはまだ検問をはってるだろうから。

岩井 まかしといて!あ、もうはじまっとるよ。灯籠流し。急ごう。

二人去る。春子、峠の着物をだしてくる。

峠 ああ、賑やかじゃった。だけど無理ないよね。あの興奮は当分おさまるもんじゃない。なにしろ、五年前に原子爆弾が落された広島の空に今日は原子兵器の禁止を訴えるストックホルムアピールが降ったんだもんね。

市河 ええ。

春子 あなた、もう着かえて、すこしお休みになったら。

峠 うん。そうするか。

春子 イッちゃん、ちょっといらっしゃい。

市河 はい。

春子と市河、台所から奥へ。峠、いったん着物に手をかけるが。

峠 そうだ。灯籠つくるんじゃった。色紙と、糊と。板ぎれがどっかにあったが、(独り言をいいながら台所の方をゴソゴソしている)あった、あった、これこれ。

板ぎれ、道具などをもちだし、鼻歌まじりに器用に灯籠をつくりはじめる。増田がやってくる。

増田 峠さん。

峠 お。

増田 見田君、ここへ来んかったでしょうね。

峠 まだじゃけど。イッちゃんもきて待っとるんじゃ。(顔をあげて)どうかしたの?

増田 ちょっと。

増田、峠を外へ誘いだしなにごとか話している。春子と市河がでてくる。市河はゆかたに着かえている。

春子 あなた。あら、どこへいったのかしら、休んでるとばかり思っていたら、もうこれなんですからね。イッちゃん、よく似合うわよ。

市河 (黙ってはにかむ)いつか、はじめてここへお邪魔した晩、奥さん着物きてらしたでしょう。きれいじゃった。あんまりきれいで、うち、ろくにものもよう言わんかったの覚えとる。

春子 ああ、見田さんと大木さんがやりあった晩ね。あたしが大木さんのモデルになって。(笑って)近頃じゃ、もうあんな気分になることもないわ。

市河 でも、奥さんはいいですね。峠さんのような人が旦那さんで。

春子 あの人はね、外面がいいのよ。なかみは案外古くさくてね。すごく封建的なんだから。いろいろとうるさいのよ、二人だけになると。

峠、増田と別れてもどってくる。増田「じゃ、頼みますよ」と言いおいて急いで去る。

春子 増田さん?

峠 ああ、あとでまたくるそうだ。あれ?イッちゃん。あでやかじゃねえ。ほれぼれするぞ。

市河　いやじゃ。峠さん。

春子　それ、よかったら、持っててもいいのよ。

市河　でも。

峠　もろうとけ、もろうとけ。この人はね。なんだかだといっては、自分の身のまわりのものを人におしつけては喜んどるのが趣味なんじゃから。

春子　ま、趣味だなんて。ねえ。

峠　春子、見田くんの、例のもの、そろえてあるだろうね。

春子　ええ。ちゃんとしてありますよ。どうして？

峠　いや。（灯籠づくりにまたかかりながら）見田くんねえ。もう、ここえくるのは無理だろう。逮捕状がでたそうだ。

春子　見田さんに。

峠　見田君だけじゃない。二十名の同志に。地区委員会も、民青の事務所も、各同志の自宅、いっせいに家宅捜査をうけたそうじゃ。増田くん、それを知らせにきてくれたんだ

（短い間）

イッちゃん。見田君たちはね。八・六に向けて朝鮮戦争の真相を訴えたビラをまいたんだ。それを理由にしてやられたんだよ。占領政策違反という名目で。弾圧がはげしくなり、凶暴化するにつれて、敵の正体がはっきりしてくる。でもね、そのぶん、こちら側のたたかいかたも進んでいくんだね。見田くんたちがまいた、アメリカの朝鮮侵略の事実を明らかにしたビラ。今日の大会。みなそうだよね。平和と名のつく集会がみんな禁止され、広島市の周囲が三千三百人の警官でかためられたとき鐘を打ち鳴らしたり鳩を空に放したりするだけの、お祈りと記念の行事だけじゃ、ほんものの平和はかちとれないということが、広島の人間にはようやくわかってきたんだ。広島は、やっと五年目に、ここまでたどりついたんだね。長い、つばぜりあいのたたかいが、いまはじまったんだ。

市河　峠さん、あたし、大丈夫です。ほんとに大丈夫なんです。こんな風になるんじゃないかという気はしとったんです。

峠　そうかい。

市河　あたし、峠さんに、かくしていることがあるんです。

峠　かくして？

市河　あたしね。……あれ、峠さんが喀血で倒れた六月の晩じゃった。見田さんの家に泊ったんです。峠さんの看病じゃいうて、おじさんに電話して。

峠　ほう。悪いやつじゃ。死ぬ思いしとったわしをだしにして。

市河　すみません。あの晩、見田さんいうたら、急にこわい顔して、おい、今日は家へ泊れ、おふくろにも紹介する、いいだして。

春子　それで、見田さん、イッちゃんのこと、お母さんになんといって紹介したの？

市河　（はじめて笑顔をみせて）おれの、彼女じゃ、いうて。

峠　そうか。そうじゃったんか。なんじゃもうそんなとこまでいっとったんか。それならなにもこっちがやきもきすることなかったんじゃ。ああ、馬鹿らしい損したぞ散々気をもんで。

市河　ほんとにすみません。ほいじゃから、心配ないんです。うちら。

峠　よし、よし。それなら安心じゃ。あんたらちいと涼んでこいや、折角ゆかた着たんじゃ。そのうち増田くんがまた様子知らせにきてくれる。

春子　そうしましょうか？

市河　ええ。

峠　待っとれや。これももうすぐ完成じゃ。

春子と市河、川べりの方へ。峠、灯籠をつくりつづける。

春子　イッちゃん、見田さんのお母さんて、どんな人じゃった。

市河　とっても優しそうな、いい人。見田さんじゃってお母さんに似て、ほんとうは優しい人なんよね。当り前すぎるくらい当り前の人なんよ。それが自分でもようわかっとったんよ。ほいじゃから、わざわざお母さんとことびだして、あんなガムシャラに活動して。見田さん、「われらの詩」においても、ひとつも詩を書かなんだでしょう。あれも、ほんとうは、詩をかくのがこわかったんじゃ思うん。なかなか自分をさらけだせん臆病なところがあって、気持ばっかり優しうて。もっとも優しさいうたら、峠さんも同じですよね。うち、サークルに入った頃、よう思いよったんです。こんとに優しげな顔した人らが、なんであんなこわいことするんじゃろうかと。

春子　まあ。（笑う）なんだか、凶悪犯の集りみたいだわ。

市河　（笑って）ほいでも、はじめのうちは、うち、ほんとにそう思いよったんじゃもん。（頬をおさえて）変じゃね、今日のうち、こんとにペラペラしゃべって。はじめてよ。

春子　いいじゃないの。今夜はうんとおしゃべりしましょうよ。おじさんとこには、峠に電話してもらって、泊っていったらいいわ。

市河　ええ。

峠、できあがった灯籠をかかえて川べりにやってくる。

峠　さあ、できたぞ。イッちゃんの灯籠が。

市河　峠さん、……（不意に泪ぐんで春子の胸に顔を埋める）

峠　どうした？（市河をのぞきこんで）なんじゃ、変な顔して、流そうじゃないか。わしらのはしめっぽい精霊流しなんかじゃない。海を渡って世界中にひろしまの灯を運ぶ平和の灯籠じゃ。（川べりに立つ）おー。きれいじゃねえ。上流の方からずっと灯が続いてきよる。

灯籠を流す。峠の家の裏口から見田があらわれる。増田がやってくる。

増田　あ、灯籠流しですか。

峠　（小声で）どうじゃった？

増田　まだ、どこにも連絡がないんです。打てるだけの手はうってあるんじゃが。

峠　とにかく、中に入ろう。ここじゃなんだから。

峠、増田、部屋の方へ。春子と市河もつづく。

増田　見田！こんなとこにきちゃいかん。おまえ、逮捕状が

見田　知ってます。イッちゃん！

峠　君たち、ここで話したまえ。ぼくたち外で見張っとく。奴さんたちきたらすぐ知らせるから。春子、あれ、だして。

春子　はい。

峠と増田、外へ。春子、鞄や背広など

だしてくる。

春子　お約束の鞄。のびのびになったいうてくやんでましたよ。今夜おわたししようと思って待っていたの。この背広、少し古いけど、身体には合うから。ここに、少しばかりだけど、お金も入ってますからね。

見田　なにからなにまで、すみません。

春子　イッちゃん、きせてあげてね。靴はこへだしときますよ。

春子台所の方へ消える。

見田　きれいじゃ。今夜のイッちゃん。……イッちゃん、おれな、こうならんでも、どっちみちもぐることになっとったんじゃ。今晩で、当分お別れじゃ思うとったんじゃ。ほいじゃから、同じことなんじゃ、同じことなんじゃ。

市河　わかっとる。

見田　俺な、今までのおれ、いけんかった思う。ひとのいうことひとつも聞かんで。原爆でイッちゃんどれだけ苦しめられたかも考えずに、自分の思うたことばっかりおしつけて。ほいじゃが、こないだの晩のこと、本気なんじゃ。ほんとは、ずっと前から、イッちゃんのこと、きめてしまいたかったんじゃ。ほいじゃが、いつ帰ってこれるんか、いつ大手をふって歩けるようになるんか、自分でもわからん。もしかしたら、ずっと、待ってもらわにゃいけんことになるかもしれんし。

市河　待つ。きっと待つ。

見田　ありがとう。勇気がでるよ。（抱きよせる）

市河　あの晩、話したでしょ。うちには原爆の詩はとても書けん、うち、ほんとは、原爆やなんかもう一べん落ちてみりゃええのにとずっと思うとった、そしたら、うちみたいな孤児が、またいっぱいふえて、みんな貧乏になってと、そんなふうにばっかり考えてきた。――うちがこう言うたら、見田さん、いうてくれたよね。それを、そのまま書いてみたらどうか、峠さんもいっつも言うとってのように、まず自分の思うたとおりを書いてみい。そしたら、書いとるうちに、きっと自分の考えが変っていく筈じゃ、いうて。見田さん、うち、書いてみたんよ。あの日のことを、はじめて詩に。

見田　そうか。わしも、こんどこそ、きっとひまをみつけて、

峠がもどってくる。

峠　君、変なのがウロウロしとる。春子、春子。

またでていく。見田、市河に手伝ってもらって大急ぎで着がえる。市河、ネクタイをしめてやろうとするがうまくいかない。春子がでてきて、てきぱきと着せてやる。峠がまたもどってくる。増田ももどってくる。

増田　急いで。やっぱり張りこまれとる。わしが案内するから、ついてくるんだ。いいな。

見田　はい。（峠へ）あとのこと、頼みます。

増田に導かれて見田とびだしていく。増田のセリフの途中から、奥へノートをとりに入っていた市河が走りだしてくる。

市河　見田さん。

ノートをもったまま、立ちつくす市河。

間

春子　こんなことって、こんなことって、残酷だわ。（泪ぐむ）

峠　春子！駄目じゃないか、あんたがそういうことじゃ。

春子　ごめんなさい。

峠　（部屋の中をぐるぐると歩きまわりながら）なに、増田くんが、きっとうまくやってくれる。つかまるもんか。つかまるもんかい。くそっ。くそっ。

市河　峠さん。（ノートをさしだす。ぼんやりと）これ、読んでみて下さる？書いてみたんです。

峠　（手にしたノートをひらいて）「ひろしまの空」……あの日の詩だね。イッちゃん、やっと書いてくれたんだね。八・六大会にまにあわせて、見田くんに読んでもらおうと思っていたんだろうに。

夜　野宿して
やっと避難先にたどりついたら
お父ちゃんだけしかいなかった
お母ちゃんとユウちゃんが死んだよお…

八月の太陽は
前を流れる八幡河に反射して
父とわたしの泣く声を　さえぎった
その　あくる日
父は　からの菓子箱をさげ
わたしは　鍬をかついで
ヒロシマの焼け跡へ
とぼとぼと　あるいていった

やっとたどりついたヒロシマは
死人を焼く匂いにみちていた
それはサンマを焼くにおい
燃えさしの鉄橋を
よたよた渡るお父ちゃんとわたし
昨日よりも沢山の死骸
真夏の熱気にさらされ
体がぼうちょうして
はみだす　内臓
渦巻く蝿
かすかな音をたてながら
どすぐろい　きいろい汁が
鼻から　口から　耳から
目から　とけて流れる

ああ　あそこに土蔵の石垣がみえる
なつかしい　わたしの家の跡
井戸の中に　燃えかけの木片が
浮いていた

台所のあとに
お釜がころがり
六日の朝たべた
カボチャの代用食がこげついていた
茶碗のかけらがちらばっている
瓦の中へ　鍬をうちこむと
はねかえる
お父ちゃんは瓦のうえにしゃがむと
手でそれを　のけはじめた
ぐったりとした　お父ちゃんは
かぼそい声で指さした
わたしは鍬をなげすてて
そこを掘る
陽にさらされて　熱くなった瓦
だまって
一心に掘りかえす父とわたし

ああ
お母ちゃんの骨だ
ああ　ぎゅっとにぎりしめると

くれなかった。いったん嫁いだ家を捨てて他の男に走るような女に、とても子供の養育は任せておけんいうてね。僕の生活力も見すかしたような口ぶりじゃったよ。

大木　うむ。しかし、ええじゃないか。あんたには「われらの詩の会」という子供がいっぱいとりかこんでくれとる。わしなんぞ、よるべき組織というてはどこにもないんじゃからの。仕事の面では、わしなんか文字どおりの孤立無援じゃ。ま、それも昔から唯我独尊がわしの主義じゃから、当然といえば当然じゃ。（笑う。が、すぐに峠をじっとみて）しかし、あんたもようやったな。

峠　なにを言う。大木君らしうもない。

大木　いや、わしはあんたの仕事を評価するよ。「原爆詩集」「原子雲の下より」の編集の仕事、みんなあんたでないとできん仕事じゃったよ。

峠　ありゃぼく一人の仕事じゃない。広島の人間の、被爆者全体の仕事だ。

大木　そういう言い方、わしはあんまり好きじゃないな。謙譲の美徳いうが、あんたのはいつもへりくだりすぎだ。わしゃ時々、この男実は傲慢なやつじゃないかと思うことがあるぞ。ま、よかろう。わしゃあんたと議論はせんことにきめたんじゃ。ただなあんたはもう広島への義理は十分に果したと思う。

峠　義理？

大木　ふむ。あんた流にいえば、責任、ということになるか。いやな言葉じゃ。そんなことどっちでもええ。要するに、ぼちぼちこんどはわしらの出番じゃ。勿論あんたとは方法はちがうがの。あんたはええ。もう十分じゃ。あんたは、ここらでもう一度思いきり自由にテーマをひろげてみたらどうなんじゃ。いつまでも原爆の幽霊にとりつかれとるのは、身体のためにも心のためにもようない。

峠　原爆の幽霊にか……。たしかに、それだけじゃ駄目なんだ。八月六日の、あの瞬間を、受身にとらえているだけじゃ、原爆をうたったことにはならん。このまえも、「原爆詩集」の合評会でね、いろんな批判がだされたよ。原爆は広島に落されたんじゃない。日本人全体に、人類にむかって投下されたんだ。――その視点が抜けている。あの時何故原爆が広島長崎に投下されたのか。――その世界的な政治状況が把握されていない。……いちいち胸におもる意見なんだ。中野重治さんはねえぼくにもっと惨酷な人間になれというんだ。「歌のわかれ」、あの張りつめた反撥精神のかけらもないんだよねえ、ぼくの作品には。甘いんだ。自分をつきはなせないんだよ。

大木　わかったよ。それを言うとまた議論になる。ま、春までにはわしも帰ってこれるじゃろう。その頃はあんたも退院しとるじゃろ、問題はそれからじゃ。それにしても、春子夫人にこんど会えんかったのは残念じゃが。

峠　大木君。

大木　うん？

峠　その春子のことだけどね。よろしく頼むよ。ぼくにもしものことがあったらね。

大木　あんた……そんな気で手術をうけるつもりか。いかん、そりゃいかん。死にいそいじゃ（自分でハッとして口をつぐむ）

峠　そうじゃない。そうじゃないからこそ手術をうけるんじゃないか。ただね、春子は自分のすべてをぼくに預けて生きている女なんだ。自分ってものがないんだ、ほんとの意味でのね。ぼくがいなくなったら、ガラガラと崩れてしまいそうな気がするんだよ。今日もそのことでけんかになってしもうたんじゃ。あの人がうちに集まる若い人たちの面倒をみるのは、一緒につながった仲間だからというんじゃないんだよ。

「原爆詩集」が出版できたのも、春子がすすめてくれたからなんじゃが、あの人はいつもぼくの作品、峠三吉の仕事を世間に押しだすことが中心なんじゃ。名誉や見栄にとらわれているんだよ。それを言いたかったんじゃが、あの人は全然理解せん。それだけぼくが、あの人に犠牲ばかり強いてきたということになるんじゃろうけどねえ。お金のことにしろ病気のことにしろ。だから気になるんだよ。心配なんじゃ。

大木　わかった。幸わせな奴じゃ、あんたは。じゃ行くぞ。

（峠、起き上って戸口まで出る。）

峠　大木君、君は何のために絵をかいとるんじゃ。

大木　なんじゃい、やぶから棒に。

峠　いやね。正直いうて、絵は天職だと信じこんでいる君が羨しくなる。少々不思議でもあるよ。ぼくは近頃、詩はいつでも捨てられる、そんな気持になってきとるんじゃ。ぼくの詩など、しょせんとるに足りない、そういうぼくの詩でもみんなが必要とするなら、その時だけはペンをとる。だけど、その前に健康をとり戻して、人並みに労働できる、身体になりたいよ。そのために手術を決心したんだよ。

大木　気持は分らんでもないが、詩人としては一歩後退じゃな。思いつめるなよ。峠君滅びるのをいそいじゃいかんぞ。

峠　あんた、わしのことを誤解しとるようじゃ。ぼくはそんなロマンチストじゃないよ。

大木　（笑って）なかなか理解しあえんな、わしたちは。

大木、外に出る。

大木　お、風が巻いとる。春は遠いぞ。

大木去る。峠、机に向う。戸口から市河が顔をのぞかせる。

市河　峠さん。

峠　（顔をあげて）……市河君。

市河　市河君だなんて、おかしいわ。奥さんは？

峠　出かけとる。じき戻るよ。

市河　いいかしら、あがっても。

峠　どうぞ。

市河、部屋に入る。

市河　ナイフ借りるわね。

峠　うん、そこの

市河　わかります。この部屋、もっとも変ってないもの。

持ってきたリンゴをむきはじめる。

市河　峠さん、また具合が悪いんですってね。帰ってきて聞いたわ。

峠　帰ってきて？

市河　京都へ行ってたの、一年ばかり。またすぐ帰らにゃいけんけど。

峠　京都で、なにをしとるの？

市河　あたしだって生活があるでしょ。

峠　あれから、何度も叔父さんとこに訪ねていったけど、会わせてもらえんかったよ。うちにも毎日のように警察がきてえらい迷惑しとる。あの子をひきずりこんだのはあんたじゃろういうて。君も、警察に呼

びだされたんじゃそうなね。

市河　はい、どうぞ。（リンゴをだす）峠さんも、早くからだ直して、いい詩をどんどん書いて、お金もうけのことも考えなきゃ。奥さんだって楽させてあげられないでしょ。ほんとは、もっともっと有名になれるのに、無理しすぎるのよ。どうしたの？リンゴ、赤くなってしまうわ。（峠の額に手をあてて）熱はないわねえ。あたし、米軍にも呼びだされたのよ。CICいうところ。

峠　そうか。

市河　アメリカ人って、人を馬鹿にしてるのね。何も連絡ありませんかって聞くからはいと答えると、では結構ですってすぐ帰してくれるの。そしてすぐまた呼びだしがくるのよ。何度も何度も同じことのくりかえし。そしてね、あんたのようなきれいな人が、どうしてあんなアカい男を好きになったんかいうて、ニヤニヤ笑うとるの。

峠　……

市河　リンゴ、食べてもらえんの？（フォークにさして峠に手渡す）峠さん、あたし、結婚することになったの。その話でこっちへ帰ってきたのよ。いっしょに働いている人なの、むこうで。ちょっと年はいってる人だけど、あたしだってもう二十四でしょう。いつまでも一人でいるわけにもいかないし。地道一方でパッとしたとこはないけど、でもいい人だと思うの、あたしが、親もいないし被爆者だってことも知った上で、是非といって下さるの。広島じゃそんなことあまり問題にならないけど、うるさいのよ、よそへでると。そんな人、やっぱりめったに居ないと思うの。そうでしょ、峠さん。

峠　うむ。

市河　あれから、一年ぐらいは辛棒したのよ、あたし、でも、家の中に閉じこめられっぱなしでしょ。もう峠さんたちに会うても、まともに顔をみれんような気になってしもうたんよ。それに、いつまでもおじさんの家の厄介者になってるわけにもいかんでしょ。自分から働きに出たいいうて言いだしたんよ。広島じゃいけんいうことになって、京都の呉服問屋さんみつけてもろうて。うちも広島離れてしまいたかったし。で、その人と知りあって。……聞きたくないのね、峠さん。

峠　……

市河　ほんとは、あたしのこと、軽べつしてるくせに。昔からそうじゃた。峠さんあたしの方からなに言いだしても黙って聞いてるだけで。なんにも言って下さらなくて、あたし、そんな峠さん、嫌いです。

峠　見田君のこと、いえばいいのかい。

市河　……

峠　ぼくになにか言えいうても、君にはこの三年間が長すぎた。君がそう思うとるかぎりは。

市河　（泣き伏す）

春子が帰ってくる。

春子　ただいま。（上ってきて）イッちゃん。

市河　おじゃまして。あたし、失礼します。

春子　いいじゃありませんか。久しぶりなのに。

市河　峠さんのこと大変でしょうけど……奥さんだけが峠さんの支えなんですから、おじゃましました。

（市河帰っていく。）

春子　あなた、起きてらしていいんですか。

峠　ああ。

春子　（火鉢をのぞき）火がなくなりかけて

るじゃありませんか。（炭をとりに行きながら）イッちゃん、なんだかずいぶん変ったみたい。どんな御用事だったんですか。泣いてたみたいだけど。

峠　うん。いろいろとね。

春子　そう。

春子、火を起す。

春子　実がね、入院したの。

峠　実が？

春子　精密検査うけたらね、原爆症の疑いがあるからすぐ入院しろって。

峠　だって、実は、原爆に会うちゃおらんじゃないか。

春子　あたしのお乳は、のんでるじゃありませんか。

峠　乳を？だからというんか。そんな馬鹿な！

春子　あたしだって信じられない。そんなことがと思いたいわ。でも、こないだも、広大の文学サークルの、あの学生さん。原爆に会うたいうてもかすり傷ひとつ負うじゃなし、高校じゃ野球の選手しとったいう人が……。原子爆弾は悪魔よ。見えないところから人の身体に入りこんできて、忘れかけた頃に爪をたてる。あたしの身体も、もしかしたらあなたの身体も。ねえあなた、手術はやめて下さい。

峠　それは大丈夫だよ。ちゃんと専門のお医者さんがついてやってくれるんじゃから。

春子　だって、肺葉摘出の手術いうて、危険率が高いと聞いたわ。それでなくてもあなたの身体は散々痛めつけられている。無理です。どう考えても、そんな何時間もの大手術にあなたが。

峠　春子、落着いてくれよ。

春子　さっきはあたしが悪かったわ。もう逆らったりしないから。ちゃんと言うとおりにするから。お願い。今までどおり、あたしの傍で療養しながら沢山詩を書いて。あなたが静かにここに居て下さるだけであたしはいいの。どんなことしてでも働いて、あなたのことはあたしが守るから。

峠　ぼくはね。春子。その生活からぬけだしたいんだよ。ロじゃ革命とか変革とかいいながら、実際には君にもたれっぱなしの生活からね。このままじゃぼくだけじゃない。君まで駄目にしてしまう。手術に成功すればもう喀血の心配はなくなるんだ。自分の食い扶持ぐらいはなんとかできる身体になれるんだよ。君のためというんじゃない。ぼく自身に必要なことなんだ。そうせんと、もうぼくの詩も変らないところにきとるんだよ。それにこう倒れてばかりいたんじゃ仲間のみんなにも迷惑のかけ通しだ。カンパだ、輸血隊だいうて。

春子　それがいやなの。あたしは。たまらないんです。そりゃみなさんよくしてくれてじゃけど、カンパが集まるたびに、輸血隊の血があなたの身体に入っていくたびに、あなたは、ぼくの身体はもう自分一人のものじゃなくなったとおっしゃるじゃありませんか。そのたびにあなたはあたしから遠ざかっていく。あなたはその重荷を背負いこんで、無理な活動重ねて、自分の身体を切り刻んで。こんどの手術だってもともとそれが……。あたしもういやです。輸血隊もカンパも、みんないやです。

峠　春子。

増田と吉本、岩井がくる。

増田　峠さん、おそうなってしもうて。

峰　おお、待っとった。

増田　入院許可、おりたそうじゃね。

峰　うん、明日の朝じゃ。

増田　あとのことは心配せずにな。われらの詩もなんとかやっていくから。それに、こんどのあんたの手術は全国の人が見守っとる。みてみんさい、このカンパ帳。北海道からも九州からも。

カンパ帳とカンパ袋をとりだす。春子部屋を立つ。

峰　じゃ、ひきつぎをやっとこうか。岩井君、そこの、うん、それとってくれないか。

ノート、帳簿、原稿などを増田にわたす。

峰　借金はね、印刷屋に五千五百円、紙代が四千円。個人的な借入が八千円。内訳はここにある。これが集まっとる原稿。ぼくのはちょっと待ってくれよ。

増田　ええ。そいじゃ帳簿の方は、岩井君、あんたが適任じゃの、当分やってくれえや。

岩井　あの、増田さん、あたし。

増田　うん？

岩井　峰さん、これを。（毛糸のマフラーをとりだす）もっとましなものをと思うたんじゃけど、いまのうちにはこれぐらいのことしかできんもんじゃけ。

峰　ありがとう。ほいじゃが何やら気味が悪いの、あんたにそうあらたまれると。

岩井　それから……これ。（封筒をだす）

峰　（開いて）脱会届。われらの詩をやめるいうの？

岩井　（うなずく）

吉本　岩井さん、あんたどうして急にそうなこと。どうしたの。なんかあったんでしょう。

岩井　退職勧告されたん、会社で。

吉本　いつ？

岩井　二週間くらいまえ。

吉本　どうして今まで黙っとったん。

岩井　いうても仕方のないことじゃもん。みんなに心配かけるだけで。

吉本　ほいでも、こんなことで負けちゃ駄目じゃないね。

岩井　ほんとはもうとうにレッドパージの名簿にのっとったらしいん。課長が親戚なもんじゃけおさえてくれたんじゃそうなけど、今のような活動と縁をきらんかぎりもうおさえようがないけ、今のうちに退職するか、どっちかにせえいわれて。

増田　それで、われらの詩やめたら、パージにならんいう保証でもあるんかい。

岩井　うち、どしても家にお金入れんといけんでしょ。母ちゃん、原爆でよう動けんし、妹らまだ学校じゃし。兄ちゃんが戦死せんかったら……。吉本さんみたいな仕事なら、まだ何とかなるじゃろうけど、うちらみたいなもんいっぺんパージいうことになったら、なかなかどこにも。何にもいわんと、お願いします。

岩井逃げるように去ってしまう。

峰　また一人、仲間を失うてしもうた。

吉本　また？

峰　さっき、イッちゃんがきてね。

吉本　イッちゃんが？

峰　結婚するそうじゃ、京都の人と。彼女今京都で働いとるそうだが、そこのお店の人と。

増田　峰さん。こりゃ退院してからにしょう

かと迷うたんじゃが、いずれわかることじゃし。イッちゃんがそういうことになったんなら……。見田君がねえ。

峰　つかまったんか？

増田　死んだんです。福岡のアジトで。警察からお母さんのところへ連絡があって、こっちにもはじめてわかった。病気で動けんようになったまま、党へも連絡とれずに。そのまま。

峰　……

吉本　（嗚咽をおさえて）見田さん、一本気すぎたんよ。

増田　あいつ、非合法面のレポーターをつとめとったらしい。そいじゃから、一日何回かの街頭連絡だけが命の綱じゃったんじゃ。しかしのう、なんぼ非合法の組織においたいうてももうちいとわしらの力がどうにかなっとったら。それにねえ、ともかく単独講和が成立したことで、占領関係の法令は近いうち効力が失くなるらしいんだよ。

峰　じゃ、もう間もなく見田君も大手をふって歩けるようになってたかも……。

戸口に鈴木凱太が立っている。

春子　鈴木さんじゃないですか。まあ、すっかり濡れて。

春子、タオルをもっていく。凱太濡れた首すじや頭をぬぐう。ひと廻り小さく老いこんでいる。

春子　冷たかったでしょう。さ、早くこっち（来て当って。

凱太　みなさん、おまめで。

春子　おばさん、どうしとってです。

凱太　家内は死にやんした。

春子　え？

凱太　去年の暮に、ぽっくりいきやんしてのう。

春子　あの元気なおばさんが。

凱太　わしが業いらせたですけんの。目屋いにでも出るようになったちうて安心しとりゃしたが。

増田　おじさん、失対に？そうですか、僕も今は党の仕事しながら失対に出とるんですよ。

凱太　ほう、あなたが目屋いに？あなたァたしか広船じゃなかったですかいの。

増田　くびになったんですよ。

凱太　ほうでしたか。

増田　それで現場はどこですか。

凱太　今、打越の班での。三猿小学校の横でドブさらえですわい。わしらあ、はあ、なーんも使い道はありゃしまへん。ほいで…これ。（腹巻から紙袋とカンパ帳をとりだす）峰さん、あなたが入院されるもうこたひとつも知らなんで。今日組合からカンパ帳がわしらの班にもまわってきての、はじめて知ったようなこっで。こがいな銭は何にもならんかもしれんが。

峰　おじさん。

凱太　わしもまえみたいにまめたらの、まだまだ集めてくるんじゃが。こがいなからだじゃ毎日どぶん中はいつくばるんがやっとこせで。

増田　おじさん、どっか悪いんじゃないですか？

凱太　いや、悪いいうても目が舞うくらいで。年ひろやあみな弱りますけんの。

峰　目が舞う。そりゃもしかしたら。診てもらうたことあるんですか？

凱太　こないだジープが来てABCCに連れていかれたが、あがいなとこにやもう行か

ん。よけえ血とられて目の前がまっくろうなるだけじゃ。ピカのガス吸うたくらいで病人扱いされちゃかないまへんわい。焼酎のんで消毒しとりゃ世話あない。

増田 そりゃしかし。

凱太 ほいじゃおじゃましました。峠さん、こりゃまちいと集めますけ、また持ってきます。（カンパ帳を腹巻にしまう）

春子 あ、おじさん、ちょっと待って。

酒びんをとりだしコップにつぐ。

春子 お茶がわりに

凱太 ありゃ、こりゃ思わん御馳走さんで。（一息にのむ）

春子 もう一杯。

凱太 いやもう……そうですかい。（のんでため息をつく）奥さん、家内が死ぬおりにの、もういっぺんこの川岸にもどりたいちうて。

春子 せきさんが。（凱太が立ちあがりかけてよろめく）あ、危い。

凱太 いや、世話あないでさ。あん頃はみんな貧乏で、みんなボロたらしとったが、この頃は立派な家がどんどん建ってのう、ピカに会うたもんは隅の方へおしこまれるばっかりじゃ（まためまいがしてよろめく）

春子 大丈夫ですか。

凱太 （突然手をついて）峠さん、いつぞやは悪態ついてすまんことしました。この通り、勘弁してやってつかあさい。

春子 鈴木さん、もうそんなこと。

凱太 わしゃつまらん人間での。いっぱいのまにゃ、なあんもよう言わんけ。去年の夏もの、わしゃ平和公園で、峠さんを見かけたことがあるんじゃ。あんとき峠さんは、汗びっしゃんこかいて、原爆被害者の会受付もう貼り紙の前で声からして呼びかけよりんさった。わしゃあれみて、道のほとりで手を会わせましたぞい。じゃが、なあんもええ言わなんだ。峠さん。わしらあ、峠さんたちがなにをしょりんさるか、ようわかっとりますぞ。みんなようわかっとる。こないだもの、銭湯の中で、誰ぞが聞こえよがしに言うんでがす。広島の人間も、いつまでもピカじゃピカじゃ言うとったら、このせわしい世の中に、舟に乗りおくれてしまうぞちうて。わしゃあれ聞いたときにゃ、情けないやら、腹が立つやら。あがいなこたあピカに会うたもんの言うこっじゃない。ピカのことあピカにおうたもん同志でないとわかりゃせん。峠さんらは、ピカの体験談も集めて歩きよってじゃそうなが、早うようなっての、いっぺんわしらの現場にも来てやってつかあさいや。ほいで、わしらの話も聞いてつかあさい。腹ん中にたまっとるものはの、みんななんぼでもある。なんぼでもある。

峠 きっとね、退院したらきっと行きますよ。ありがとう、おじさん。おかげでぼくも元気がでますよ。ほんとうにありがとう。

春子 おじさん、気をつけて。せきさんのお墓どこですか。いちどおまいりを。

凱太 三滝の先覚寺いうお寺さんで。そりゃせきも喜びます。奥さんにゃあれだけ親しうしてもろうて。ほいじゃ。

吉本 あたし、そこまで送っていきます。

吉本、凱太を支えるようにして送ってゆく。

増田 峠さん。

峠 うん。

増田 わしら、長生きせにゃいけんですね。

まだやらにゃいけんことがいっぱいある。

峠 そうだね。ぼくも今朝からいろいろとあってね。気が沈み勝ちだった。でも、もう大丈夫だ。勇気をもって手術台にのぼれそうだよ。さっき、ぼくの原稿、すこし待ってくれといったろ。あれ、春子にことづけるから、こんどのはすこし長いもんでね。最後の一節がもう少し固まらないと。

増田 ほう題名はなんですか？

峠 「その日はいつか」というんじゃ。「原爆詩集」への批判にもなんとかこたえようと思ってね。この三年間、ぼくが軍事基地の調査に加わったり、被爆者の組織づくりに参加するなかで学んだものをね。できるだけ原爆投下の世界史的な意味の追求へ織りこんでいったつもりなんだ。その叙事的な構成にね。前から温めていた、ほら、紙屋町の交叉点で八月六日に死んでいた少女の話、あれを意図的に組みあわせてみたもんなんだよ。

増田 そりゃ楽しみじゃ。久しぶりに峠さんの力作が読めそうですね。待ってますよ。

峠 ぼくは、ほんとうはね、いつか、広島についての壮大な叙事詩を書いてみたいんだよ。ヒットラーの、第三帝国の暗闇の中で、ドイツの科学者たちがどんなふうに原子力の研究をすすめていったか。第二次大戦の終結へ向けてアメリカの原爆戦略がドイツから日本に対してふりかえられていったときなにが始まったのか。オッペンハイマー事件と原爆工場の資本の形態は？……とにかく、原爆の歴史的政治的背景をきちんと押えた上でね、原子爆弾というものが、人類がはじめてつくりだしたみな殺しの武器であり、そしてみな殺しの武器を必要とする者はいつも侵略者だということ、その使用を決めた瞬間から、侵略の思想が働いていたということを、なんとかはっきりさせたいんだよ。勿論広島の現実の生活をリアルに反映させながらね。

増田 峠さん。燃えてますね。

峠 「その日はいつか」は、その構想の下敷きというか、飛躍台にするつもりで書いてみたものなんだ。だけどね、これは考えれば考えるほど、勉強と同時に足で書く必要を感じるよ。鈴木のおじさんも言うてくれたように、失対の現場にもいきたいし、国鉄の機関区にも、造船の現場にも、どんどん入っていきたいよ。こうなると体力だねえ。ほんとに長生きしなきゃ駄目だ。死ぬわけにはいかんよ。

増田 いや、それ聞いて安心しましたよ。

吉本 （帰ってきて）夕刊買ってきたわ。明るいニュースよ。朝鮮での停戦交渉がいよいよ本格的に動きだしたって。

増田 ほう。（峠と見入りながら）世界の与論がとうとうアメリカを動かしはじめたな。原子兵器も遂によう使わんかったし。気をゆるめんとますます追いつめにゃ。しかし、こうなってみると、あのストックホルムアピールの運動いうのはやっぱり大きな力じゃったんじゃなあ。わしらの力もそこへ加わっとった訳じゃが。

吉本 ほんとね。あたしね、明日また岩井さんに会うて話しあってみるよ。あんなことでくじけてしまう岩井さんじゃない筈だもん。一人で考えこみすぎとるんよ。きっと。

峠 うん。頼むよ。ぼくも病院から手紙だしてみるから。

増田 粘りあいだよ。粘って粘って粘りぬく。それしかない。あ、これね、枕もとにでもおいて眺めて下さい。みんなの寄せ書きなんじゃ（紙に包んだ色紙をだす）岩井君がしゃれたものだすもんじゃけ、わしら

だしおくれてしもうた。

吉本 ほんと。（笑う）

増田 奥さん。明日の朝は何時ですか？

春子 九時の汽車で。

増田 じゃ、そのときまた見送りに。

春子 いいんですよ。仕事があってじゃのに。

増田 なに、大丈夫ですから。じゃ。

吉本 また明日ね。

二人帰っていく。峠、机に向う。

春子 あなた、お茶がはいりましたよ。

峠 （すすって）おいしい。

峠は書きものをつづけている。そのかたわらで、春子はだまって入院の荷物を整えはじめる。

峠 （ペンをおいて）うん。まだ充分じゃないがね。春子、最後の一節だ。（ノートをわたす）

春子 （読む）

たとえ君が小島のようにひろげた手で
死のかなたからなだめようとしても
恥じらいやすいその胸でいかに優しくお
さえようとしても
われわれの心に灼きついた君の屍体の屈
辱が
地熱のように積み重なり
野望にみちたみにくい意志の威嚇により
また戦争へ追いこまれようとする民衆の
その母その子その妹のもう耐えきれぬ力
が
平和をのぞむ民族の怒りとなって
爆発する日が来る

その日こそ
君の体は恥なく蔑われ
この屈辱は国民の涙で洗われ
地上に溜った原爆の呪いは
はじめてうすれてゆくだろうに
ああその日
その日はいつか。

峠 （ポツンと）この詩、イッちゃんにも読んでみてもらいたかったね。

春子 ええ。（増田のおいていった包みをあけて）まあ、あなた、こんなにびっしりと。

峠 ほんとだ。ぼくの好きなオストロフスキーの小説の言葉が書いてある。こりゃ今のぼくの気持にはなによりのおくりものだ。（手にとって読みはじめる）

人間にあって一番大切なもの
それは生命だ
それは人間に一度だけ与えられる
そしてそれを生きるには
あてもなく生きてきた年月だったと
胸をいためることのないよう生きねばな
らぬ
卑しい下らない過去だったという恥に
身を焼くことのないように
生き通さねばならぬ
そして死にのぞんで
全生涯が
また一切の力が
世界で最も美しいこと
つまり
人類解放のための斗争にささげられたと
いい切ることができるように
生きねばならぬ

幕

本誌掲載戯曲上演のために

◇作者の住所

黒沢参吉
244横浜市戸塚区上矢部二三九
＜電話＞（〇四五）811-三二八

栗木英章
457名古屋市南区汐田三丁目四〇
＜電話＞（〇五二）821-三六九

小島真木
420静岡市上足洗町一-四の11
伊藤方
＜電話＞（〇五四二）45-〇〇〇〇

土屋　清
733広島市河原町七番25号202
＜電話＞（〇八三）92-六八〇〇

上演許可に始まり上演成果の報告に終る習慣をつけましょう。作品は作者の分身です。大切にして下さい。

◇上演料

昭和四十七年一月一日改訂
の日本演劇協会規定による

上演一回につき

a 無料公演の場合
1 上演90分以内　千円以上
2 〃　90分以上　二千円以上

b 有料公演の場合
1 入場料三百円以下
上演90分以内　五千円以上
〃　90分以上　一万円以上
2 入場料七百円以下
上演90分以内　八千円以上
〃90分以上一万六千円以上
3 入場料千円以下
上演90分以内　一万円以上
〃　90分以上　二万円以上
4 入場料千円をこえるとき
当事者の談合による

■あとがき■

◇旧臘、三人の方の訃報に接しました。劇団福演の柏原武蔵さん（12月6日）、舞台芸術学院の山川幸世先生（12月23日）、北海道の労演、道演集の育ての親ともいえる鈴木正人さん（12月26日）。西リ演、青年劇場、道演集の皆さんは、最も直接的にこの悲しみを受けとめられたと思います。西リ演では、直ちに、ニュースで、「柏原武蔵」氏特集号を企画しています。あの、むさしさん独得の風貌と才幹は西リ演の名物でした。

小誌も、三人の方に、心から哀悼の意を表します。

◇一九七五年、きびしい年明けでした。手ぶらでは、何一つ明るい材料はありません。七〇演劇行動でスタートしたわれわれのたたかいが、五年目を迎えて、いよいよその質を問われることになりそうです。レパートリイにおける最近の動向一つ見ても、創作劇の実状に照応させて見るとき気薬な答は出てきません。

◇発行所宛御年賀状沢山戴きました。御礼を申上げます。（もも）

演劇会議 別冊4号 一九七五年二月一日発行
定価 三五〇円（送料七〇円）

編集委員　黒沢参吉・こばやしひろし
若尾正也・仲武司・土屋清
岸本敏朗・萩坂桃蓉

発行所　演劇会議発行所
川崎市川崎区渡田四-一一-三
萩坂方
電話〇四四（三三）〇七七五